

3 小 結

清水谷遺跡は諫訪山丘陵西端に立地する集落跡であった。高速道路敷地であるため、その一部を明らかにしたにすぎないが、検出された遺構群を見るに、今回の調査区は集落の最も密集する地区に相当すると思われる。住居跡は古墳時代末～平安時代後期に属するもので、その前半は遺構数が少ないが、ほぼ連続と継続する。

住居跡の分布は南北2群、すなわち安光寺古墳群（註1）の所在する尾根近くの緩斜面に広がる北群と調査区南側にある埋没谷に近い平坦面に広がる南群とに明瞭に別れ、この中央には遺構は検出されなかった。北群は標高75～77mにわたり住居跡15軒、掘立柱建物跡1棟からなり、時期的には真間期が空白である。ほぼ中央に古墳跡があり、その東側には19号住居跡、建物跡に切られており9世紀中頃には墳丘の一部がその構築により削平されていたことが確認できるが、他の国分期の住居跡はこれを忌避するかのように展開しており、依然として住居跡の構築等に際しては、完全に規制力を失っていないことを物語っている。

南群は標高74.5～75mの平坦地に8軒から成り真間期から国分期後半までは連続するが、本遺跡で最も遺構が増加をみせる国分期後半では主体は北群に移っている。

検出された住居跡の中で最も古いのは18号住居跡である。鬼高峰期に特徴的な体部に縫をもつ、いわゆる須恵器模倣坏はみられないが、放射状暗文をもつ丸底坏、口縁部に最大径をもつ長胴の甕およびかえりをもつ須恵器蓋が出土しており、鬼高峰期～真間期に比定できる。蓋は径11cmと小形でかえりは貧弱であり、水深遺跡（中島、小林 1972）40号住居跡、久城前遺跡（宮崎 1978）、諫訪遺跡（増田、小久保 1979）の溝、および瓶蓋神社前遺跡（中村 1980）例にちかく7世紀終末に位置づけられる。

18号住居跡に続く真間期は8、22号住居跡が相当する。両跡とも南群に属し、隣接している。その位置する段階を詳らかにできる程の遺物量に恵まれていない（第22、23図）。

以上の住居跡3軒のほかの遺構はすべて国分期に属する。国分式土器については新久庶跡群（坂詰他 1971）、前内出窯跡（小川、高橋他 1974）報告以後、須恵器坏の底部切り離し技法および二次整形技法、口径に対する底径の法量比の変化などを指標として編年の細分化が進められてきた（高橋 1975、谷井 1976）。そして、現在、終末期の実年代に関しては異論があるが（浅野 1980）、変遷段階の概要については大方の見解は一致しているようである。以下上記の成果をふまえ、出土遺物の編年的位置についてふれてみたい。

清水谷遺跡で出土した国分期の須恵器坏はすべて底部切り離しが回転糸切りによるもので、二次調整が加えられたものは認められなかった。ところが、17号住居跡で出土した口縁部が「く」の字状に開き、肩の張る3個体の甕は、「コ」の字状口縁の甕の出現以前に位置づけられるもので、花影遺跡（今泉 1974）2号住居跡、栗谷ツ遺跡（高橋、会田 1980）第2地点1号住居跡などではこの類に底部回転糸切り後、周辺部ヘラ削りが施された坏が伴出していることから、9世紀前半に比定することができ、清水谷遺跡で検出された平安時代の住居跡中最古に位置する。

17号住居跡に後続すると思われる遺構に3号住居跡、掘立柱建物跡がある。出土遺物（第14、51

図)のうち須恵器坏の口径に対する底径の法量比は0.5以上で新久窯跡群A地点1号、2号窯、D地点1号窯およびE地点1号窯跡付近出土の坏にちかく9世纪中葉に位置づけられる。うち3号住居跡については「コ」の字状口縁の甕を伴うが、須恵器坏は底径が大きいものがまとまっており、古相を示している。

ところで、新久窯跡群の土器について谷井彪氏は9世纪中葉(第3四半紀)に一括されていた資料のうち、C地点1号窯、D地点1号、3号窯跡出土土器について、前者に後続する9世纪4/4期に位置づけ、さらに後出するE地点住居跡出土土器を10世纪2/4期におき、都合3段階にわたる変遷を指摘されている(谷井 1976)。

この新久窯跡第Ⅱ期に相当し、3号住居跡に続く住居跡に4号、10号住居跡がある。坏の底径は口径の約半分ないしそれ以下である。

さて、この段階までの住居跡の展開を見ると、3号、4号住居跡が南群で隣接して並び、これに対応するかのように北群で距離は離れるが10号、17号住居跡が対峙している。3、17号住居跡が時期的に近いことが推察される。以後、南群は5~7号住居跡および井戸跡が続くが、集落の展開は北群が中心となってゆく。

最も新しい段階に1号、5~7号、9号、11号、13号、16号、19号、20号、23号住居跡がくる。この段階は「コ」の字状口縁の甕の消失、器厚の厚い甕、羽釜の出現に特徴づけられる。坏は酸化炎焼成により暗茶褐色、暗黄褐色、赤褐色を呈するものが多くまた土師器風の高台付坏も目立つ。

以下、該期に特徴的な坏、甕、羽釜について分類、概観する。

須恵器坏にはI、口径に対し、底径の法量比が0.5以下のもの(10-3、5)、II、高台付坏でa法量が大きく、体部が内彌するもの(39-5、8)、b、高台が高く、体部が直線的に開くもの(30-3、40-2)、c、高台が低く、幅広、粗雑なつくりで器厚が厚いもの(23-1、26-12)がある。甕にはI、台付甕で「コ」の字口縁の名残りをのこすもの(39-1)、II、ロクロ整形された器厚の厚い小形甕(49-3)、III、器厚が厚く、口縁が外反するもので、外反の強いa(19-4)とゆるやかなb(21-2)がある。IV、ロクロ成形により、器厚は厚く、口縁部が「く」の字状に外反するもの(19-5、30-5)がある。羽釜は口縁部が直立気味で胴は張りをもたず底部に移行するもので、口径に若干の変化はあるが、器形のバラエティーは少ない。口縁部が内彌し、胴部が球形にちかく、鰐が突出する21号住居跡例(47-3)を例外とする。

これらの土器群について該期の遺跡例を参照してみると坏I類は新久窯跡第Ⅲ期に相当するE地点住居跡およびこれと近接しほぼ同時期と考えられるF地点住居跡(駒宮 1975)(註2)出土土器に類例を求めることができる。高台付坏II類についてはa類とb、c類の形態上の差が大きく、またa類が還元炎焼成されているのに対し、b、c類は酸化炎焼成されたものが多いという差異もあり、その間一とりわけa類とc類には製作技法上大きな変化が認められる。a類は16号住居跡出土土器の中にあり、他に台付甕I類が伴出していることから、この段階にあってはやや古く、16号住居跡は4、10号住居跡にちかく、10世纪1/4期に比定されよう。同期には枇杷橋遺跡(駒宮、坂本1973)1号住居跡がある。甕II、III b類は先の新久窯跡第Ⅲ期の遺構で坏I類と伴出している。本遺跡では高台付坏II b、II c類とも伴出(第49図)している。小形甕II類はかつて多摩ニュータウン

ノ^ム87遺跡(谷本 1968)、ノ^ム37遺跡(西家他 1968)で底部の回転糸切り痕、器厚の厚さから国分式土器の概念を逸脱するものとの指摘があったが、その後、類例を増し枇杷橋遺跡28号住居跡、田中前遺跡(市川 1977)13号住居跡、雷電下遺跡(駒宮 1979)、鹿苑神社前遺跡(中村 1980)などからも出土しており、各々形態上さほど変化が見られず「器壁の厚い甕」の定着が進んだ10世紀前半に特徴的な器形と考えることができる。羽釜は上記のように単純な様相を呈し、坏Ⅱb、Ⅱc類、甕Ⅰ、Ⅱb、Ⅳ類と伴出した。羽釜出現の時期については坂本和俊(坂本 1973)(註3)、高橋一夫(高橋 1975)、市川修(市川 1977)、中村倉司(中村 1980)氏等により検討されてきたが、当遺跡では10世紀前葉に考えられ、市川氏の案を追認した。6号住居跡出土の0—53窯式の灰釉陶器(第19図7)もこの時期を支持する。

以上、清水谷遺跡で検出された構造、遺物について種々ふれてきたが、確認できた段階に構造を整理すると次の如くである。

18号→8、22号→17号→3号、建物跡→4、10号→16号→1、5~7、9、11、13、19、20、21、23号
(中島 宏)

註1 安光寺遺跡で検出された住居跡も本集落の一部を構成すると考えている。

註2 駒宮史朗「入間市新久発見の土器」埼玉研究 第26号 埼玉県地域研究会 1975

駒宮氏の指導により、筆者も調査に参加させていただいたが、工事に追われてのあわただしい3日間にわたる緊急調査であった。当時、概に現地形も変わり、調査地区の位置については、前年(1969)に終了していた新久窯跡A~E地点のうち、A地点の西側近くに位置するらしいこと以上は、詳らかにし得なかった。現在、報告書と当時の調査記録、地図を照らし合わせてみると、A、E地点のほぼ中央の丘陵頂部ちかくの南緩斜面に我々が調査した住居跡の位置が想定できた。今、この地区を新久窯跡F地点と仮称しておく。

註3 坂本和俊氏は「枇杷橋遺跡」報告の中で、県北地域の「羽釜の出現を11世紀前半と考えている。そしてその盛期は、11世紀後半から12世紀初頭にかけてであろう。」とされたが、その後、訂正されている(坂本 1976)。

参考文献

- 市川 修 1977 「田中前遺跡」埼玉県遺跡調査会報告書 第32集
小川良祐・高橋一夫他 1974 「前内出窯跡発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告 第24集
駒宮 史朗 1973 「枇杷橋遺跡発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告 第20集
1975 「入間市新久発見の土器」埼玉研究 第26号
西家 純 1968 「ノ^ム37遺跡」多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅱ
坂詰 秀一 1971 「武藏新久窯跡」
坂本 和俊 1976 「大御堂塚下・女塚遺跡発掘調査報告」埼玉県遺跡調査会報告 第28集
高橋 一夫 1975 「国分寺土器の細分、編年試論」埼玉考古 第13・14号
高橋 敦・会田 明 1980 「栗谷ツ遺跡第2地点」富士見市中央遺跡群Ⅱ
谷井 魁 1976 「鶴ヶ丘」埼玉県遺跡発掘調査報告書 第8集
谷井 魁・今泉泰之 1974 「南大塚・中組・鶴ヶ丘・花影」埼玉県遺跡発掘調査報告書 第3集
谷本 銀次 1968 「ノ^ム87遺跡」多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅱ
中島利治・小林重義 1973 「下新田遺跡・荒神脇遺跡・熊野遺跡」埼玉県遺跡調査会報告 第22集
中村 倉司 1980 「鹿苑神社前遺跡」埼玉県遺跡調査会報告 第39集
増田逸朗・小久保徹 1979 「下田・諏訪」埼玉県遺跡発掘調査報告書 第21集
宮崎由利江 1978 「中堀・耕安地・久城前」埼玉県遺跡発掘調査報告書 第15集

IV 安光寺古墳の発掘調査

1 遺跡の概観

最高所 107m を中心に分布する諏訪山古墳群は、南に伸びる舌状支丘が発達し、ここに安光寺古墳群が分布している。

今回は安光寺古墳群中の二基が調査され、隣接して平安時代の竪穴住居跡一軒と、溝状の遺構も検出されている。

遺跡附近の地形は、標高80~82m の痩せ尾根を形成し、西側に開ける水田面の標高は70m 前後で西側に強く切り立ち、東側清水谷遺跡側にはなだらかな傾斜を保っている。

地層は、尾根東側にはロームが残存し、その上に20~30cm の黒色土が発達しているが、西側は傾斜が強いためか、ローム層は流れており、ローム下の白色粘土層が表土直下から現われてしまう。

このためもあってか、1号墓、2号墳共に西側周溝は浅く、一部は表土と共に相当量の土砂が支丘下に流れてしまっているものと見られる。

1号墓は、調査区内尾根上方に位置し、標高82m ライン上に墳籠を形成している。

住居跡は、1号墓よりさらに尾根上位に位置し、尾根背上より東側にゆるやかに傾斜する地に存在し、むしろ清水谷遺跡の西端を形成するものと見られる。

2号墳は、標高80m ライン上に位置し、尾根中央に墳丘を構築しており、周溝東側は、溝で切られている。

なお、当墳南側では、地形が大きく傾斜を増し、尾根上でも先端部に構築された事が窺える。



安光寺1・2号墳（北側から）

2 遺構と出土遺物

(1) 古 墳

1号墓（第61・62図）

東西15.8m、南北13.50mを測り、北側斜面で周溝は切れている。それでも、北東隅を含めコーナーは3ヶ所見られ、周溝先端は浅いながら立ち上がりがしっかりしており、本来斜面部の周溝は構築されていなかったものと思える。

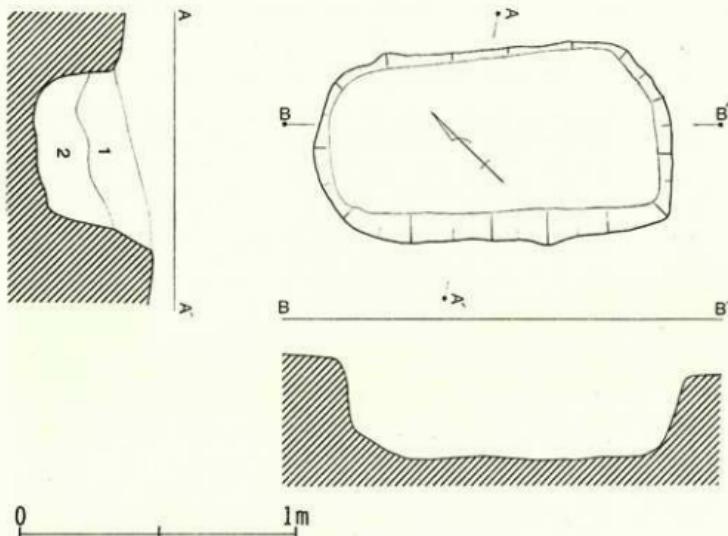
平面プランは、正方形というよりは西側でやや膨らみを持ち、むしろ不整台形ともいべきである。

周溝は、広い東西で1.3m、狭い南側では0.8m前後であるが、周溝底のレベルは一定し、隅が浅くなる部分は見られない。

墳丘は、方台部ほぼ中央に標高82.70mラインが周り、82.50mラインでは方形に走っている。全体として、周溝内のコンタは方形に周り、尾根切断部の東側周溝附近は、コンタが括れている。

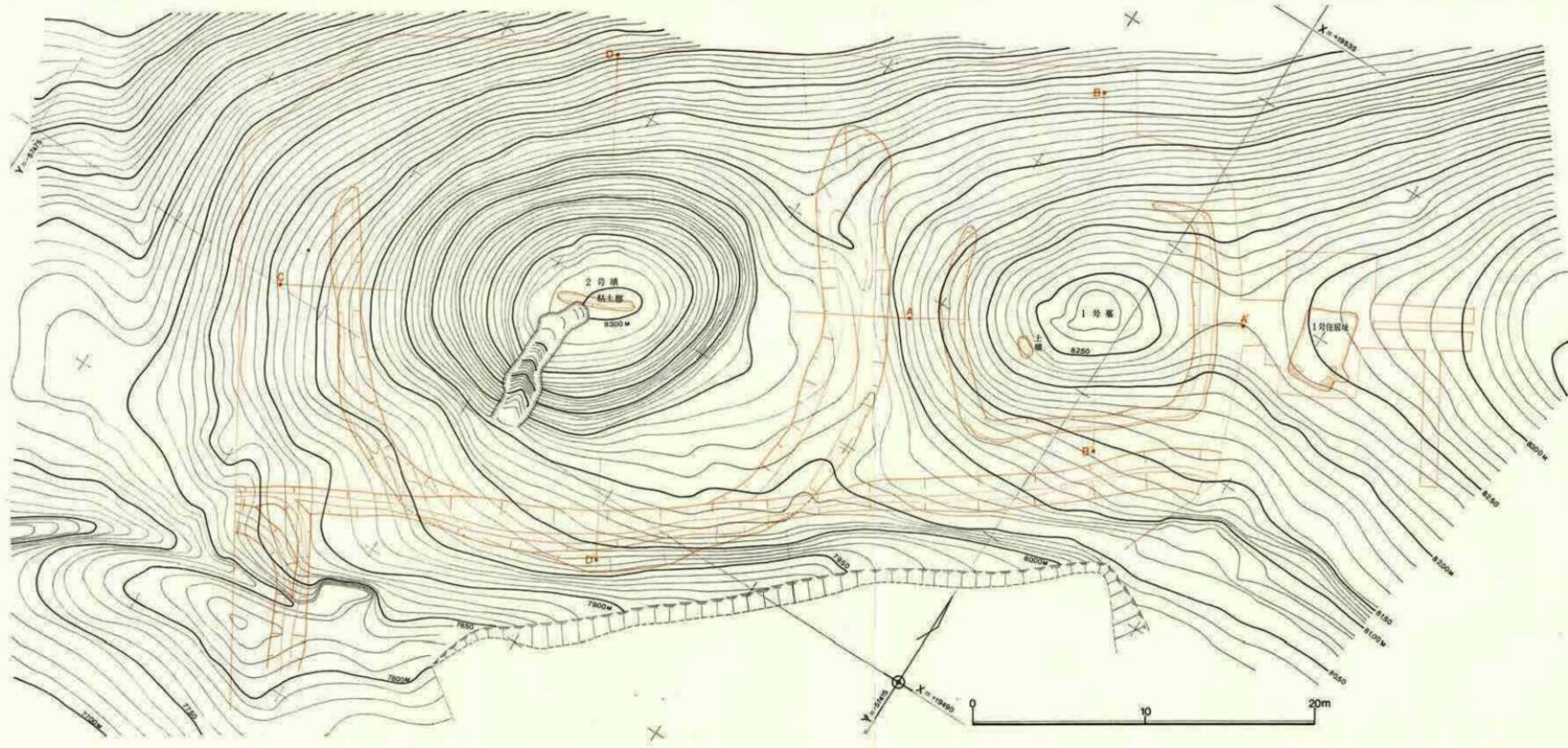
盛土の状態は、墳丘中央部で約70cmを測る。土層は、基盤軟質粘板岩上に一部ローム層が約15cm残り、この上に良くしまった黒色土が堆積しており、これより盛土と見る事ができる。

そして、大部分の盛土は墳丘周辺のロームを削平し、方台部に積み上げ、現在ではこの盛土が流れ、周溝上まで達し、軟質の黄褐色土層として確認されている。

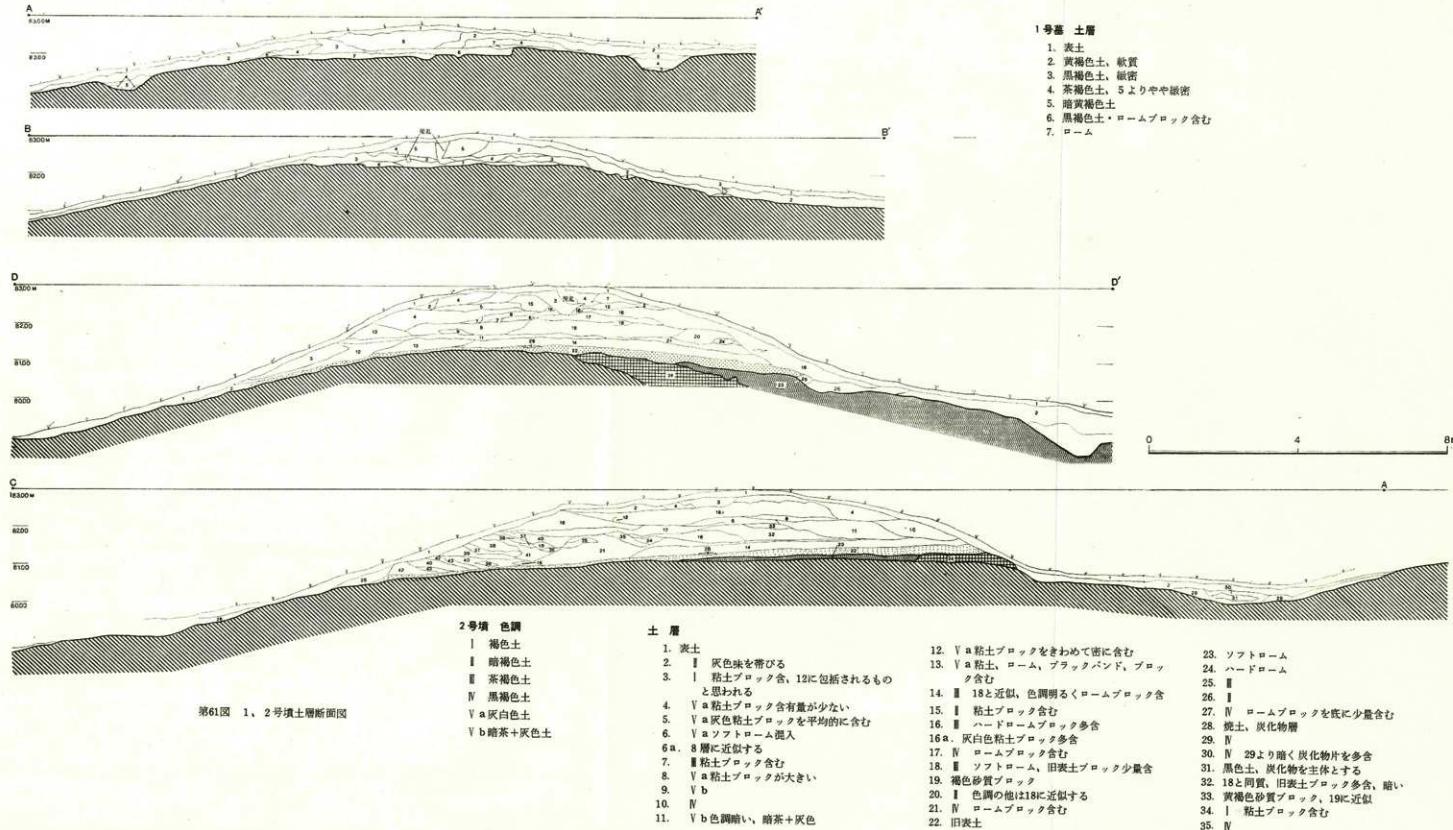


1. 褐色土(ローム粒子混じり) 2. 褐色土(ロームブロック混じり)

第62図 1号墓土壤



第60図 安光寺古墳全測図



第61図 1、2号墳土層断面図

いすれにしろ、黒褐色土層は水平に積まれており、これをもって墳丘の最初の盛土と見る事もできる。主体部と思われる土壤が方台部南側から検出されている。

規模は、長辺 1.3m 、短辺 0.7m を測り、長方形で基盤を 0.7m 挖り込んでいる。壁の立ち上がりは垂直に近く、しっかりした掘り方である。

遺構内覆土は、ロームブロックが全面に堆積しており、土壤墓の土層を示す。しかし、残念ながら土壤内からの出土遺物は見られず、土壤墓的性格である事を決めるには資料不足の感もあった。

なお、墳丘中土壤内からは出土遺物は見られなかつたが、東側周溝内から、脚部欠損の高杯形土器が溝底に接して出土しており、幸いにも本1号墓の年代を決定する唯一の資料となつた。

1号墳出土土器（第63図）

口径 23.0cm を測り、杯底部が比較的大きく、口縁部は大きく発達している。

口舌部の整形は、木口状工具を当てシャープな造りを示し、杯底部段もしっかりしている。

内外面の整形は、ハケ整形の後ナデ付けを施しているため、部分的にハケが消えている。

杯内外面は、規則的に縦位の暗文風ヘラ磨きが見られる。

全体的に黄褐色を示し、焼成は良好。胎土は精選されている。残存率65%。

2号墳（第60・61図）

2号墳は、丘陵西側が急傾斜を示すためか、周溝は半円形に周り、内径 27.0m 、外径約 32.0m を測る。周溝は西側で切れるが、先端部の掘り方はしっかりしており、当初より斜面側の周溝は構築されなかつたものと思われる。

周溝全体のプランは、南側で溝で切られてはいるが、1号墓寄りと西側は直線を成し、南西コーナーが円というよりはコーナーがきつい感じを示し、「コ」の字的プランと見る事も可能である。

周溝の幅は、丘尾切断の意味もあってか、1号墓寄りでは上幅 3.7m と広く、南側では前述の様に溝で切斷されているため不明な点が多いが、南西溝は幅 1.5m と狭い。

墳丘のコンタは、墳頂部に 8.30m が長椭円形に周り、この形態は 8.10m ラインまで同様に周っている。1号墳側のコンタは、周溝が埋まっているとはいゝ、大きく括れ、1号墓との区画を明瞭にしている。

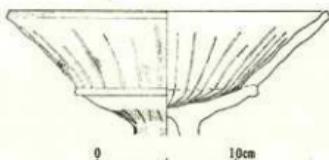
墳丘には、南側に幅 2.0m 、長さ 9.0m に亘って地山までの大きな擾乱が入り、一部、墳頂部の主体部に及んでいた。主体部は、全長 4.36m 、幅 0.5m を測り、粘土梯と見られる。

粘土は黄褐色土層の上に厚さ $3\sim 5\text{cm}$ 累ぎ詰め、その上に木棺を置き、周囲を厚さ $20\sim 30\text{cm}$ ほどで被ったものと見られる。

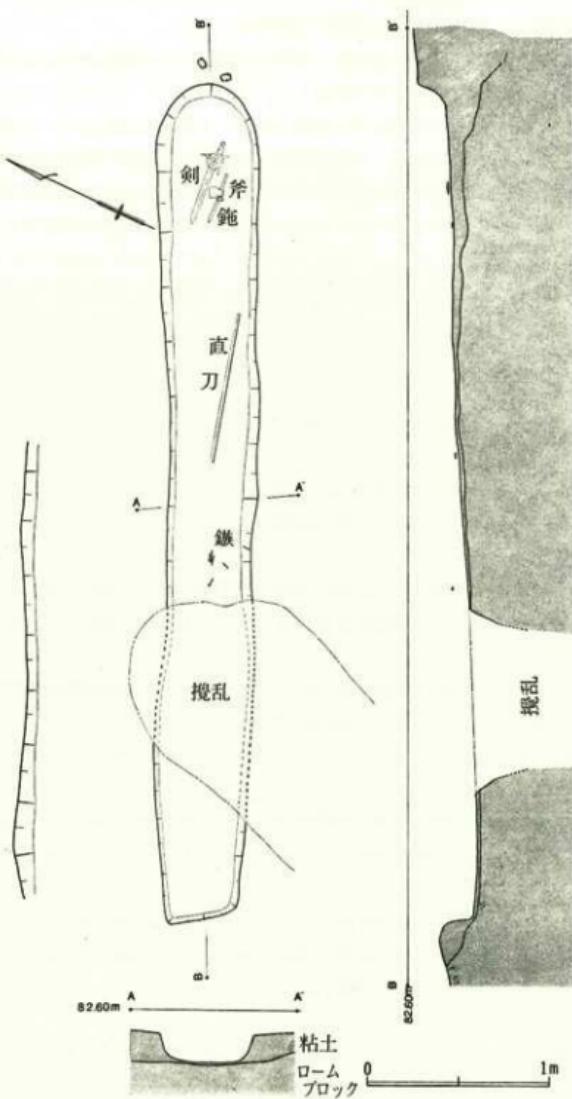
なお、頭部側の東端には $5\sim 7\text{cm}$ ほどの自然石が数個検出されているが、用途不明である。

副葬品としては、東側に鉤を西に向けて、劍と鏡が平行して置かれ、この間に鉄斧が見られた。

梯中央よりやや東寄りに前者と同方向に向けて直刀が、西寄りから鉄鎌が一括して検出されたが鎌の方は様々であった。



第63図 1号墓出土土器



第64図 2号墳主体部

なお、櫛内出土の玉類は、主体部覆土の全てを鏟にかけた時点で検出されたもので、その出土位置は不明である。

墳丘構築方法は、洪積層である軟質粘板岩、ハードローム、ソフトロームの順に堆積が見られ、岩盤に相当する粘板岩が尾根西側に見られ、清水谷遺跡側にはロームが残存している。

これら三層の上面には、黒褐色土層が墳丘下全面に約20cmの厚さで敷かれており、当黒褐色土を設ける段階で地山前者三層を整形しているものと思われる。又、この黒褐色土上面には厚さ5cm、広さ50cmに亘って焼土が見られ、墳丘構築時における祭りの一端を窺う事ができる。

これ以上の土層は、ソフトローム、ロームブロック、粘土、黒褐色土層がほぼ水平に盛られており、主体部粘土櫛の附近では、多量の粘土が検出されている。

なお、墳丘南側では、ロームと黒褐色が交互に墳丘側に傾斜を保って盛土されており、造り出した感を受ける。しかし、基盤上の黒褐色土層もここまで広がっており、全体の土層が水平堆積が多いのに反し、部分的ではあるが、特異な様相を示している。

2号墳出土土器

高杯（1～3）1は外面荒れた器質を呈し、弱い段を有する。杯底部は、木口状工具でナデ付けられている。

赤褐色を示し、焼成は極めて良好。残存率は25%。

2は脚付け根が極めて細く、内面にはシボリ痕が見られ杯底部に弱い段を有する。内外面共に丁寧にナデられており、1次整形は不明である。

胎土には小砂を含むが、極めて焼成が良く硬質である。色調茶褐色。残存率25%。

3は脚の小片。内面にはシボリが残り、外面は継位の丁寧なヘラ磨き。外面丹塗。残存率5%。

4は壺の底部と見られ、内外共に荒れている。小砂を含むが、焼成は良好。残存率10%。

安光寺2号墳主本部副葬品

鐵鎌（1～22）

1～13は三角形式に属し、鎌身2.2cm、身幅1.5cm前後を測り、笠被を有し、残存部から推定するに基は6cm程を示す。笠被端、茎端は関風にやや狭まり、断面円形、笠装着部は方形に造られていく。

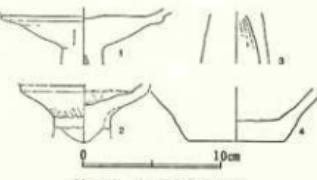
3・4・6・9・10は、腸抉風で、身断面は菱形を呈するのを特徴とする。

14～22は、尖根式の劍形とも称すべきもので、鎌身2.6cm、身幅1.0cm前後を測り、茎、笠装着部共に断面四角形を呈する。鎌身は片面のみに明瞭な鎌を有する。

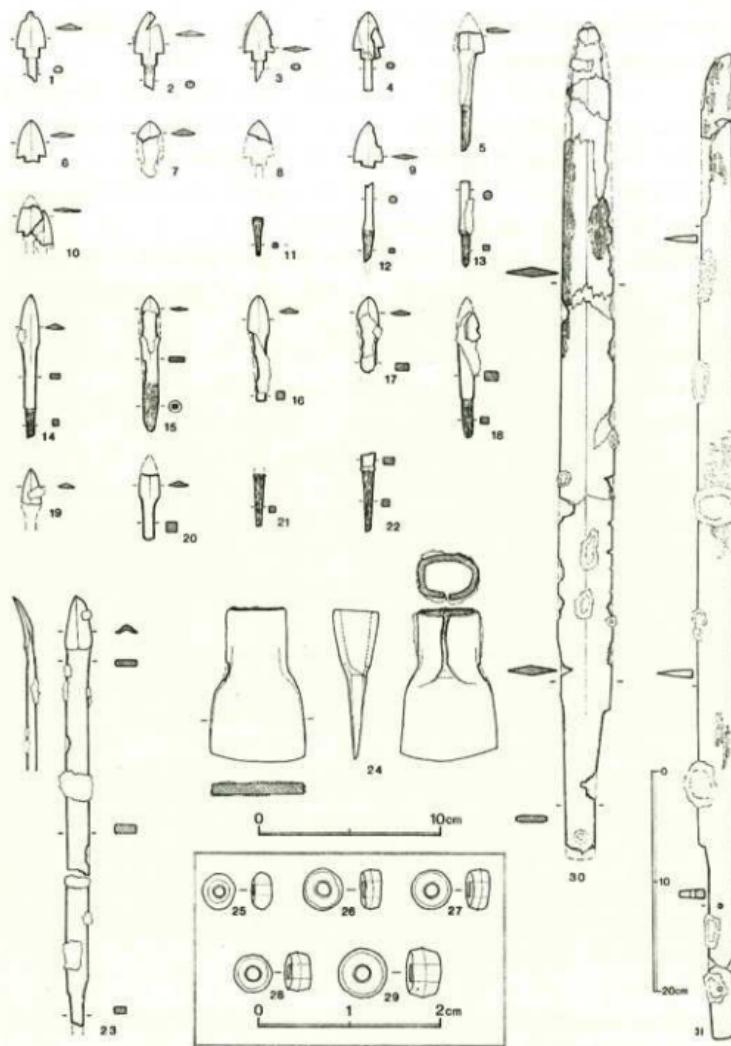
箒（23）

身の長さ2.9cm、身幅中央で1.4cm、裏書き形態を呈する。現在基は25.0cmを測り、茎端部で関風に幅狭く、先端が欠損しているため形態は不明。

茎の幅は身に近い部分で広く、なおかつ薄い。おそらく、刃部を造り出すために叩き、薄く伸ばして身としたものと考えられる。



第65図 2号墳出土土器



第66図 2号墳主体部出土遺物

なお、刃の減り具合は左側が大きく、刃部使用方法の頻度を暗示するものと見られる。

鉄斧 (24)

全長 8.2 cm を測り、有肩形の鍛造鉄斧で比較的保存が良い。袋部合せ目は丁寧な造りを示し、内部には木質部を残している。

刃部に関しては鋒が進んではいるが、片刃の様子は窺える。重量 100 g。

玉 (25~29)

25はガラス玉、26~29は白玉で、28、29は軟質の粘板岩と思われる。26を除き、算盤玉は矮縫を残し、色調、形態といい古手の様相を呈している。

図版番号	種類	径 (cm)	幅 (cm)	内径 (cm)	色調	備考
25	ガラス玉	3.8	2.5	0.6	淡紺	
26	白玉	4.3	2.1	1.4	淡灰色	やや不定形 矮縫弱い
27	ク	4.4	1.2	1.4	青灰色	両面を研磨
28	ク	4.2	2.5	1.5	ク	ク
29	ク	5.3	3.2	1.5	淡灰色	風化が激しい

劍 (30)

鉾と柄頭の一部を欠損しているが、全長 46 cm 前後測るものと推定される小形品である。

現存する身の長さは 37.2 cm、茎は 7.5 cm を測り、重ねは 0.5 cm で、鉾はしっかりとしている。

茎から身に移る関部分は片闊形を呈し、茎には目釘孔が残っている。

柄は両面に木質が附着しているのみで不明であるが、木質鞘の存在が予想され、他の例の様な網布等による埋納方法は認められなかった。

直刀 (31)

刀身 72.0 cm、茎 17.5 cm、全長 89.5 cm を測り、目釘 2 孔を数える平作りの直刀である。

背は平背造りで直線を成し、背幅 0.7 cm、鉾は所謂古代作と言える。

刀身には柄の鞘の一部木質が附着しているが、輪金物等は見られず、柄頭、柄間部の構造は不明。

(増田逸朗)

(2) 住居跡

1 号住居跡 (第67図)

長辺 4.7 m、短辺 3.0 m を測る不整台形を呈し、東南壁寄りにカマドを有する。

住居跡の掘り方は、地形が南に傾斜しているため浅く、北側は比較的壁高が認められた。

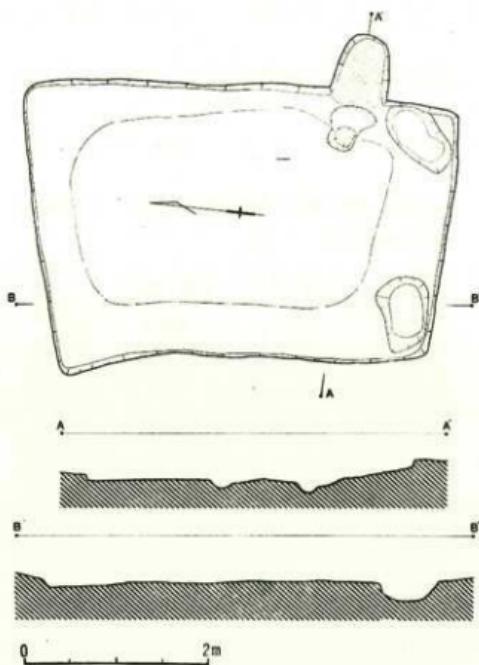
床面は壁から 50 cm の範囲はともかくこれ以内は良く踏み固められており、遺物はほとんど床面直上から検出されている。

カマドは、壁外にも掘り込まれ、カマド内から片岩が検出されており、カマドに使用されたものと思われる。カマド前面のピット内には灰が混入しており、焚口部の一構造と考えられる。

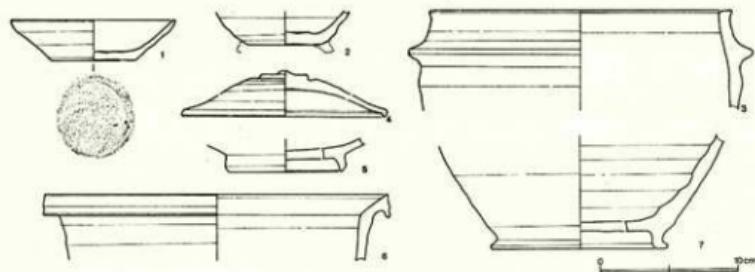
なお、南面二ヶ所の浅いピットはあるいはその位置から貯蔵穴とも推定される。

1 号住居跡出土土器 (第68図)

遺物は少く図示した土師器壺のほかは少片である。推定口径 13.2 cm。体部中程でわずかに外反し



第67図 1号住居跡



第68図 1号住居跡他出土土器

口唇上には細く、鋭い沈線が一条めぐる。内面は平滑であるが外面は凹凸が目立つ。底部は磨滅が著しい。胎土に夾雜物は含まれず焼成良好、淡赤褐色を呈す。

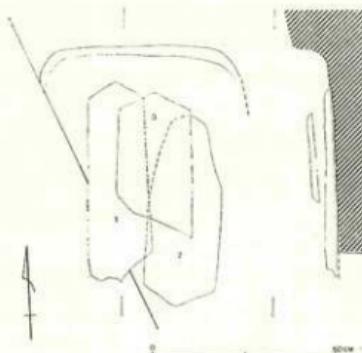
安光寺1、2号墳周辺から出土した平安時代以降の遺物を一括する。1号住居跡出土土器（第68図1）を除き表土から出土したもので清水谷遺跡1号溝の東側周辺からの出土が目立つ。

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	1	口径 12.0 器高 2.9 底径 6.1	体部は直線的に開く。口唇直下で外側にわずかに肥厚しているため口縁断面は外削き状を呈す。	ロクロ成形。底部回転糸切り、ロクロは逆時計まわり。胎土に夾雜物は少く、焼成良、淡赤褐色。	口縁部劣化
杯	2	推定高台径 7.0	底部が厚なつくり、体部は直線的に開くが凹凸が著しい。高台は貼付面から完全に剥落している。	酸化炎焼成で軟質。底部回転糸切り。貼付高台。体部ロクロ痕顯著。胎土に多量の砂粒を含む。内面黒色、外面黑色、茶褐色。	底部のみ
羽釜	3	推定口径 21.0	口縁部わずかに内彎、口唇上は平坦。鋤先端は丸味をもっている。	内外面ともよくナデられている。器面ややザラつくが焼成良、赤褐色、茶褐色を呈す。	口縁部劣化
須恵器蓋	4	推定口径 15.0	つまみは扁平で非機能、削り出しによる作出。天井部から擦部へ直線的に移行。	天井部ヘラ削り、灰色、焼成良。	天井部のみ
灰釉高台付杯	5	推定高台径 7.5	高台は高く先端はとがる。灰釉は刷毛塗りによると思われ、見込みの部分は省かれている。外面では高台部まで流下している部分あり。	胎土は灰白色、緻密、焼成良。	底部劣化
須恵器甕	6	推定口径 25.0	口縁部大きく外反し、口唇部上下端は尖る。口縁くびれ部内面は、くの字状を呈し稜をなす。	器内外面に気泡のぬけた小孔が目立つ。灰色、黒褐色、焼成良好、緻密。	口縁部劣化
甕	7	底径 12.6	ほぼ直線的に底部に移行。高台接地面は平坦で、端部は外側に張る。	貼付高台。内面は整形時の凹凸が著しい。灰色、焼成良好、緻密。	底部劣化

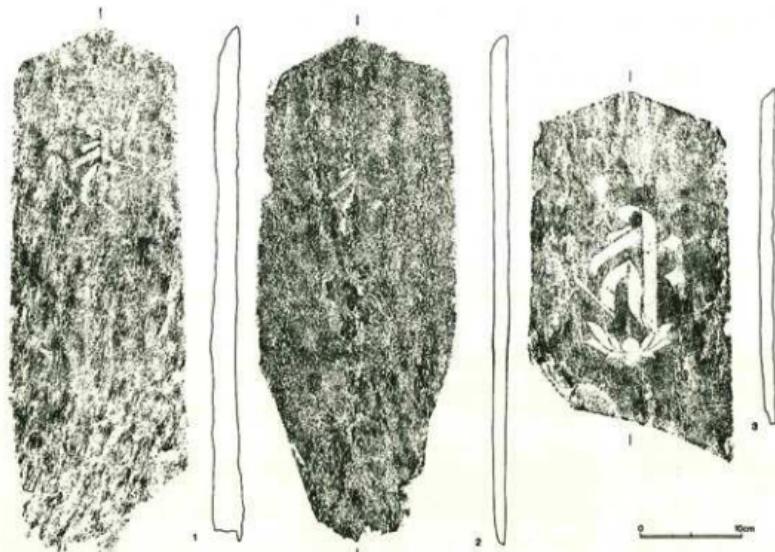
(中島 宏)

(3) 板碑 (第69・70図)

2号墳南北トレンチを調査中、南麓断面に板碑がかかった。拡張して精査したところ、墳丘を掘り込んだ落ち込みが確認され、3枚の板碑が重ねられた状態で検出された。落ち込みは墳頂側で長さ53cmにわたり検出したのみであるが、それによると長軸をほぼ南北にもち隔丸長方形を呈すると推測され、板碑の長さ、幅に対し若干の余裕をもつ規模と考えられる。深さは10cm底は南に傾斜している。板碑は1が墳底に接し2、3の順に重なって埋置されている。うち1、3は頂部を北に、2は南に向いている。いずれも表面を上にしていた。



第69図 板碑出土状況図



第70図 板 碑 拓 影 圖

1 主尊は阿弥陀種子でわずかに二条線、額の線が觀察できる。額部は突出していない。また蓮台、年号は無い。全長50.5cm、幅16.3cm（二条線直下）、17.0cm（基部）、厚さ2.1～3.1cm。

2 主尊の阿弥陀種子がかすかに判別できる。二条線、蓮台、年号は見られない。全長50.0cm、幅18.4cm（上部）、19.1cm（基部）、厚さ1.1～1.6cm。

3 主尊は阿弥陀種子。彫り方は薬研彫りではなく丸彫りで、3基のうちもっとも鮮明である。二条線を欠く。全長32.9cm、幅19.0cm（上部）、20.0cm（下部）、厚さ1～1.4cm。

以上の3基の板碑はいずれも年号を欠き時期を詳らかにし得ないが、1、2は小形であり、種子の彫り方、また種子が蓮台を伴わないなど板碑が消滅する頃（室町時代後期）の様相を示している。

3は蓮台の開き具合、種子の彫り方から南北朝まではさかのぼり得ず、室町時代前期頃に比定されよう。

（島村範久）

安光寺遺跡出土石器一覽

番号	種別	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	番号	種別	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質
1	尖頭器	5.0	1.8	0.6	5	硬質頁岩	8	石斧	5.1	6.0	2.2	76	頁岩
2	尖頭器	4.7	2.2	0.8	8	チャート	9	石斧	7.3	5.1	1.2	48	砂質頁岩
3	鋸齒状石器	2.5	3.4	0.6	5	黒耀石	10	剥片	5.7	6.5	1.4	39	硬質砂質頁岩
4	細石刀	2.4	1.1	0.4	1	黒耀石	11	剥片	5.6	6.9	0.9	44	硬質砂質頁岩
5	石斧	8.1	5.4	2.1	80	砂質頁岩	12	剥片	4.7	2.9	0.8	11	砂質頁岩
6	石斧	8.3	5.0	1.5	74	中粒砂岩	13	石鐵	1.9	1.7	0.4	1	チャート
7	石斧	9.5	5.9	1.4	89	砂質頁岩	14	石鐵	1.9	1.4	0.2	1	チャート

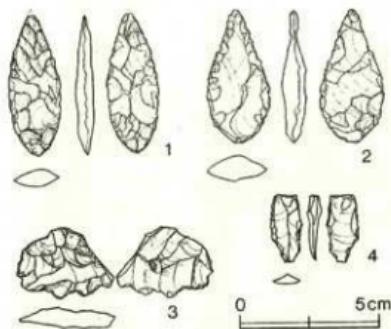
(4) 先土器～繩文時代の遺物

i 石器 (第71～73図)

本遺跡からは計18点の石器が出土している。これらの石器は、調査の主体である2基の古墳を調査した折に、覆土あるいは周縁等から出土したものである。したがって、本来の包含層は不明である。おそらく、古墳構築時あるいはそれ以降の時期に擾乱を受けたものと思われる。該期の遺構も検出されておらず。また、砂片等も出土していない。

時間的にもやや幅があると考えられるが、以下に一括して説明を加える。

尖頭器 (第71図1・2)



第71図 石器 (1)

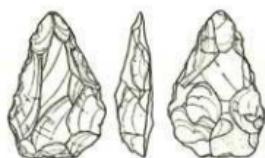
1は木葉形を呈した両面加工の尖頭器である。最大巾は身の中央にあり、基部は尖端部に比してやや丸味を帯びる。両面とも風化が進行しており詳細は不明だが、階段状剥離に近い調整加工が施されており、周辺部の細調整は丁寧である。側縁部は鋸歯状を呈し、横断面はレンズ状である。先端部を僅かに欠くが、ほぼ完形で形の整った優品である。長5.0cm、巾1.8cm、厚0.6cm、重5.0g、硬質頁岩製。2は横長の剥片を素材とした木葉形尖頭器。中位から基部にかけて巾が広く、丸味をもつ。尖端部は側辺に浅い調整剥離を加え、細身に仕上げられている。両面とも、素材として剥離された当時の大きな剥離面を残している。厚さは一定ではなく、先端部がきわめて薄く、中位から基部が最も厚い。特に厚さは調整せず、先端部の両側縁を片面から入念に調整し、尖頭器として形を整えている。1とは形態、剥離技術が異なる。丁寧なつくりとはいがたいが完形品である。長4.7cm、巾2.2cm、厚0.8cm、重8.0g、チャート製。

鋸歯状石器 (第71図3)

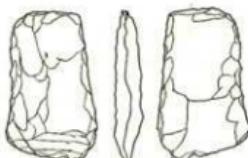
1点のみ出土した。やや縦長の剥片を素材として用いている。両面とも大小の剥離面がみられるが、バルブの除去等の厚さ調整のためと思われる。剥片の最も長い一边に、片面からの調整加工で鋸歯状の刃部を作出している。刃部には刃こぼれ状の使用痕が認められる。さらに、頭部および末端部にも、僅かではあるが細かな使用痕がみられる。作出した刃部だけでなく、鋭い縁辺部はすべて使用されたものと思われる。長2.5cm、巾3.4cm、厚0.6cm、重5.0g、黒耀石製。

細石刃 (第71図4)

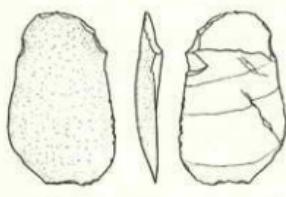
両側縁が平行し、片面中央に1本の稜が走っている。細かな調整加工が両側縁に沿ってみられる中位から末端にかけての部分が特に入念に調整されている。打撃面は平坦打面と思われる。細石刃としては大形であり、小石刃とした方が良いかもしれない。しかし、単独では使用に耐えうるものとは考えられず、組合せ道具の一員と考えた方が妥当であろう。長2.4cm、巾1.1cm、厚0.4cm、重



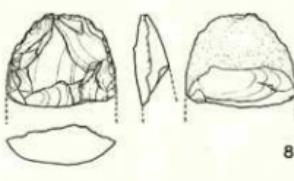
5



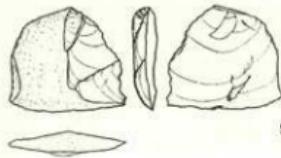
6



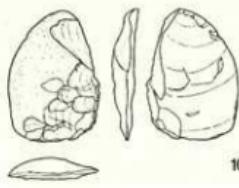
7



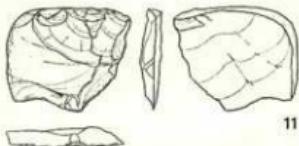
8



9



10



11



12



第72図 石 器 (2)

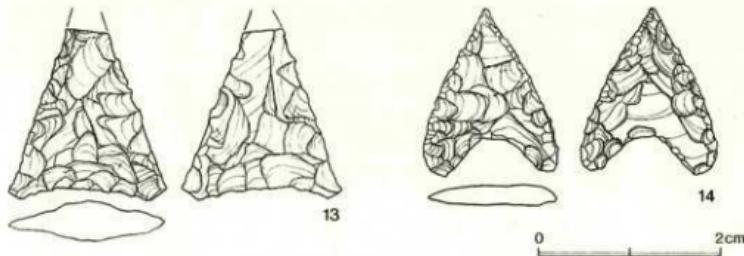
1.0g、黒曜石製。

打製石斧（第72図5～9）

5点出土しているが、それぞれ形態を異にする。5は両面とも周辺部からの形成剥離で、尖頭器状に形を整えたもの。片面はほぼ平らで、横断面が三角形を呈する。直刃で、若干の使用痕が認められる。刃部に自然面が残され、刃部のやや上位に最大巾をもつ。横長の剥片を使用している。長8.1cm、巾5.4cm、厚2.1cm、重80g、砂質頁岩製。6は風化がすんでおり詳細は不明。側辺はほぼ平行するが、刃部付近でやや広がる。長方形に近い短冊形を呈した石斧である。周辺部に調整剥離が施され、刃部はかなり使用痕が認められる。長8.3cm、巾5.0cm、厚1.5cm、重74g、中粒砂岩製。7は成形、調整剥離は一切みられず、主剥離面、自然面を大きく残している。石斧というよりも、それ自体は大形の剥片である。しかし、平面・断面の形態は石斧そのものであり、末端部に使用痕が認められることから石斧とした。長9.5cm、巾5.9cm、厚1.4cm、重89g、砂質頁岩製。8は大部分を欠損しているが、おそらく両側辺が平行する短冊形の石斧と考えられる。横長の剥片を用いており、中央に主剥離面がみられる。成形・調整剥離は自然面の側から一方的に行なわれている。片面には自然面をそのまま残したものであろう。周辺部の細部調整は丁寧である。縁辺部に使用痕とみられる細かな剥離痕がみられる。破損後、他の用途に転用されたかもしれない。長5.1cm、巾6.0cm、厚2.2cm、重76g、頁岩製。9は梢円形を呈した縦長の剥片を用いたもの。調整剥離は主剥離面側から施され、刃部と片側辺に集中している。刃部はゆるい弧を描き、使用痕が認められる。長7.3cm、巾5.1cm、厚1.2cm、重48g、砂質頁岩製。

使用痕のある剥片（第72図10～12）

10は棘面を直接打撃して得られた剥片で、主剥離面側から片側辺に3回の打撃を加えて、鋭いエッヂを作出したもの。打撃が加えられた側辺に沿って刃こぼれ状の使用痕が認められる。頭部および片面の大半に自然面を残す。長5.7cm、巾6.5cm、厚1.4cm、重39g、硬質砂質頁岩製。11は正方形に近い剥片。打撃点から側辺にかけて帯状に自然面を残す。バルブは除去されている。末端部に2回の剥離が加えられ、鋭いエッヂを作出し、使用したものである。細かな使用痕がみられる。長5.6cm、巾6.9cm、厚0.9cm、重44g、硬質砂質頁岩製。12は縦長の剥片である。頭部に自然面が残されている。特に調整は加えられておらず、両側縁に使用痕が認められる。長4.7cm、巾2.9cm、厚0.8cm、重11g、砂質頁岩製。



第73図 石 器 (8)

石鏃（第73図13・14）

2点出土しているが形態を異にする。13は二等辺三角形に近い形態のもので、基部が僅かに湾曲する。両面に施された成形剥離で形と厚さを整えている。縁辺部の細部調整は片面に顕著である。先端部を僅かに欠く。長1.9cm、巾1.7cm、厚0.4cm、重1.0g、チャート製。14は基部に深い抉りがあるもの。抉りは主として主剝離面側の調整加工による。縁辺部の細部調整は丁寧で、鋭い先端部を作出している。側縁は鋸歯状を呈する。長1.9cm、巾1.4cm、厚0.2cm、重1.0g、チャート製。

本遺跡出土の石器について略述してきたが、18点と量的にも少ない上に、墳丘等から出土したものであり多くを語ることはできない。これらの石器と共に、早期から後期にいたる縄文土器片が散発的に出土しているが、量的にも少なく時期決定の目安とはならない。ここでは一応、第71図に示した1～4の石器を先土器時代終末～縄文時代初頭にかけてのものとして考え、他のものを縄文時代早期の所産としておこう。先土器時代については明確さを欠くが、1点の細石刃と尖頭器を目安とした。当該地域での先土器時代資料は少なく、東山遺跡（水村他1980）で細石刃核・細石刃が少量出土し、田端前遺跡（鈴木他1979）で彫刻器等が出土しているにすぎない。隣接する北坂遺跡でも彫刻器とナイフ形石器が出土しているが、それらを合せても微々たるものである。しかし、それらの石器群がほとんど先土器時代終末期のものであることは興味深い。細々とではあるが、先土器時代終末期の人々の生活痕跡がみられ、その後西谷遺跡（栗原・小林 1961）をはじめとする早期の遺跡が残される。時間的に空白の部分があり、当該地域の早期の諸遺跡とどのようにつながるのか不明な点が多いが興味ある問題である。

また、当該地域はいわゆる先土器時代の遺跡群集地域から外れており、過疎地域の様相を呈している。分布調査はかなり精力的に行なわれているにもかかわらず、先土器時代遺跡はきわめて少ない。このことは、火山灰の降下地域圏の外にあるということと無関係ではあるまい。

いずれにしても、当該地域では空白に近い状態の時期の資料であり、今後の増加を待って再検討されるべきであろう。

第72図～第73図の資料は縄文時代早期の所産とした。打製石斧5点、使用痕のある剥片3点、石鏃2点がある。これら10点の資料がすべて同一時期のものか否か不確定な要素が多い。個々の石器を検討すると、隣接する北坂遺跡の資料と近似しており、また、該期の土器も出土していることから早期の所産としておいた。あるいは北坂遺跡のひとつつのブロックとして存在した可能性もあるが詳しい分析がなされておらず、ここでは一応切離して考えておいた。

（水村孝行）

引用・参考文献

- 栗原・小林「埼玉県西谷遺跡出土の土器群とその編年的位置」考古学雑誌47-2 1961
鈴木敏昭ほか「東谷・前山2号墳・古川塚」埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集
水村孝行ほか「甘粕山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第30集 埼玉県教育委員会 1980

II 繩文土器（第74図）

1、2号墳の封土・表土から総計140片が出土している。早期から後期にわたりⅣ群（縄之内式）が88片と主体を占める。以下、時期、型式ごとに報告する。

I群 早期を一括する。押型文土器（1類）、撚糸文系土器（2類）、条痕文系土器（3類）がある。

1類（1～3）

山型押型文土器（1、2）および共伴すると思われる縄文の土器（3）を本類に含める。1は継位に全面施文されている。原体端は^二はす^二に削られており、径は5.5mm。6条単位、胎土に微砂粒、片岩粒を多く含むが焼成は極めて良く堅緻。表面暗茶褐色、内面赤褐色を呈す。2はわずかに空白部をおいて継位施文されている。原体に彫刻された条の幅は広く最大2.5mmを測る。振幅の長さは不規則である。単位は5条以上。赤褐色を呈し焼成良好。3は口線上部でわずかに外反する深鉢口縁部片。口唇部は角頭状を呈し、直下から2段にわたり縄文RLしが横位に施文されている。縄文は条が太く、節も大きい。施文は浅く空白部が目立つ。内面は良くなされ平滑になっている。

胎土に1.5～2mmの大いな小石を多く含み器面に目立つ。焼成普通、器表面は黒褐色、内面は暗茶褐色を呈す。以上のように3は口唇部形態、縄文の原体、施文方向、内面の整形、胎土から2類とは明瞭に区別される。

2類（4、5）

4は口唇部がわずかに肥厚し、ゆるやかに外反する深鉢口縁部。口唇直下とくびれ部以下に撚糸文が施文されている。原体はしか。胎土に長石、石英の微粒を含む。焼成良好、表面暗茶褐色、内面茶褐色を呈す。5は絡条体条痕が施されている。内面には木口状原体による整形痕が観察される。胎土に小砂、多量の片岩（最大8mm）を含む。焼成は良く表面茶褐色、内面赤茶褐色を呈す。4、5との広義の稻荷台式に比定されよう。

3類（6～8）

条痕文系土器。6、7は同一個体で表裏に浅い条痕が斜、横走する。小石、砂粒を多く含むが鐵雜の含有量は少く焼成は良い。赤褐色を呈す。8は表面に縄文RL、内面は条痕が施されている。底部近くの破片で表裏とも継位に施文されている。

II群（9～11）

諸磯式土器を一括する。9、10は同一個体で浮線が貼付されている。10は剥落した部分が目立つがモチーフの一部がみられる。浮線上は無文のまま。胎土に小砂、片岩粒を含む。黒褐色、暗茶褐色を呈す。11は縄文RLしが施され部分的にLRが加えられ羽状を呈している。内面は^二へらみがき^二状の整形が施されている。表面赤褐色、内面黒褐色。

III群（12）

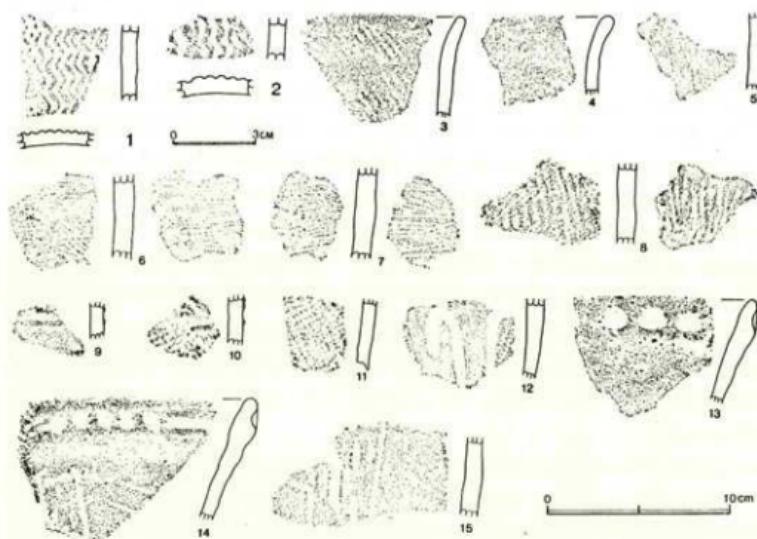
加曾利E式土器で幅広の沈線により上端の連結する懸垂文間に^二の字状の懸垂文が施されている。E式に比定される。

IV群（13～15）

13～15は同一個体で図示したほかに同個体小破片がかなりある。大形深鉢で口縁部には沈線がめ

ぐり、指頭による凹文が施されている。胴部には列点が加えられた変形「J」字文が施文されている。称名寺式のモチーフを残した縄之内I式に比定されよう。

(中島 宏)



第74図 縄 文 土 器

3 小 結

安光寺古墳群は、諏訪山古墳群の一支群を成し、諏訪山丘陵の南支丘尾根上に立地する。

おそらく、当尾根上の古墳は2号墳をもって最下位とし、清水谷、又は2号墳南方に広がる丘陵裾部が、現在は桑園となっていることから、低墳丘の古墳跡が存在する事は十分予想される。

1号墓は、一辺15.8mを測る方形台状墓と考えられ、丘陵尾根をうまく利用している。盛土は僅か70cmほどであるが、周溝立ち上がり部から現在の墳頂まで1.30mで、盛土の流土を考慮すれば、構築当初の見かけの墳丘は1.5m以上を測ることになる。又、盛土の方法は、周溝から1.0~1.5mほどフラットな面を有し、ここから墳丘としており、現在確認できるソフトロームの褐色土層は盛土から流れたものと見ることが可能である。周溝から一度平坦面を有し、ここから盛土を想定できる一号墓は、視角的には現在の墳形からは想像できない程の高さを有していたものと思われる。

埋葬施設は、周溝内、方台部中央部からは発見されず、南側から検出された土壙は、周溝方台部周辺に平坦部を有し、地山が露出していた事を想定すれば、墳麓に位置したことになる。しかし、その規模は長辺1.3m、短辺0.7mほどで成人の伸展葬用としては小さ過ぎる感もあり、覆土こそ土壙墓的であるが、本墳の一義的埋葬施設とは考えられない。おそらく、前述する構築方法等から推定される盛土の高さからして、主体部は方台部中央盛土中に十分埋葬することができたものと見られ、木棺直葬の可能性は十分考えられる。

出土遺物としては、北側周溝内から土師器高杯形土器が出土している。これは、少なくとも和泉式の段階の一群には存在せず、五領末~和泉I式の時期にその年代を求める事ができる。よって、その実年代は、5世紀の第2四半期以前とする事が可能である。

2号墳は内径27mを測る円墳で、1号墓側の周溝は全体から見ると極めて広く、丘尾切削をかなり意識している。盛土は、基盤から1.8mほどであるが、周溝立ち上がり部から墳頂までは、3.4mを測り、見かけはかなりの高さを意識させている。

墳丘は、16.20~16.70mほどの範囲に第1次盛土の黒褐色土が、周溝立ち上がり部から4.5~5.0m内側に寄って分布している。この幅4.5m程の墳麓外のフラットな面は、1号墳側ではかなり水平に地山を削平し、他にも多少地山にそってはいるが、相当量地山整形を施している。

基盤上に敷き詰められた黒褐色土直上には、ほぼ墳丘中央部に小範囲の焼土が見られ、古墳築造時の地鎮祭の儀式の一端を解明する好資料を提供している。

主体部は全長4.36mを測る粘土櫛で、棺床面から割竹木棺と推定でき、本県でも数少ない事例である。主体部の方向は尾根に沿って置かれ、その副葬品の出土状態から頭位を尾根上方に向けたものと考えられる。

副葬品としては、三角形式、尖根式鉄鎌、片闊の全長46cmの短剣と裏すき鎧、有肩鉄斧、青灰色の算盤玉形白玉等が出土しており、三角形式で笠被を有する鎌は、銅鎌の系譜とも見られる。これに加え、墳丘からは小片ではあるが和泉期の土師器が出土している。

よって、2号墳の実年代は少なくとも5世紀中頃以前の年代が与えられる。

(増田逸朗)

V 北坂遺跡の発掘調査

1 遺跡の概観

北坂遺跡は諏訪山（標高 108 m）の西端にあたる舌状台地に立地している。この台地は西にのびる東西190 m、南北150 mで格好の遺跡立地を呈している。台地西端下は諏訪山とともに我々が「児玉三山」と通称している生野山（139 m）大久保山（116 m）との間に広がる小山川、志戸川扇状地に続く。台地北側には谷があり清水谷遺跡を隔て、南側にも完全に埋没した谷がある。標高は 87.21 m で水田面との比高は約 16 m を測る。この台地先端部を路線が南北に走り、台地基部にかけてはサービスエリア敷地にあたり、ほぼ台地全面が調査対象となった。発掘実施面積は 5,400 m² であった。

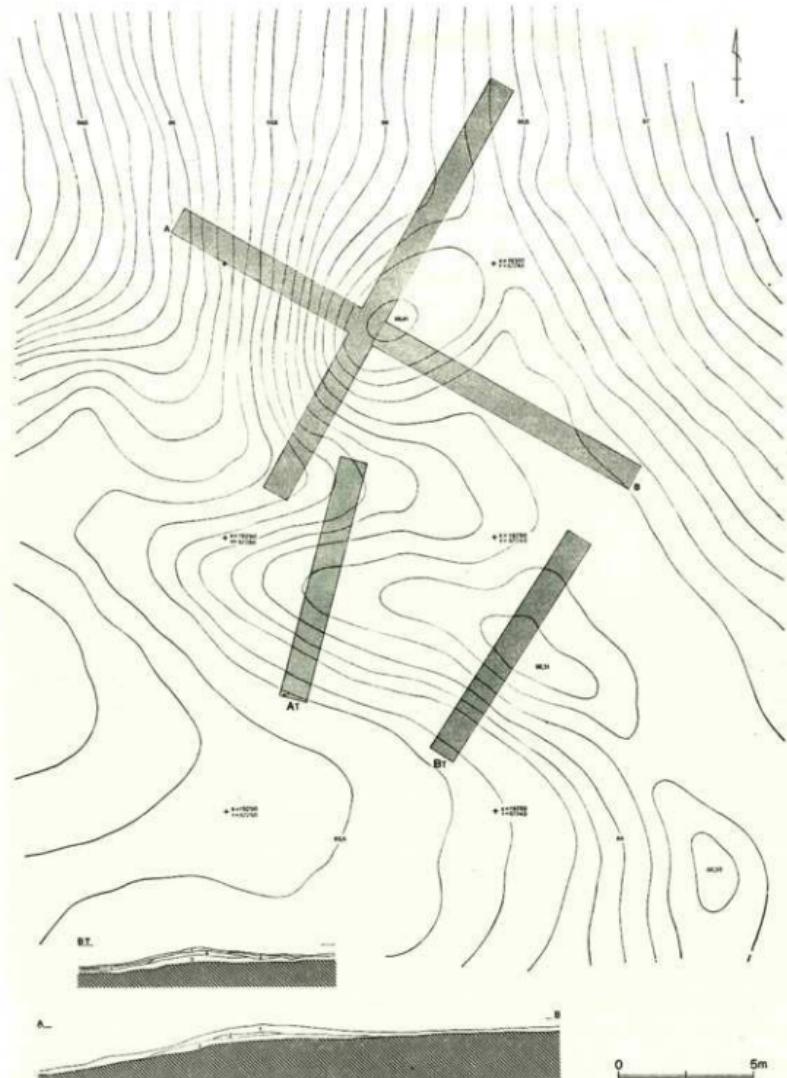
発掘調査前の現地調査で地ふくれ状、土壘状の不規則な塚（第75図）を数ヶ所確認しており、隣接する諏訪山古墳群、安光寺古墳の存在から低墳丘をもつ墓、古墳を想定して調査にかかった。しかしトレンチによる調査が進むにつれ、マウンドを構成するのは褐色土と埴火砂で人為的に盛られた形跡は見られず自然の營力により生じたものと判断するに致った。台地北側肩部および谷頭部近くに存在していることから北風、谷風により地表が攻撃をうけて、あるいはふきだまって形成されたものと考えている。この風には真冬であった調査時に終始悩まされ続けた。塚の調査で層序を確認して以後、真北を基準に 10 m グリッドをベースに 2 × 2 m グリッドに分け台地全面をカバーした。グリッドは東から西（Y 軸）へ数字で、北から南へアルファベットを付し、1-A、1-B グリッドと呼称した。基本層序（第77図参照）は台地頂部で表土 10~20 cm、緩斜面で表土下、褐色土 20~30 cm でハードローム層に至る。褐色土は頂部では流失したと思われ、斜面下では層厚を増している。

調査の結果、次の遺物群、遺構を検出した。

遺物密集区 6 地点（A、B、C₁、C₂、D、E） 繩文時代前期の土壙 1 基、平安時代の住居跡 15 軒、建物跡 9 棟、土壙 33 基、溝 1。

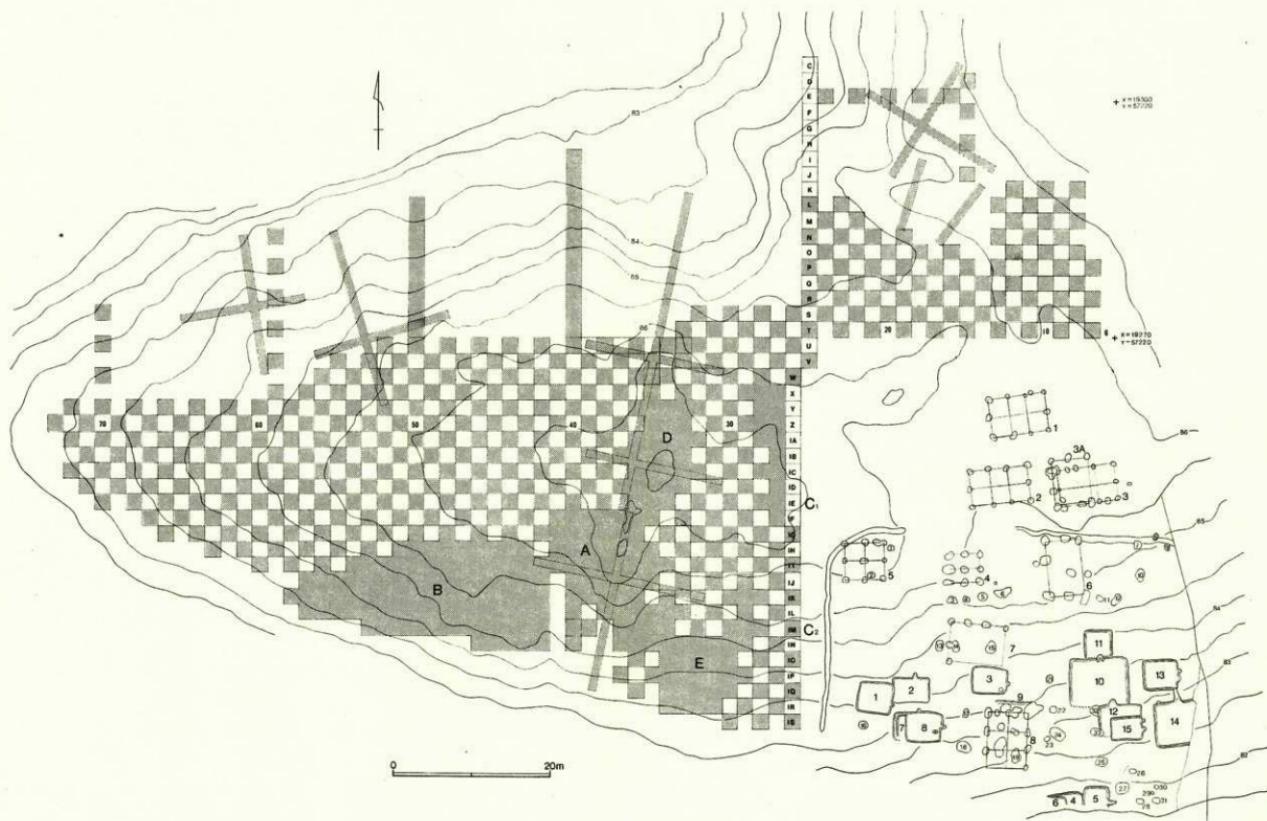
遺物密集区は南緩斜面から台地中央頂部にかけて分布している。表土下部で直ちに包含層にあたる。遺物は先土器時代、繩文時代草創期から早期にかけての石器、土器が主体をなし、同レベルで土師器、須恵器小片が混在している。土層の状態からしても全ての遺物が原位置を保っているとは断じ難い。遺物群の主体をなす時期の遺構は確認されなかったが、遺跡の立地からしてその生活跡は当然本台地上に帰結される。前期（諸磯 2 式）の土壙は調査区東南隅で検出された。半ば国分期の住居跡に切られているが破片で据えられた土器は残存していた。他の住居跡覆土からも諸磯式土器が若干出土しており同様に消失した土壙が想定される。該期の土壙のありかたからすると集落も隣接地に求めることができよう。

平安時代の遺構は南側の谷に面した調査区東南部の南緩斜面に検出された。住居跡はほぼ等高線（84.5—81.5 m）に沿って並び、狭い範囲で重複が著しい。南側斜面下部は採土により失ってしまったがさらに集落の南限は下がると思われる。15軒の住居跡はその分布から 4 グループに分けられる



1. 表土 2. 噴火砂 3. ソフトローム 4. 黒褐色土

第75図 塚 実測 図



が、グループにより重複のしかたが異なっている。出土遺物は土師器、須恵器のほか刀子、鐵鎌、釘、紡錘車、砥石、鉛があり、特筆されるものに5号住居跡出土の円面鏡、8号住居跡覆土上部出土の鉛、13号住居跡出土の各種鉄製品がある。土師器、須恵器は国分式に属するもので住居跡相互に時期的に大きな隔たりはない。建物跡は主に集落の北側に検出された。うち全容が明らかなものは5棟で 2×3 間と 2×2 間総合の2タイプがあり柱筋はほぼ一致している。これらの建物跡から時期を明瞭にし得る遺物は出土していないが集落の北、西側に走る溝とともに、その配置状況からして集落に付属するものと考えられる。

(中島 宏)

2 遺構と出土遺物

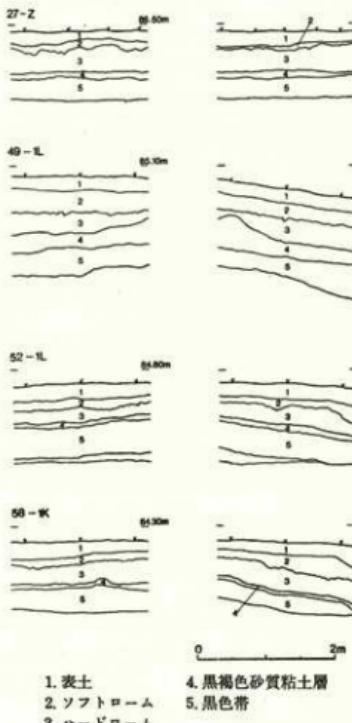
層序

本遺跡の層序は第77図に示したとおりである。以下簡単に説明を加える。

第1層 黒褐色を呈する表土層で、層厚約10cm~20cmと比較的薄い。
本層の最下部には俗に「浅間砂」と称される火山灰が認めらる。これは天明期の所産とされ、丘陵全体を覆っているが、表面に露呈している部分もある。

第2層 いわゆるソフトローム層である。全体にやわらかく、しまりがない。浅間砂の直下にあり、第1層とは明確に区分できる。遺跡中央の平坦部では10cm前後と薄く、斜面部になると20cm~30cmとやや厚さを増す。遺跡の東側では部分的に浅間砂が混入し、西側は水分を含んで湿っぽい。先土器時代から縄文時代にかけての遺物は、ほとんどが本層中から出土する。古墳時代から奈良・平安時代の遺物も包含している。したがって、表土も含めると先土器時代から平安時代までの資料が40cm~50cmの間に含まれていることになる。

第3層 ハードローム層である。第2層との境目は風化がすんでおり、ブロック状の塊が本層最上



第77図 土層図

部および第2層最下部にみられる。大略30cm～45cmの厚さをもつが、平坦部ではやや薄くなる。僅かに白色のスコリヤが認められるが顯著でない。本層以下には遺物は包含されていなかった。

第4層 黒褐色を呈した砂質粘土層である。大局的には第5層に含まれるが、色調がやや明るく、砂粒を含んでおり5層と区分した。平坦面では10cm前後とやや薄く、斜面部でやや厚くなる。

第5層 黒色帶である。第4層との境は不明瞭で、確實に一線を画することは困難であるが、砂粒の包含量を目安として区分した。中位から下位にかけては色調の面でも明らかに第4層と区別しうる。50cm～80cmの厚さをもつ。武藏野台地の第Ⅱ黒色帶に相当すると思われるが分析された資料はない。本層以下は灰青色を呈した第3紀層となる。

以上、大きく5層に区分して略述してきた。現地表面から2m足らずで第3紀層へ移行するということは、本丘陵の表面を覆う第4紀層の形成過程に帰結する問題であり、多くを語ることはできない。立川ロームが数mに達する南関東の地域からみると奇異な様相と思われるかもしれない。これが当該地域のひとつの特徴となっている。また、AT面がどの部分にあたるのかも分析されておらず不明である。おそらく第3層の下部から第4層の上部のあたりと思われるが、正確な位置づけは今後の分析に待たねばならない。

また、本遺跡から出土したすべての資料は第1層下部から第2層中に包含されていた。第3層のハードローム層中からは1点も出土していない。先土器時代の石器、縄文時代の土器・石器、さらに須恵器・土師器片すらも第2層中に混在している。したがって、ハードローム直上から浅間砂形成までの約1万年間の歴史が第2層に圧縮されているといえる。

なお、当該地域のローム層は「大里ローム」と呼ばれ、北関東の上部ローム、南関東の立川ロームにそれぞれ比定される。

(水村 孝行)

(1) 先土器～縄文時代の石器

遺物の平面分布（第78図）

前述したように、本遺跡から出土した石器群は東から西に向かって突出した丘陵の先端部南斜面に分布している。それらは東西約80m、南北約45mの規模をもつ。しかし、遺跡全体に散漫的に分布するのではなく、いくつかのまとまりをもって出土している。そのまとまりをここではブロックと呼称し、A～Eの各ブロックに区分した。

以下、各ブロック毎に略述していく。

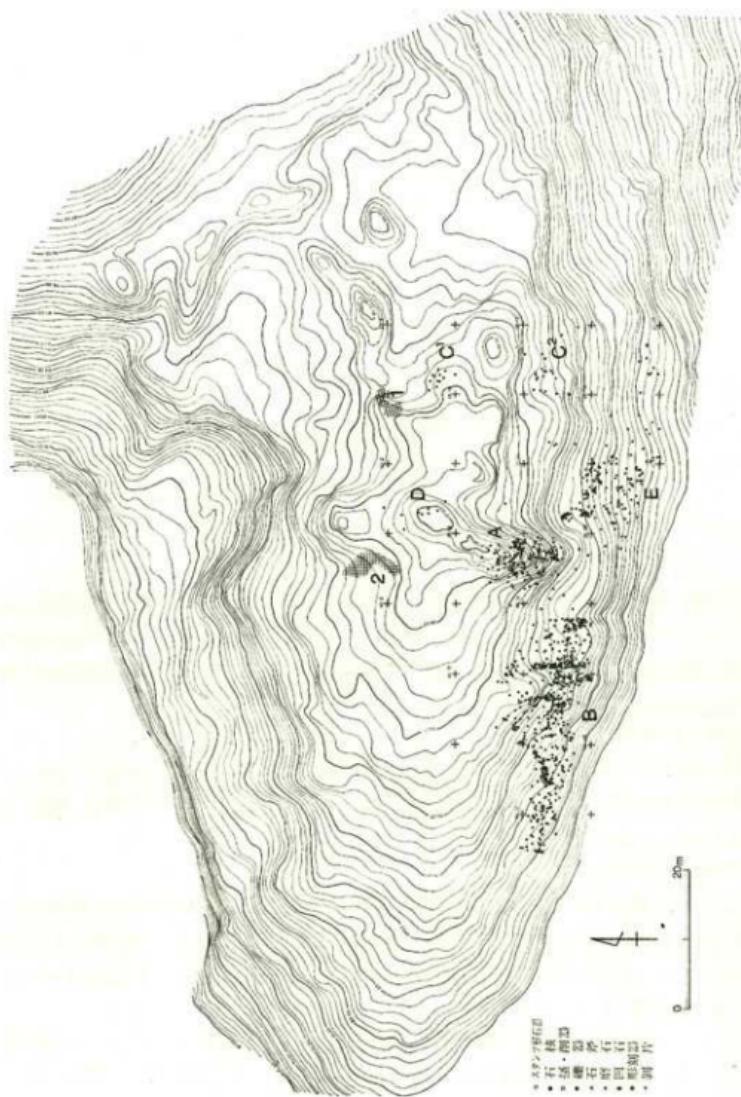
Aブロック（第79図）

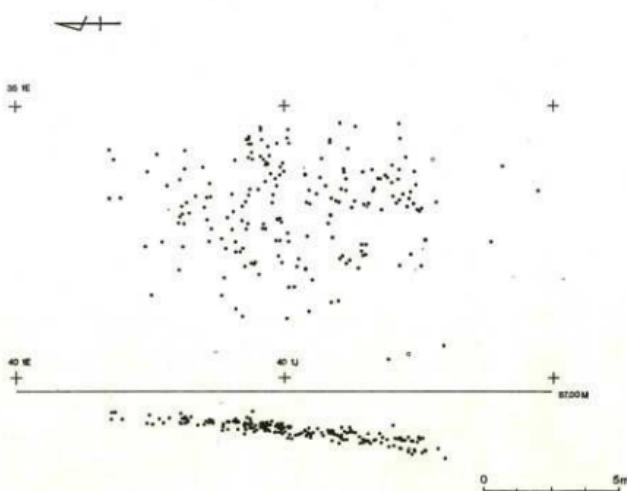
石器群が分布する地域のはば中央に位置し、西側のBブロック、東側のEブロックに挟まれている。約12m×7mの広がりをもつが、周辺部にも散発的に分布が広がっている。主な石器としては局部磨製石斧1点、スタンプ形石器2点、礫器3点、石核2点等があり、他に使用痕のある剥片、調整剥片、碎片などがみられる。

Bブロック（第80図）

約34m×14mと、最も大きな規模をもつブロックである。等高線に沿って東西に帯状に伸びている。本ブロックは前述した広がりをもつが、さらに細分できる可能性もある。しかし、境が不明瞭

第78圖 遺物の平面分佈図





第79図 A ブロック石器分布図

であったり、また、該期石器群の平面分布についての分析がすんでいない現在、大枠で捉えておいた方が良いのではないかと考えた。垂直分布をみると高低差があるが、個々の石器の形態・剥離技術に差異はなく、大部分の資料が同一時期の所産と考えられる。本ブロックからは本遺跡から出土したほとんどの器種が出土している。

C₁ブロック（第81図）

丘陵中央部の平坦面に位置し、約6m×4mの広がりをもっている。遺物は数量的にも少なく、やまとまりに欠ける。総数15点のうち削器が5点を占め、他に撲器、スタンプ形石器、疊器、石鎌が各1点あり、残りはすべて使用痕のある剝片である。

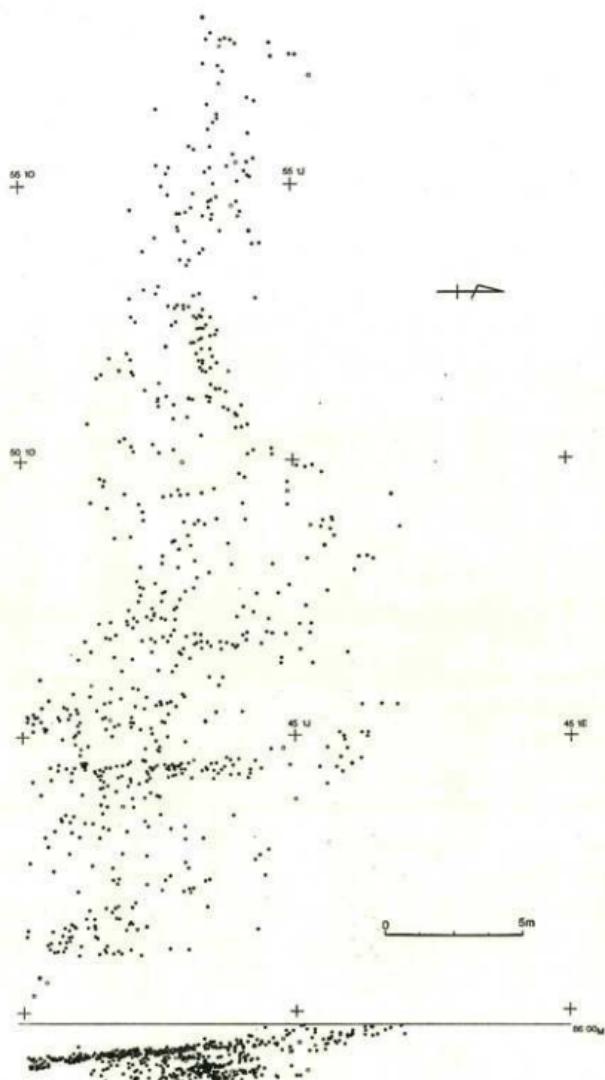
C₂ブロック（第81図）

C₁ブロックの南約10mに位置し、丘陵肩部に近いゆるい斜面にある。約10m×10mの範囲に20点の資料が出土したが、C₁ブロック同様散発的である。本ブロックではスタンプ形石器が6点と多数を占め、次いで4点の削器がある。他に撲器、打製石斧、磨製石斧、使用痕のある剝片等がある。

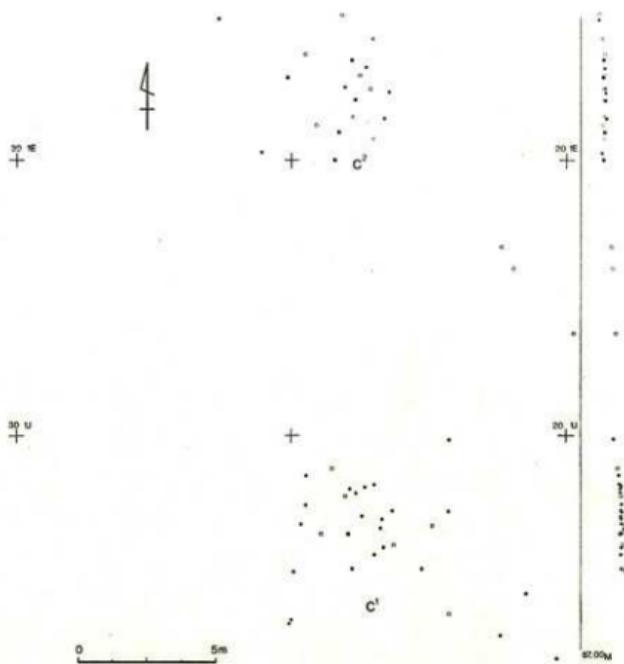
Dブロック（第82図）

本ブロックは最も北に位置し、丘陵中央の平坦部分の微高地にある。C₁・C₂ブロック同様規模が小さく、出土点数も少ない。約10m×3mの南北に長い帯状のブロックで、15点の資料が出土した。

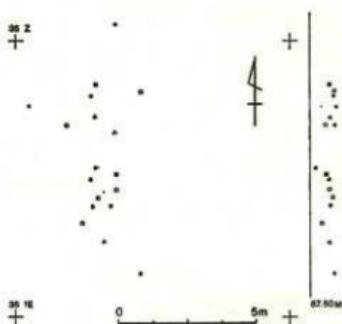
本ブロックから出土した石器の中で注目されるのは、石皿と磨石が各1点出土したことであろう。



第80図 Bブロック石器分布図



第81図 C₁・C₂ブロック石器分布図



第82図 Dブロック石器分布図



第83図 Eブロック石器分布図

他には削器が3点、スタンプ形石器、礫器が各2点あり、打製石斧、局部磨製石斧が1点ずつ出土している。

E ブロック（第83図）

南斜面にあり、分布範囲の最も東寄りに位置する。約10m×10mの広がりをもつが、中央部分が空白であり帯状に円を描くような分布を示している。東側にも散発的に石器が出土しているが、本来は本ブロックのものであったのだろうか。剥片類を除いた石器類では削器が8点と最も多く、次いで石核が4点出土している。他にスタンプ形石器、礫器、局部磨製石斧、有孔砥石等が出土している。

各ブロックの概略を述べてきたが、これらはブロック自体の規模、分布のあり方、石器組成、立地等を分析すると、大きく二群に大別される。このことについては後述する。（水村孝行）

石器（第84図～第112図）

北坂遺跡から出土した石器、剥片等の数は番号を付したものだけで1064点に達する。それら以外にも碎片、微細なチップ類があり、すべてを総合すると1500点近い数量になる。これらを從来一般に行なわれている分類にしたがうと、大部分が剥片である。いわゆる石器は10%前後を占めるにすぎない。しかし、剥片として分類されたものの中には、明らかに簡単な二次調整が施された資料や鋭いエッヂに、使用の為と思われる痕跡を残すものも存在する。それらは明らかに何らかの道具として使われたものであろうから、他の剥片とは區別してとり扱うべきものである。しかし、適當な名称もないまま、二次加工のある剥片あるいは使用痕のある剥片として報告されているものが多い。ここでの説明では從来の名称を踏襲するが、今後検討を要するであろう。また、本遺跡から出土した資料はすべて同一時期の所産ではない。明らかに先土器時代のものと思われるものは図を別にして載せており、説明でもそのつど明示した。他の大部分の資料は撚糸文系土器群に伴出するものと思われるが、隆起線文土器、多繩文系土器、田戸下層式土器、諸磯式土器等々も出土しており、明確さを欠く。しかし、少なくとも早期の土器群に伴出する石器の区分は困難であり、一括した。

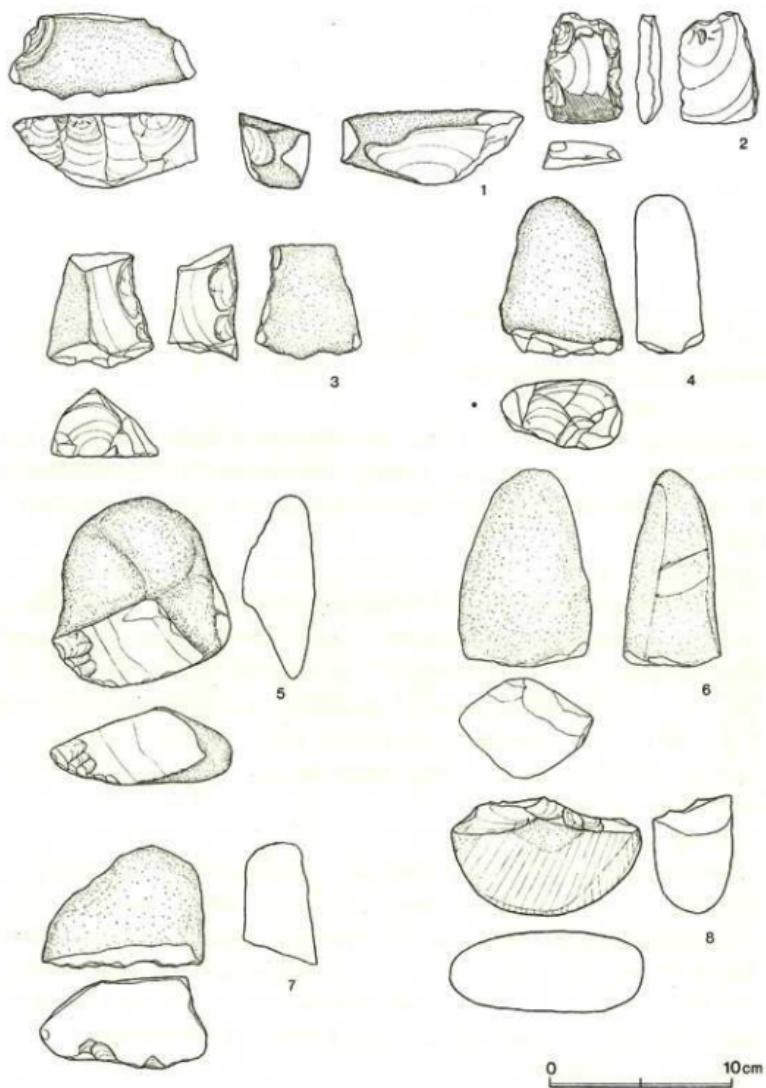
さて、本遺跡の石器群であるが、各ブロック毎に説明を加えてゆくこととする。石器類はほとんど図示したが、剥片類は種々の事情で二次加工あるいは使用痕のある剥片を中心に一部しか掲載できなかった。しかし、その全体の概略が把握できるよう配慮した。なお、法量は別表に示した。

A ブロック（第84図・第85図）

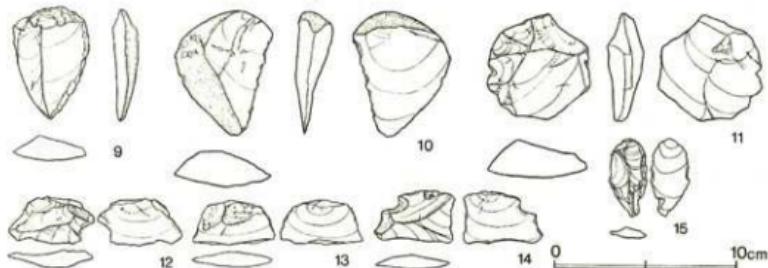
石核（第84図1、3）

1は橢円形の礫を素材としたもの。周辺からの粗い成形剥離で形を整えている。打撃面は自然面をそのまま残しており、調整されていない。剥片剥離作業面は長辺に沿った一面に限られている。7枚の剥離面が残されている。3も石核とした。横断面は三角形に近く、1と同様自然面をそのまま残す一面を打撃面としている。一部を欠いており、当初はスタンプ形石器に類似した礫器と考えた。しかし、スタンプ形石器とは、石材、形態等種々の点で異なっており石核とした。今後検討を要する資料である。

局部磨製石斧（第84図2）



第84図 Aブロック石器(1)



第85図 Aブロック石器(2)

やや縦長の剥片を素材とする。主剥離面側からの急斜な調整剥離で形を整えている。刃部の片面にのみ研磨が施されている。側辺の一部に自然面を残している。刃部には使用のための痕跡がわずかに覗える。小形であるが完形品である。

スタンプ形石器（第84図4、6）

4は偏平で縦長の礫を素材としている。礫の一端に数回の打撃を加え石器に仕上げている。使用面は打ち欠いたままで、やや凸凹がある。6は横断面が菱形の礫を素材としている。使用面は平らで、部分的に研磨痕が認められる。また、一部面取的な剥離痕がある。2点とも使用面の作出以外に加工痕はない。

砾器（第84図5、7、8）

5は厚手の円礫を用いている。1回の大きな剥離で刃部を作出し、さらに部分的に調整剥離が施されている。調整剥離が施された部分は丸味を帯び、使用痕が認められる。刃部以外はすべて自然面で加工痕は認められない。7は節理面で剥離している。礫の約半分に相当すると思われる。斜めに割れており、エッヂが鋭角になる一辺に数回の調整剥離が加えられ、使用痕もみられる。エッヂの大部分を使用しており、過度の使用のためか鋸齒状になっている。8は砾器として分類したが、大形の磨石である可能性もある。あるいは磨石を砾器に転用したものかもしれない。ほとんど全面にわたって研磨されている。

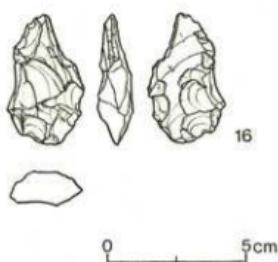
剥片（第85図9～14）

9は中央に稜が走る縦長の剥片である。片側辺に細かな調整剥離を施したもので、二次加工のある剥片である。10は自然面を打撃点として剥離された剥片である。剥離された際の鋭いエッヂに刃こぼれ状の痕跡が認められる。使用痕のある剥片である。11は主剥離面をそのまま残し、正面は中心部に向って周辺から数回の剥離が行なわれているもの。使用痕は認められない。12～14は同じような形態をもつ小形の剥片。13、14のように側辺に使用痕が認められるものがある。15は縦長の小形剥片。正面は各方向からの剥離痕がみられる。両側辺中央部分に使用痕が認められる。

Bブロック（第86図～第95図）

彫刻器（第86図16）

厚手の剥片を素材とし、表裏面とも周辺から雑な調整を施してある。バルブは除去され、厚さを



第86図 Bブロック石器(1)

たままの状態に近く、磨かれていない。19は片面が方形に割れている。使用面は部分的に磨かれている。使用面以外に加工された痕跡はなく周辺が部分的に磨かれている。20は使用面の凹凸が激しく他の3例とはやや趣きを異にする。未製品かもしくは失敗例とも考えられる。あるいは別種の石器の可能性もある。広義の砾器とした方が妥当かもしれない。

打製石斧（第87図21～24）

21は片刃の打製石斧である。周辺から中央部に向って階段状の成形剥離が施され、その結果、中央に一本の稜が走り、断面は山形を呈する。刃部及び側辺は細かな調整加工を施している。片面は全面に自然面を残している。撫糸文期よりも時期的に古くなるかもしれない。22は厚手の剥片を素材としたもので、一部に若干の自然面を残している一応石斧の仲間にしておいたが、石斧状石器とでも称すべき資料である。23、24は片面に自然面を大きく残し、周辺の調整加工で石斧に仕上げたものである。23は一端に厚さ調整のため大きな剥離痕を残している。若干の使用痕が認められる。約1/3を欠損しているが、中央部分が最も薄いため使用中に破損したものと思われる。24も基部を欠損しているが、刃部にはかなり使用痕が認められる。周辺部の調整剥離は自然面から一方的に行なわれている。

磨製石斧（第87図25、26）

2点とも接合資料である。両者ともほぼ全面に研磨が加えられていたと思われる刃部の形態は異なる。25は一部に自然面を残しており、26は両面からきれいに研磨されている。大半を欠損しているため詳細は不明である。帰属時期についても不明な点が多く、やや後出の可能性がある。

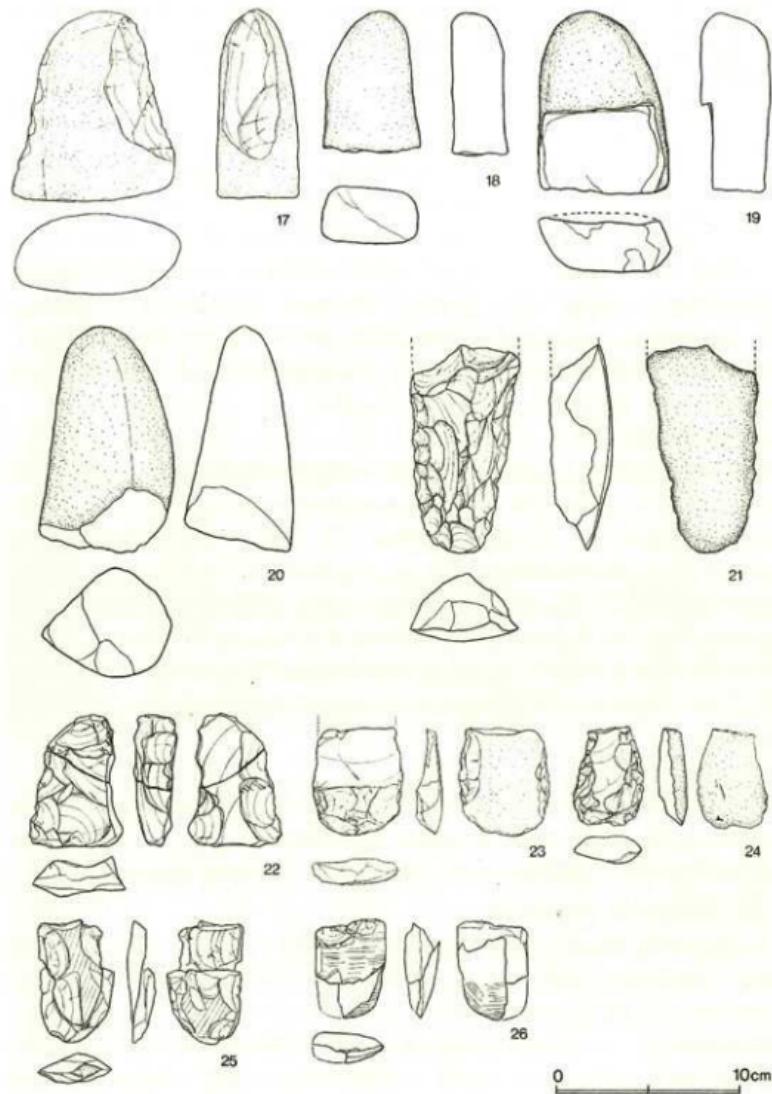
砾器（第88図27～33、第89図37～39）

各々形態の異なる砾器が出土している。27は厚手の円錐を素材としたもので、両面からの粗い打撃によって砾を半剖に近い状態にしたもの。剥離面は大きく、打撃の方向も不規則である。石核の一種かもしれない。28は偏平な砾の側辺に片面から打撃を加えたもの。打撃は一方向から行なわれ剥離角は直角に近い。エッヂに沿って使用痕と思われる細かい剥離痕が認められる。反対側の側辺は節理面で割れているが、やはりエッヂに沿って使用痕がみられる。削器の一種かもしれない。29は砾の一端に片面から打撃を加えて刃部を作出したもので、石斧として分類した方が妥当かもしれない。大半を欠損しているが、刃部以外に調整加工はないものと思われる。30は多方向からの剥離

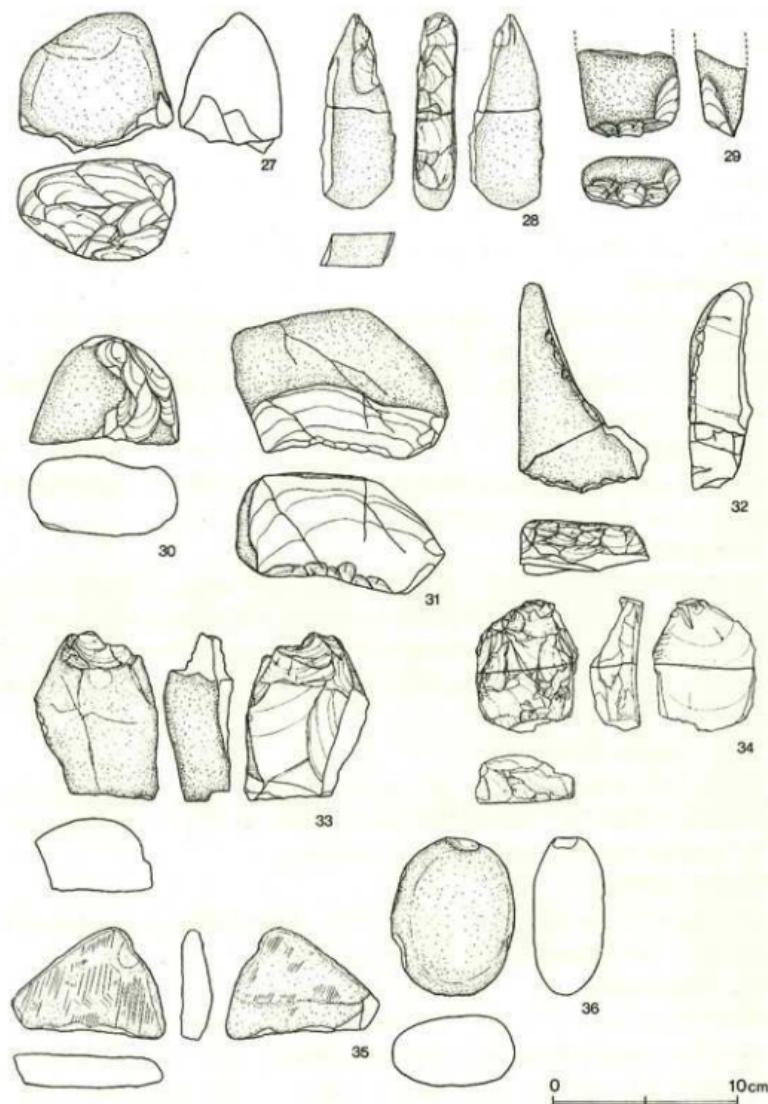
調整している。形刻刀面は末端部に二面みられ、打面の調整は特に認められない。形刻刀面の反対側の側辺は裏面から細かい調整が施され、鋸齒状になっている。形刻刀面には使用痕らしきものは認められない。先土器時代の所産と考えられる。

スタンプ形石器（第87図17～20）

17は片側に調整加工を施したもの。使用面はきれいに磨かれている。横断面は楕円形で、同器種の典型的な資料である。18はやや小形のもので17のように調整加工はみられない。横断面は長方形を呈している。使用面は剥離され



第87図 Bプロック石器(2)



第88図 Bプロック石器(3)

面がみられるが、疎の表面を削るように薄い剥片が剥取られている。31は1回の打撃で大きな剥離面を作出し、鋭角になった一辺に小さな調整加工を施したもの。32は疎の一端に片面から細かな調整加工を施したもの。節理面で割れたエッヂに沿って細かな剥離痕が認められる。33は一端に両面から打撃を加えたもの。片面は大部分が自然面、もう一方は大きな剥離面が残る。

第89図37～39は一応器として分類しておいたが、今後検討を要する資料である。本ブロック以外にも数点出土している。横断面形はいずれも円形か隅丸方形形状を呈する。側面観はいわゆる砲弾の形をしている。いずれも棒状の疎を素材としている。まず疎皮を粗く剥いで円形あるいは方形に近い形状にし、その後エッヂに沿って細かい調整を加えている。そして必ず一面もしくは二面に自然面を残す。石材は頁岩系のものを用いており、硬く粒子の細かいものが条件だったようである。

砥石（第88図35）

砥石はここに図示した他に小破片が數点ある。石材はすべて同じである。形状はEブロックから出土した1点を除くと、すべて本例と同じである。図示した資料は粒子の粗い板状の砂岩を用いている。両面ともよく研磨されている。側辺部には研磨痕は認められない。本遺跡から出土した砥石はすべて破片であり、完形品はない。

磨石（第88図36）

梢円形を呈したもので、側辺部に2ヶ所敲打痕がある。あるいはハンマーストーン的な用途に使用されたものかもしれない。1点だけ出土した。

削器（第89図40～43・46）

40～42は大形の不定形剥片を用い、一部に鋸歯状の刃部を作り出したもの。片面は大部分自然面を残している。40は主剥離面側からの一撃で刃部の厚さを調整した後、二次加工を施している。43は自然面側からの二次加工で円弧状の刃部を作出したもの。46は小形の剥片を用いて直刃を作り出している。Bブロックから出土した削器は、以上の5点である。刃部の作出は大形のものより小形の削器の方が丁寧である。

トランシェ様石器（第89図44、47）

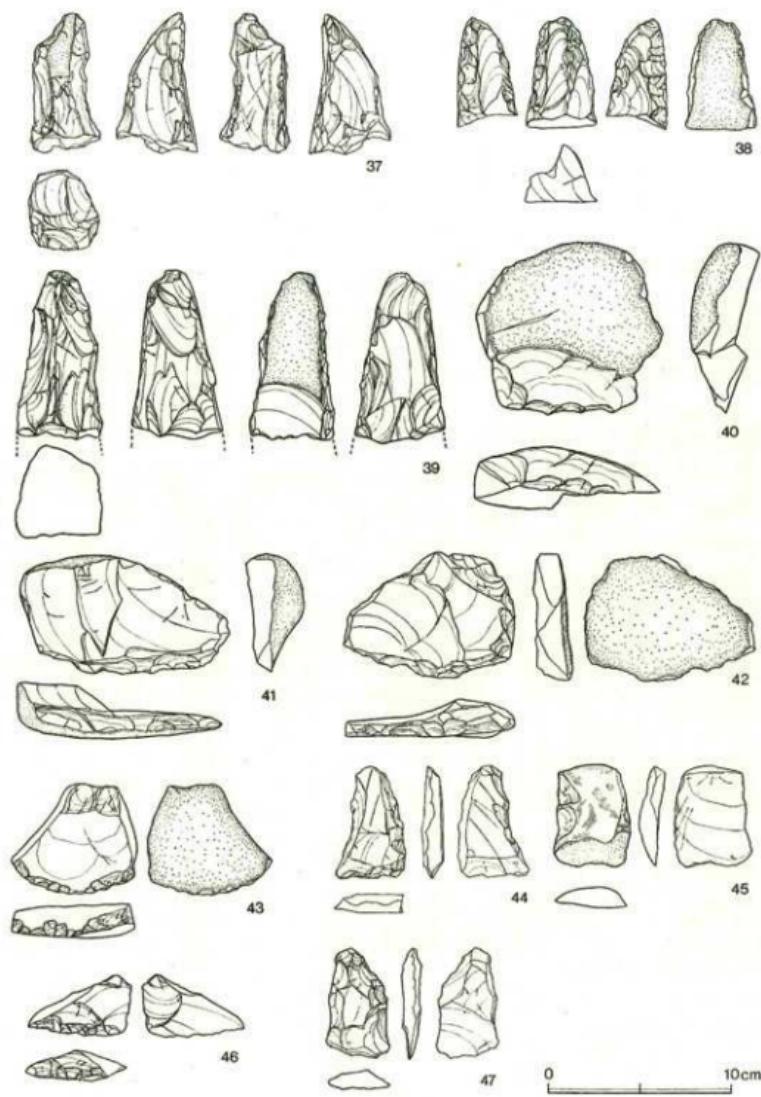
44は横長の剥片を素材とし、側辺及び刃部に二次加工を施している。刃部には使用痕と思われる細かな剥離痕が認められる。刃部は鋭角に作出され、使用痕がみられる。トランシェ様石器については、まだ不明な点が多く、今後充分検討を要する石器である。

磨製剥片（第89図45）

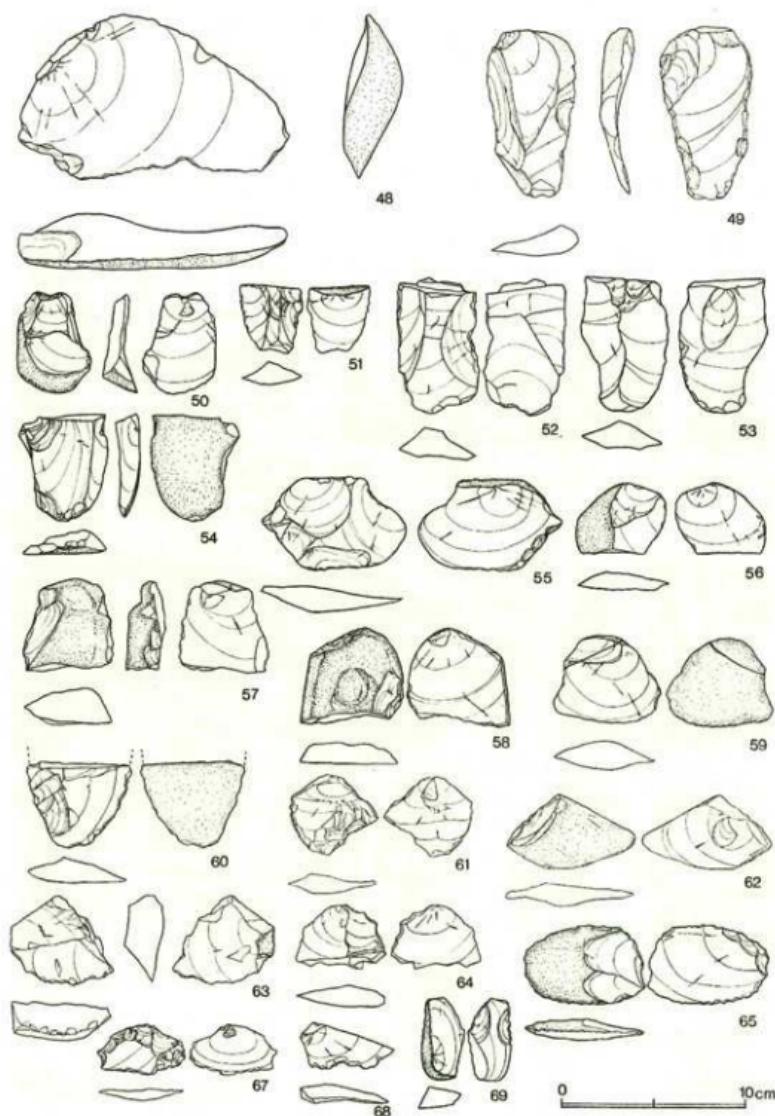
巾広の継長剥片の片面に研磨痕が認められるものである。末端部に自然面を残し、わずかに使用痕がみられる。ほぼ平行する側辺には細な調整加工がみられる。

剥片（第90図～第92図）

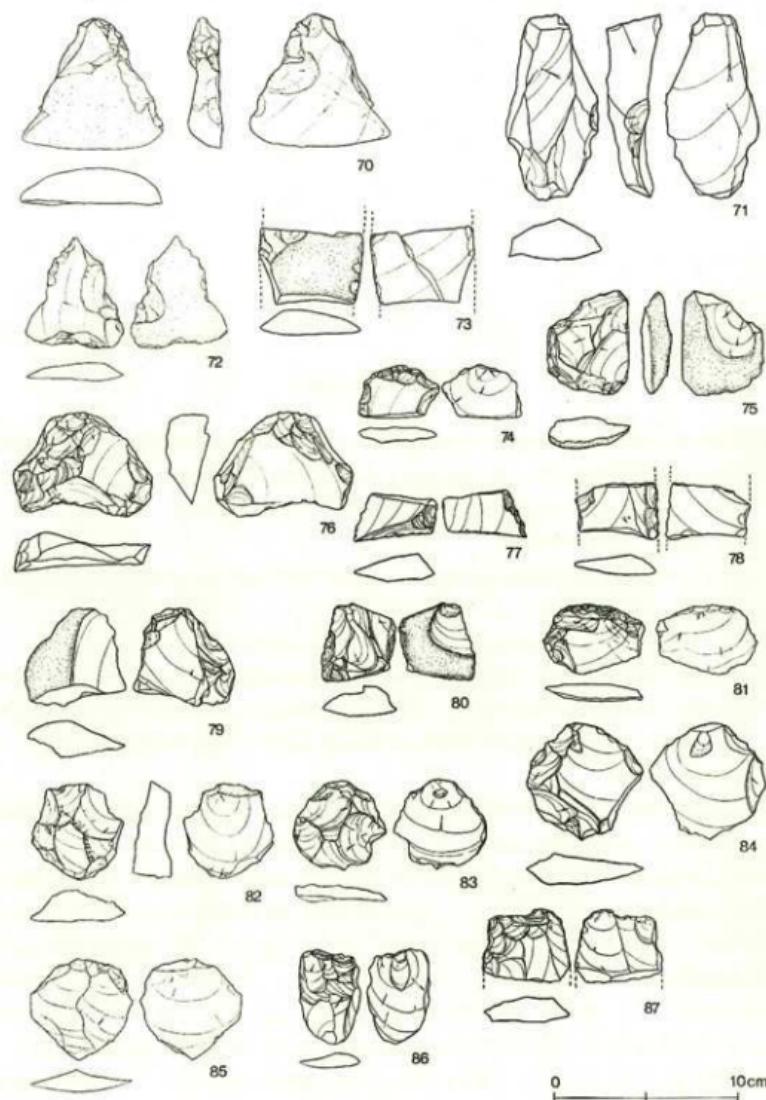
最も規模の大きいBブロックはもちろん、出土遺物全体の中で剥片の占める割合はきわめて高い。それらは大きさ、形態等の差はもちろん、わずかながら調整加工が施されたもの、使用痕が認められるものなどがあり、一様ではない。ここではすべての剥片について図示できる余裕はないので、主として二次加工のある剥片、使用痕のある剥片を第90図と第91図に示し、それ以外のものを第92図に図示した。48などは剥片の中でもきわめて大きいもので、側辺に沿って使用痕がみられる。形



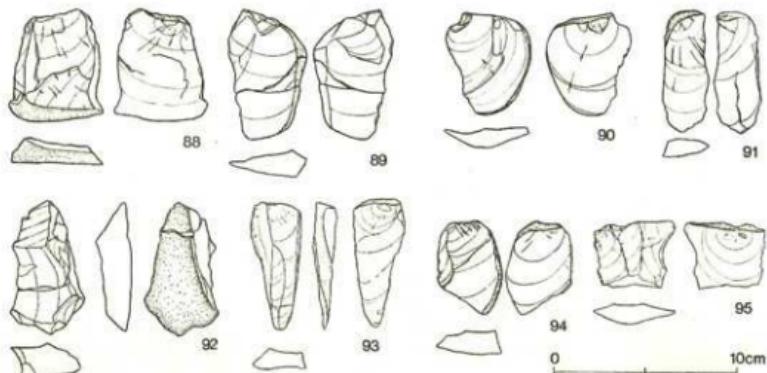
第89図 Bプロック石器(4)



第90図 Bプロック石器(5)



第91図 Bブロック石器(6)



第92図 Bブロック石器(7)

態的には、49、52、53のよう綫長のもの、59、65のよう圓形あるいは橢圓形に近いもの、さらに不定形のもの等がある。また、54、59、60のよう片面全面に自然面を残すもの、第92図のすべての例のように打撃面とそれに続く側辺に帶状の自然面を残すもの等もある。

石鎌（第93図・第94図・第96図）

Bブロックからは9点の石鎌が出土している。ほとんどが完形品である。形態的には三大別される。

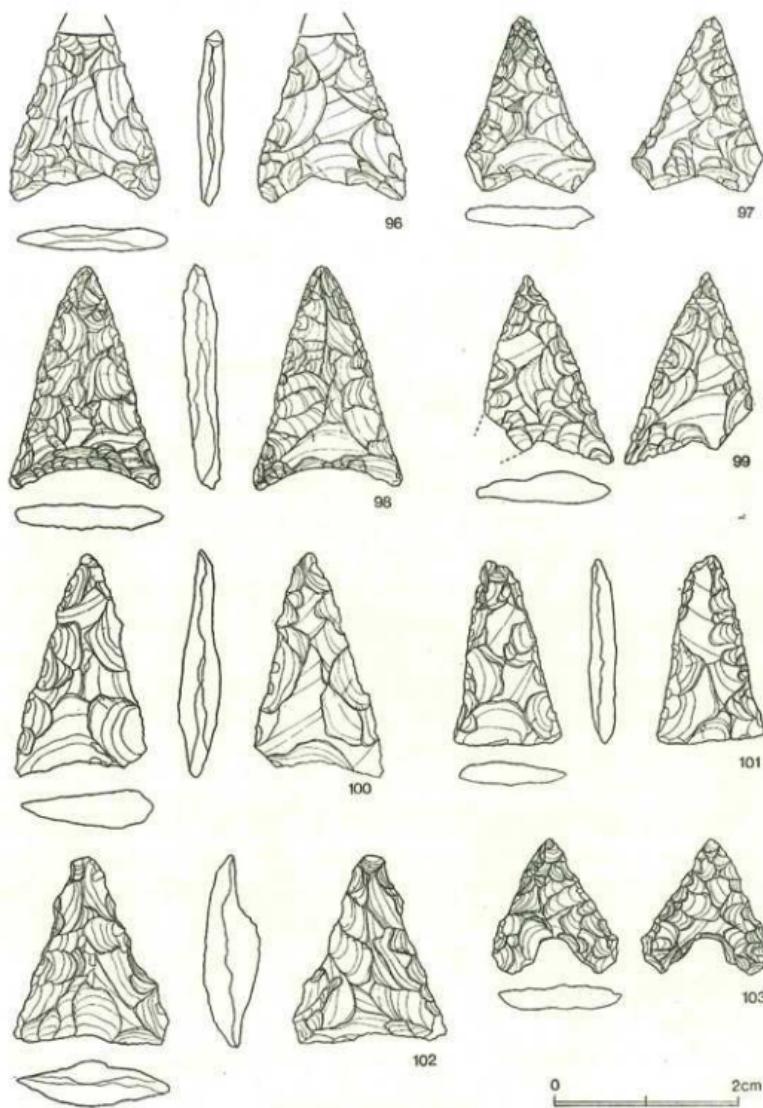
A形 101がそれで、二等辺三角形を呈するものである。他に類似資料はみられない。

B形 103である。小形で、基部に深い抉りを入れたもの、調整加工は入念に行なわれている。

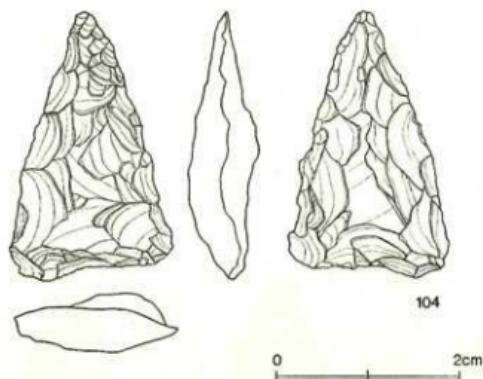
C形 101、103を除く他の資料である。二等辺三角形状のもので、基部がわずかに彎曲するものである。抉りの深浅、加工の精粗等でさらに細分できそうであるが一括した。

接合資料（第95図）

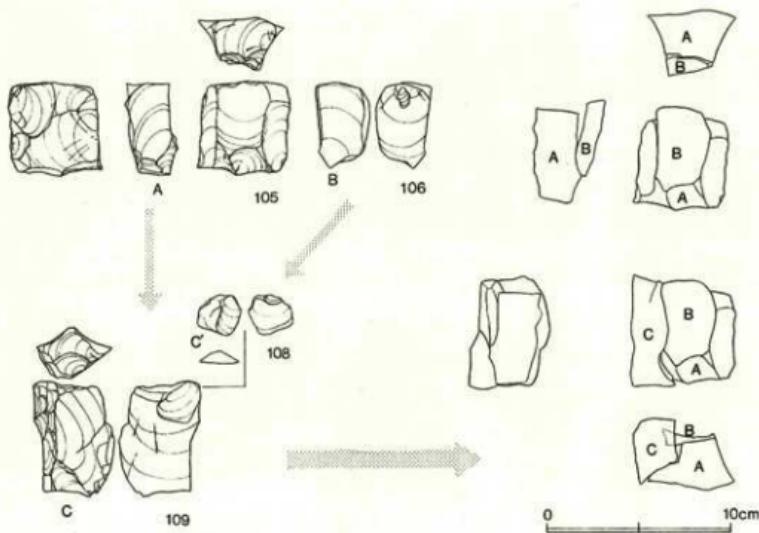
105はほぼ正方形を呈する石核である。横断面形は台形である。105の中央にある剥離面に106の剥片が接合する。同剥片が剥離されたのは、105に残された打撃面が形成される以前であることを知ることができる。109の剥片は106が剥がされる以前に逆の方向から剥離されている。106、109の両剥片とも使用されたような形跡はない。最終的に残された105の石核をみると上下、左右のあらゆる方向から剥離面を打撃面として剥離がなされている。その傾向は、109の剥離面の観察から石核の形成過程においても同様であったことを窺うことができる。3点が接合した状態は自然面を剥ぎ取った段階からやや進んで、石核の形を整える段階のものと思われる。109の剥片を剥離した段階にはすでに石核のおよその形ができあがった状態である。さらに106を剥離した段階で、石核としての形態が整ったものであろう。打撃面を180度、あるいは90度回転させながら、巾広でやや綫長の剥片を剥離していったものと考えられる。



第93図 Bプロック石器(8)



第94図 Bブロック石器(9)



第95図 Bブロック接合資料

C: ブロック (第96図・第97図)

スタンプ形石器 (第97図111)

1点のみ出土した。疎の一端を一撃でほぼ平らに剥離したもので、他に加工痕はみられない。横断面は橢円形を呈する。使用面にわずかに研磨痕が認められる。

礫器 (第97図112)

長方形を呈した厚手の疎の一端にわずかな使用痕がみられるものである。調整加工された痕跡はみられない。

搔器 (第97図114)

厚手の小形剥片を素材としている。主剥離面側からの調整で搔器に仕上げている。刃部は円弧状を呈する。刃部の反対側の一端にもフルーティング状の調整がみられるが、主たる刃部は図下端であると思われる。自然面を大きく残している。

削器 (第97図113, 116, 118, 120, 121)

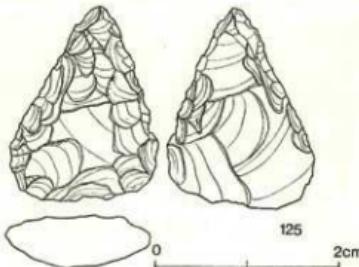
5点出土している。113は厚手の小形剥片を用いたもので、縁辺部に沿って両面からの調整加工がみられる。方形状を呈するが、主たる使用部分は二辺ぐらいであったと思われる。ビエスエスキュー的な石器か。削器とするのが妥当か否か、問題が残る。116は半月形を呈した削器で、円弧状に刃部を作出したもの。118は主剥離面側からの打撃でノッチ状に抉りを入れたもの。120は縱長剥片の側辺部に刃部を作り出している。121も同様である。削器として分類した以上5点の資料は、形態、刃部の作出等においてそれぞれ異なっている。

剥片 (第97図117, 119, 122~124)

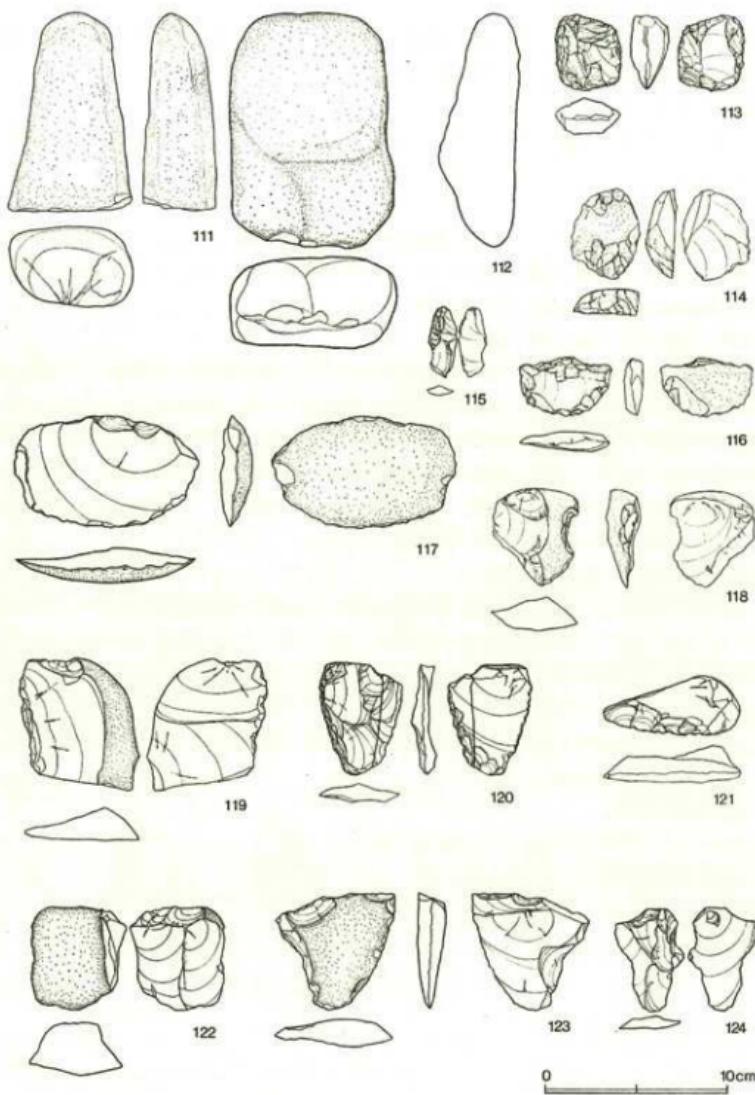
117は橢円形を呈した剥片で、ゆるい円弧状を呈した末端部分に使用痕が認められる。119も鋸いエッヂをもつ剥片で、117同様使用痕がみられる。122は2枚の大きな剥離面がみられ、当初残核とも考えたが、片側辺にわずかに使用のためと思われる刃こぼれ状の痕跡が認められたので、一応使用痕のある剥片として分類しておいた。検討を要しよう。123は主剥離面側からの複雑な加工が施され一部に使用痕が認められるもの。124は薄手の剥片で、頭部付近に同方向からの剥離痕が何面かみられる。使用痕跡はない。

石鎌 (第96図125)

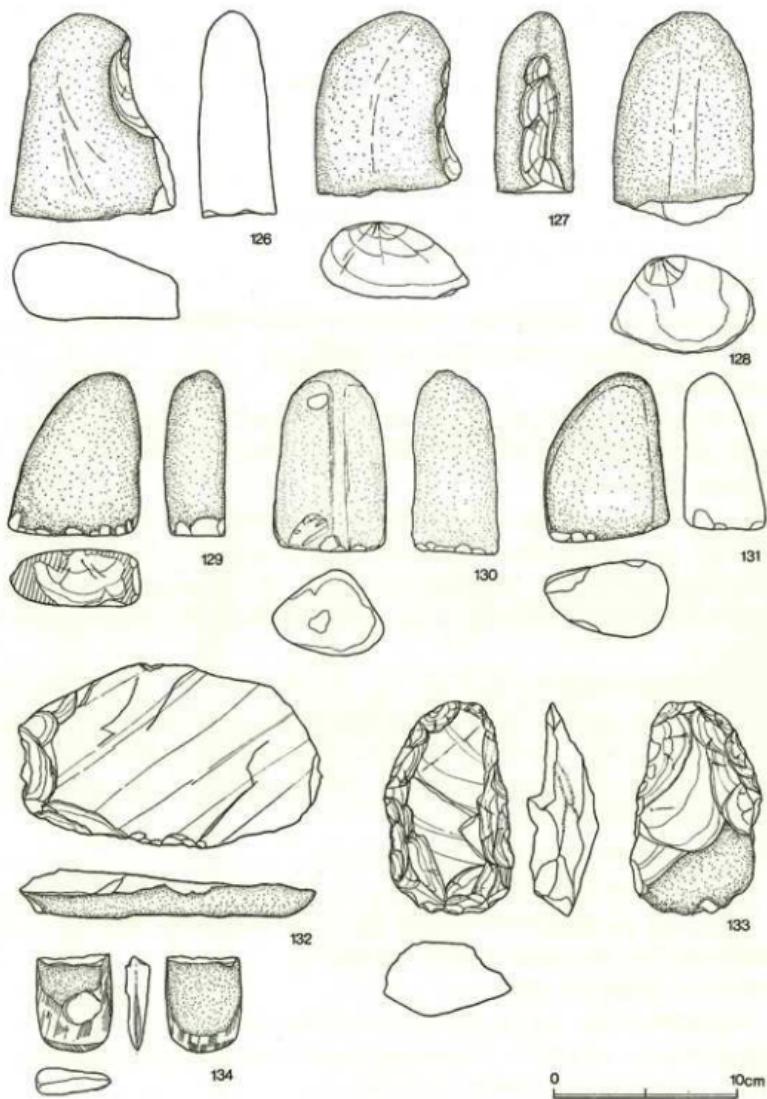
本ブロックでは1点のみ出土している。隅の丸い正三角形状を呈するものである。調整加工は片面に集中しており、側辺は細かい鋸歯状を呈する。



第96図 C: ブロック石器(1)



第97図 C₁ブロック石器(2)



第98図 C₁ブロック石器(1)

C: ブロック (第98図・第99図)

スタンプ形石器 (第98図126~131)

6点出土している。126、127のように側辺に加工痕がみられるものとそうでないものがある。また129~131のよう、使用面に接する縁辺部を面取り状に調整しているものもある。ほとんどが、一撃によって平らな使用面を作出している。また、研磨痕が認められるものもある。

打製石斧 (第98図133)

分厚い剥片を使用したもので、梢円形を呈する。中央部分から刃部にかけて厚くなる。周辺部を粗く加工して石斧に仕上げており、刃部の片面には自然面を残している。丁寧なつくりとはいがたいが、本ブロックでは唯一の打製石斧である。

磨製石斧 (第98図134)

基部を欠損している。両面の中央部分に自然面を残し、刃部及び両側辺を丹念に研磨したものである。刃部は円弧状を呈し、片面だけさらに入念に研磨している。

振器 (第99図135)

梢円形を呈した厚手の剥片を素材として用いたもの。主剥離面側からフルーティングが施され、拇指状の振器に仕上げている。刃部は円弧状を呈するが、直角に近い角度で形成されている。

削器 (第99図136~140)

5点出土しているが、それぞれ形態を異にしている。136は梢円形の剥片の一部に二次加工を加えて削器状に仕上げたもの。削器とするか否か疑問もあるが、一応削器としておく。137は小形の剥片の全周辺に二次加工を施し、削器に仕上げたものである。138と140はやや縦長の剥片の片側辺に急斜な二次加工を加えて刃部を作出している。139は半円状の剥片を用い、円弧状の刃部を作り出したもの。

剥片 (第98図132、第99図141~145)

144は一端を欠いているが、剥片というよりも石斧状の石器である。片側辺には自然面を帯状に残し、一方の側辺は鋭いエッヂを作出している。あるいは削器的な用途に使用されたものかもしれない。132は節理面で割れた大形の剥片で、周辺の一部に雑な調整加工がみられる。132と143を除く他の剥片には使用痕が認められる。

D: ブロック (第100図・第101図)

スタンプ形石器 (第100図146、147)

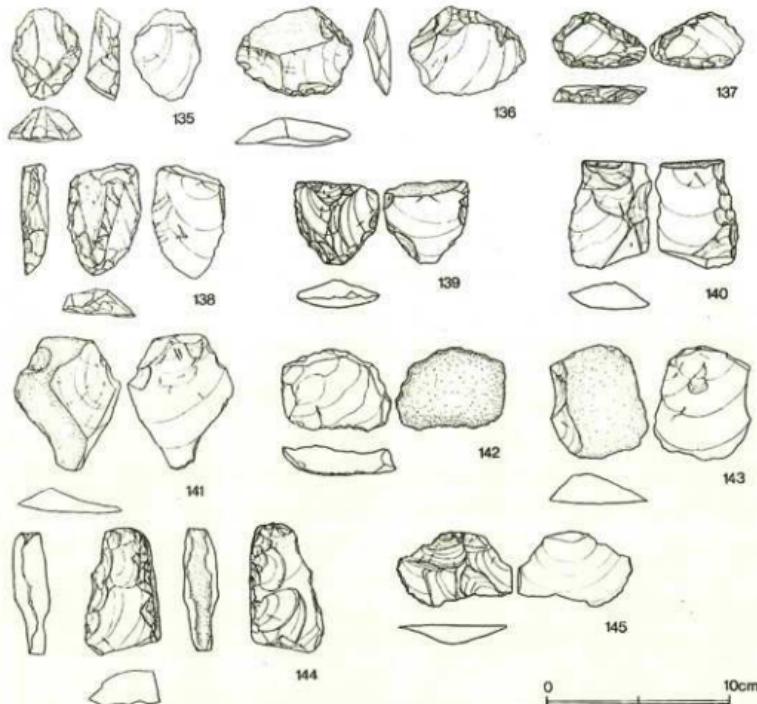
2点出土している。两者共使用面にやや凹凸があるものの、中央部分に大きな剥離面を残し、周辺部分に研磨痕がみられる。基部には加工された痕跡はない。

磨石・石皿 (第100図148、150)

148は横断面が卵形をした梢円形の磨石である。顯著な使用痕跡は認められない。150は石皿の完形品と思われる。片面中央部分がわずかに凹むが、ほぼ平らに近い。特に加工された様子はなく砾自体がもっていた面をそのまま使用したものと考えられる。

礫器 (第100図149、151)

149は梢円形の砾の一端に使用痕が認められるもの。361タと重量もあり、敲石的用途に使われた

第99図 C₂ブロック石器(2)

ものと思われる。151は偏平な蹠の一部に細かな剥離痕が認められるものである。大半を欠いている。

局部磨製石斧（第100図152）

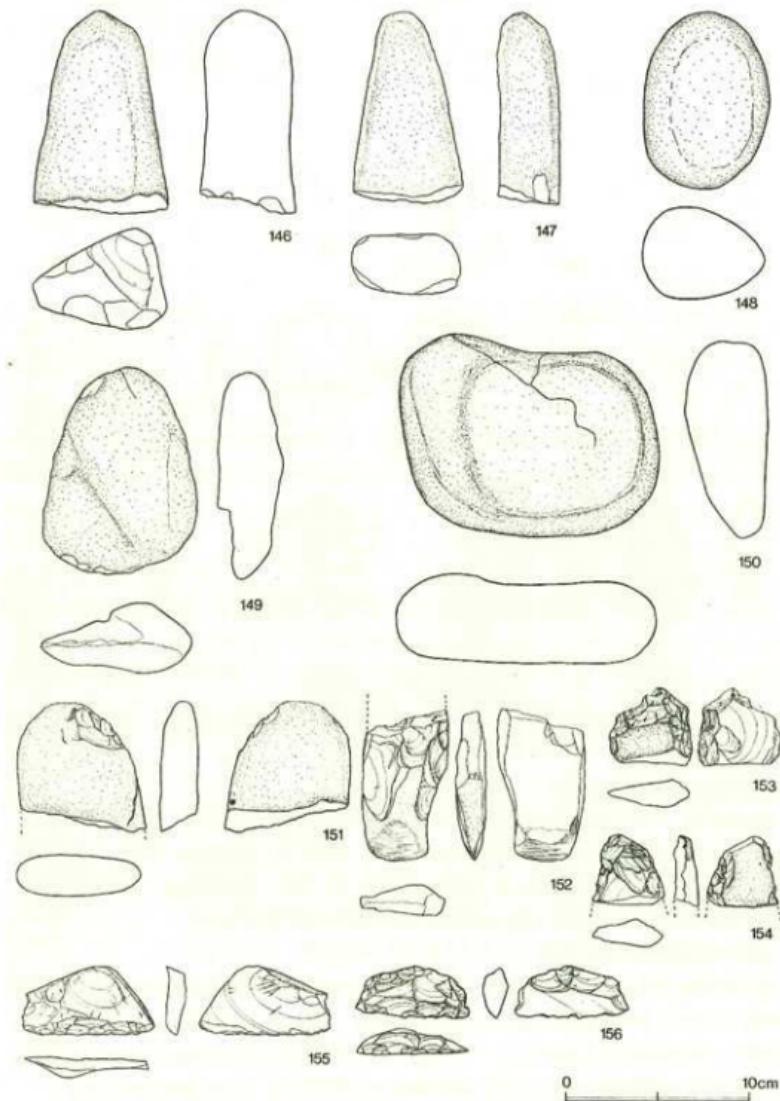
表面が風化しており詳細は不明である。おそらく偏平な蹠を素材としており、側辺を粗く加工して石斧としての形を整えている。刃部は自然面を残し、両面から丁寧に研磨している。刃部はゆるい円弧状を呈し、使用痕が認められる。基部を欠いている。なお、154も石斧の一部かと思われる片面中央部分に自然面を残し、両面とも側辺に加工を施して形を整えている。

削器（第100図153、155、156）

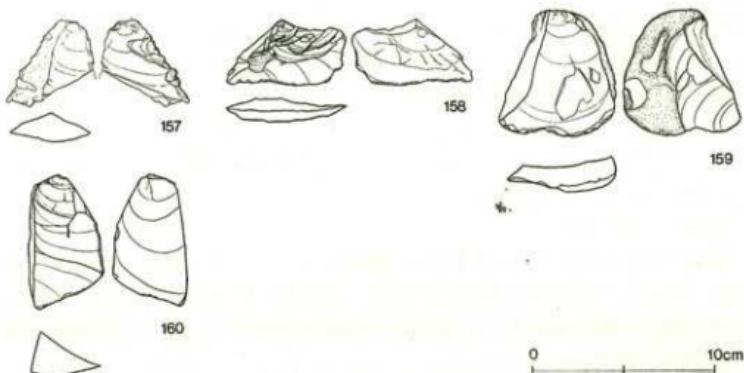
153は削器とするか否か問題を残す。打撃面から側辺にかけて、両面から調整加工を施して刃部を作出している。155、156は典型的な直刃の削器である。155は主剥離面側からの二次加工で刃部を作出し、かなり使用痕が認められる。打撃面及び側辺部に帯状に自然面が残る。156も主剥離面側からの加工で刃部を作り出したもの。側辺部から中央に向って大・小の剥離痕がみられる。

剥片（第101図157～160）

4点ともいざれかの部位に使用痕が認められる。157は側辺に粗い二次加工を施している。158は



第100図 Dブロック石器(1)



第101図 Dブロック石器(2)

不定形な剥片の縁辺部に細かな使用痕がみられる。片面には打撃面側から大きな剥離面が何枚か認められる。160は断面三角形を呈する縦長の剥片で、末端部と側辺に使用痕がみられる。打撃面にはわずかに自然面が残る。

E ブロック (第102図～第105図)

スタンド形石器 (第102図161、162)

2点出土しているが、いずれも欠損品である。161は基部を欠損する。使用面は周辺部から5回の打撃を受けており、礫器状を呈する。平らな使用面の作出に失敗したものか。162も基部を欠損している。1回の打撃で平らな使用面を作り出している。

石核 (第102図163、165、166、168)

4点出土しているが各々形態を異にする。163は上面観が長方形を呈した形の整った石核である。剥離作業面は一面で、5枚の剥離面がみられる。打撃面は平坦で、特に調整されていない。165は厚手の剥片を用いて、周辺から中心部に向って小形の横長剥片を剥離したものである。剥離面を打撃面として表裏相互に行なわれている。164の剥片が接合している。166は自然面を打撃面として縦長の剥片を剥離したものと考えられる。剥離作業面は二面と思われるが主たる剥離面は一面であったと思われる。168は偏平な礫を用いた礫器状の石核である。礫の側辺部では、剥離面を打撃面として横長剥片を剥離している。末端部に二次調整痕が認められるが、これは打面調整のための剥離痕と思われる。以上の4点を石核として分類したが、該期の剥片剥離技術は不明瞭な部分が多く今後一考を要しよう。

礫器 (第102図167・169)

167は厚手の礫を素材とし、各方向から剥離をくり返し礫器としたもの。自然面、剥離面を打撃面とし、大小の剥離痕が入り組んでいる。ある種の石核とも考えられるが確証はない。169は偏平な礫の一端に小さな剥離痕が認められるもの。一部欠損するが、他に加工、あるいは使用された痕

跡はない。

疎器（第105図196）

丸い棒状の疎を素材としており、疎の表皮を薄く剥ぐように剥離をくり返している。最初に大きな成形剥離を施した後、細い剥離が全面を覆っている。

石皿（第103図170）

石皿の中央部分と思われるが大部分を欠損しており、本来の形状は不詳である。使用面はきわめてよく磨かれており、平らである。

有孔砥石（第103図171）

本遺跡では唯一の資料である。粒子の粗い砂岩を用いている。両面中央に浅い皿状の溝が認められる。大半を欠いており全体の形状は不明であるが、長方形に近い板状の砥石であると思われる。片側辺に細かな剥離痕が認められる。有孔砥石の用途に關係あるのか。あるいは破損後他の用途に転用されたか不明である。

局部磨製石器（第103図172、174、175）

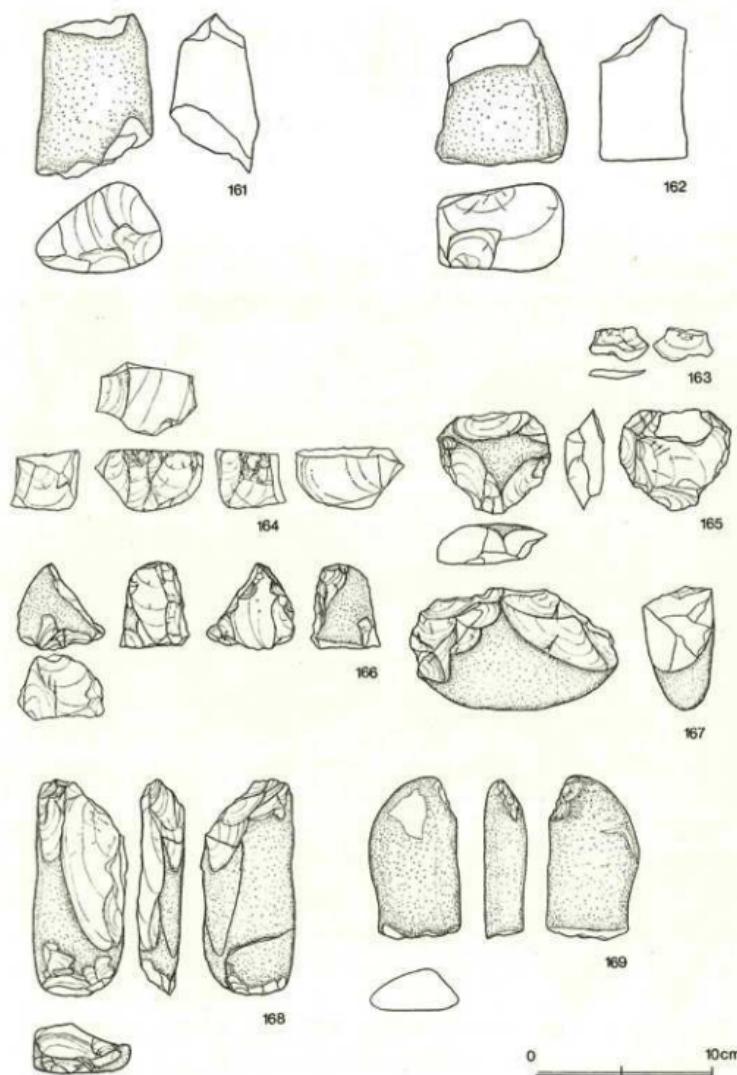
174は大半を欠損しており、詳細は不明であるが、石斧状を呈した石器の刃部と思われる。両面に自然面を大きく残しており、疎本来の形状を大きく変えていないと考えられる。研磨は両面に認められるが、特に片面に顕著である。直刃であり、使用痕が認められる。172と175は同種のものである。偏平で棒状の疎を用いて、その一端に研磨を加えたものである。172は風化がすんでおり詳細は不明だが、片面にわずかではあるが研磨痕がみられる。両面とも加工痕は顕著でなく、表面は自然に剥落したものと思われる。175は両面からよく磨かれ、円弧状の刃部を作り出している。中央部分には加工された痕跡はみられないが、基部にも一部研磨痕が残されている。

削器（第103図173、176～181）

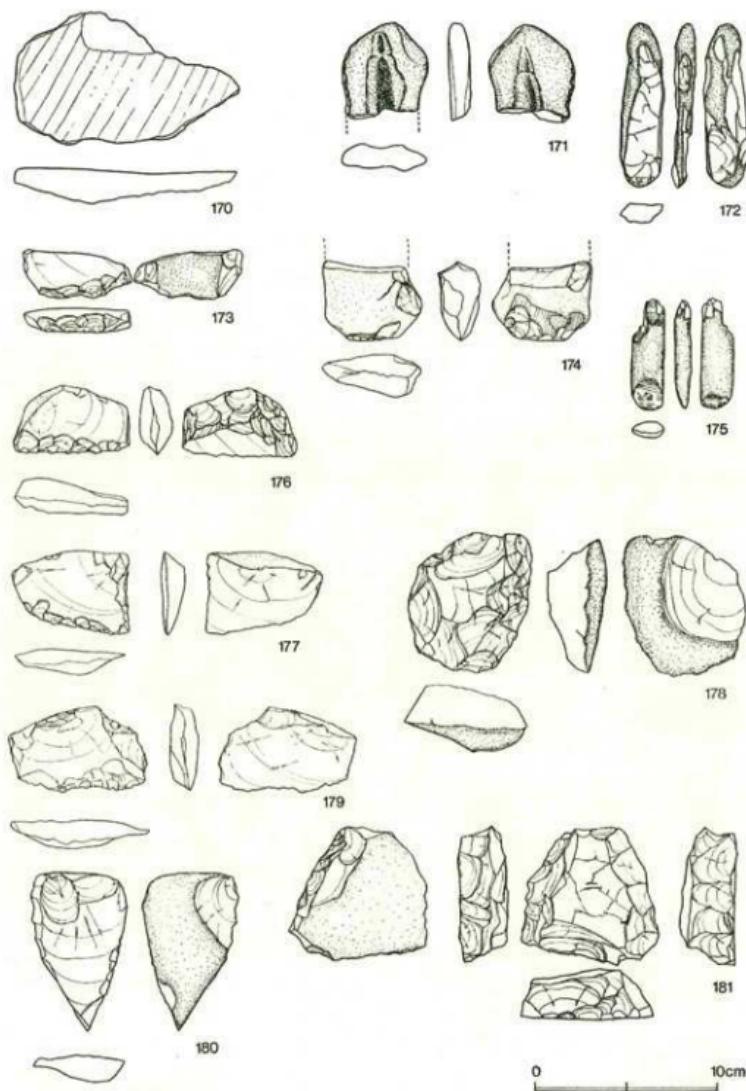
173、176は直刃削器の典型である。173は自然面側からの急斜な二次加工で鋸歯状の刃部を作り出している。176は頭部に自然面を残すやや縦長剥片の側辺に刃部を作出したもの。裏面も側辺に沿って大小の剥離痕がみられるが、厚さを調整するためであろう。177は不定形の剥片を素材としたもので、直交する二辺に加工が施されている。179は主剥離面側からの粗い加工で鋸歯状の刃部を作り出したもの。180は削器とするよりも二次加工のある剥片とした方が良いかもしない。片面に大きく自然面を残すが、その自然面側からの急斜な二次加工で刃部を作出している。178、181は大形厚手の削器である。178は分厚い剥片の側辺に粗雑な調整を施して削器状の石器に仕上げたもの。中央に主剥離面を残すが、周辺部から中心部分に向って大きな剥離面がみられる。181も厚手の剥片を素材とし、自然面側から全周辺に急斜な調整加工を施したもの。丁寧なつくりとはいがたいが、大形削器の完形品である。

剥片（第103図～第105図）

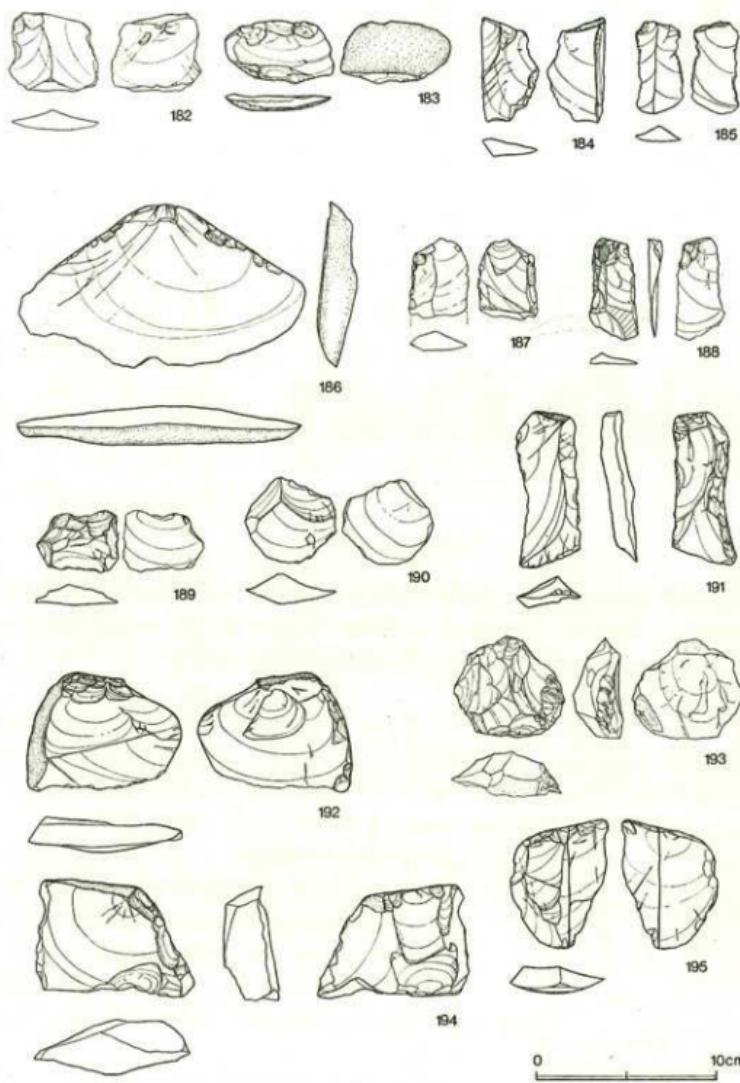
第104図には二次加工あるいは使用痕のある剥片を主に図示した。186は始状の大形剥片で、片面は自然面をそのまま残している。打面に近く側辺に二次加工が認められ、ゆるい円弧状を呈した末端部はかなり刃こぼれがみられる。185は側辺が平行する縦長の剥片で、両側辺の中央部分に細かな使用痕を有するもの。打面は自然面である。193は円形を呈する厚手の剥片である。表面は中心



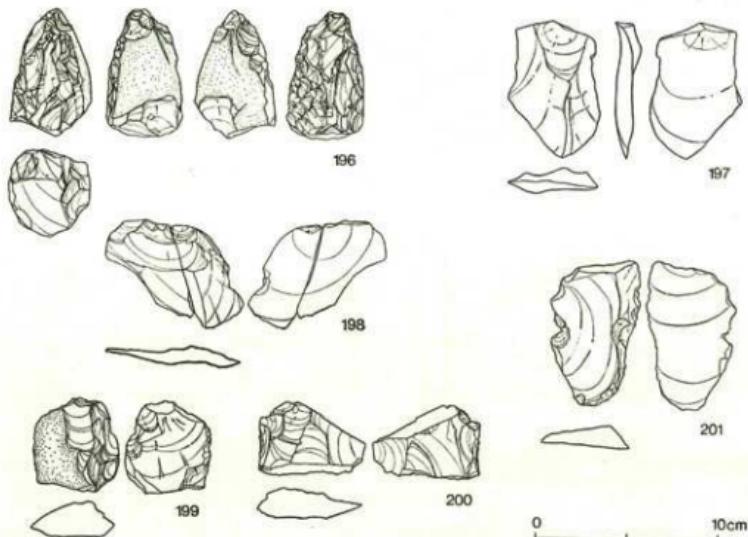
第102図 E ブロック石器(1)



第103図 E ブロック石器(2)



第104図 E ブロック石器(3)



第105図 E ブロック石器(4)

部に向って多くの剥離面がみられ、裏面は主剥離面を大きく残す。打面は自然面である。使用痕は認められない。調整剥片か。他の剥片の多くは剥離時に形成された鋸いエッヂの部分に使用痕が認められる。また、大半の剥片は打面あるいは打面に接する側辺に自然面を残す。

ブロック外 (第106図～第111図)

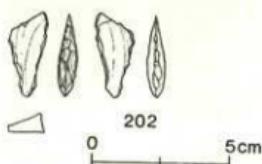
ここに図示した資料はいうまでもなくA～Eの各ブロックに属さないものをさす。しかし、本遺跡は他の時期の遺構を調査する目的で開始されたため、開始間もない頃は剥片類には番号をつけずにとりあげたものも多少ある。さらに、各ブロックの東側に立地する平安時代の集落跡を調査した折に覆土中等より出土したものもある。そのような資料をすべてグリッド外として扱った。

ナイフ形石器 (第106図202)

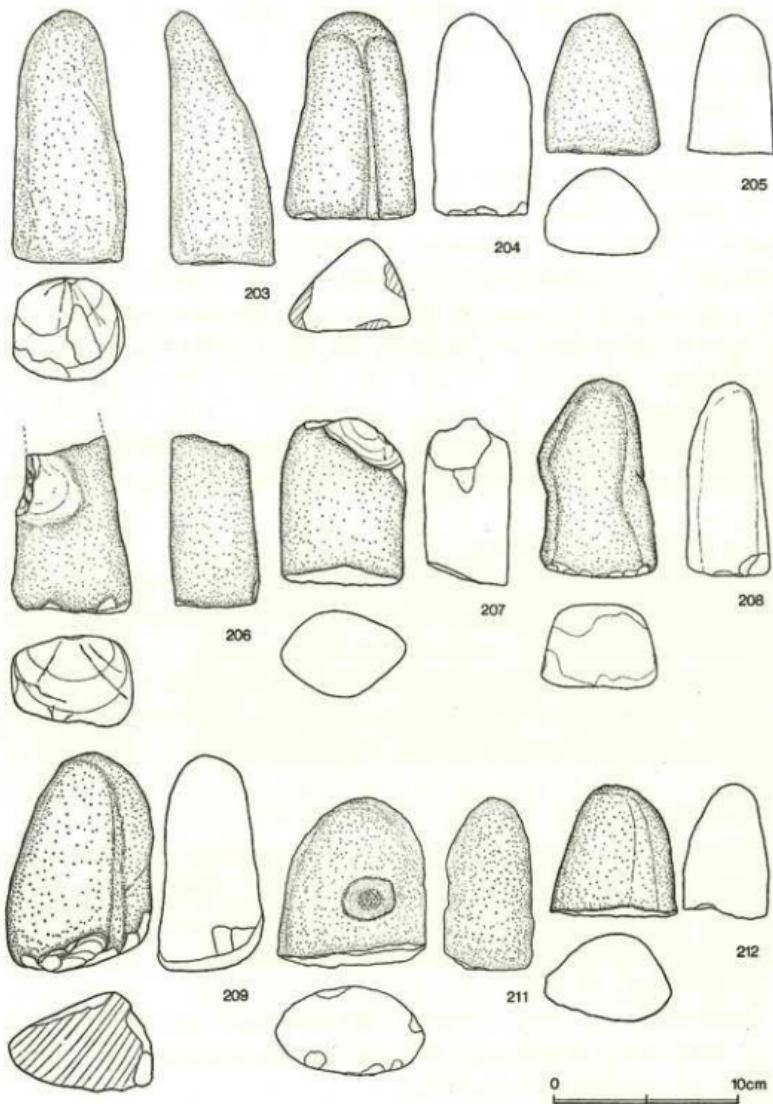
小形の横長剥片を用い、打面側の側辺にプランティングを施している。反対側の辺も雑ではあるが加えられている。刃部にはわずかに使用痕と思われる細かい剥離痕がみられる。先土器時代の所産である本資料は平安時代の集落跡を調査中出土したもので、周辺を精査したが該期の資料は検出されなかった。

スタンプ形石器 (第107図203～212)

ほとんど完形品であるが、206、207とが基部を欠損している。また、206は基部側辺部に調整加



第106図 ブロック外石器(1)



第107図 ブロック外石器(2)

工が施されているが、他の資料にはない。いずれの資料も1回の打撃ではほぼ平らな使用面を作出し多小にかかわらず研磨痕が認められる。209は使用面の大部分が磨かれている。また、208あるいは204のように面取りの施されているものもある。211は片面に凹石状の浅い凹みを1カ所所有している。出土したグリッドにはまとまりがなく、散発的であるが、C:ブロック周辺からの出土が目立つ。

打製石斧（第108図213～218）

213は大形打製石斧の半欠品である。胴中央部は表裏両面からの調整加工でわずかに抉りを入れている。刃部は自然面側からの調整で円弧状に作られているが、かなり使用された痕跡をとどめている。分胴形に近い形態になると思われる。215は分胴形の完形品である。形は整っているが、丁寧なつくりとはいがたい。中期以降の所産か。216、218は横円形を呈した打製石斧で、216は主剥離面側から、218は自然面側から施された調整剥離はそれぞれ浅く、中央部分にまでは及んでいない。214は側刃が平行する短冊形の石斧である。主として主剥離面側からの剥離で形を整えている。片面中央に自然面を残す。217は石斧状を呈するが、石斧として分類するのが妥当であるか否か問題がある。

磨製石斧（第108図219）

全面が良く研磨された石斧の刃部破片である。刃部は特に念入に磨かれ、円弧状を呈している。いうまでもなくグリッドからの単独出土である。他の石器群と同時期に属するものか否か疑問である。

砾器（第108図220・221、第109図222）

ブロックからも同種の資料が出土しているが、問題のある石器である。必ず自然面を残すのが特徴である。220は横断面が六角形を呈した完形品である。各面に大小の剥離面が多数入り組んでいるが、打撃の方向に齊一性はない。自然面は一面に帯状に残されているが、エッヂに沿って細かい剥離痕が多数みられる。221は横断面形が三角形状を呈するが、220と同種のものである。底面にも各方向からの剥離面がみられる。厚手の砾を素材とし、片面及び一端に打撃を加えている。一端は両面から加工が施され、鋭い刃部を作出している。当初石核とも考えたが、ここでは一応砾器としておく。

石核（第110図230～232）

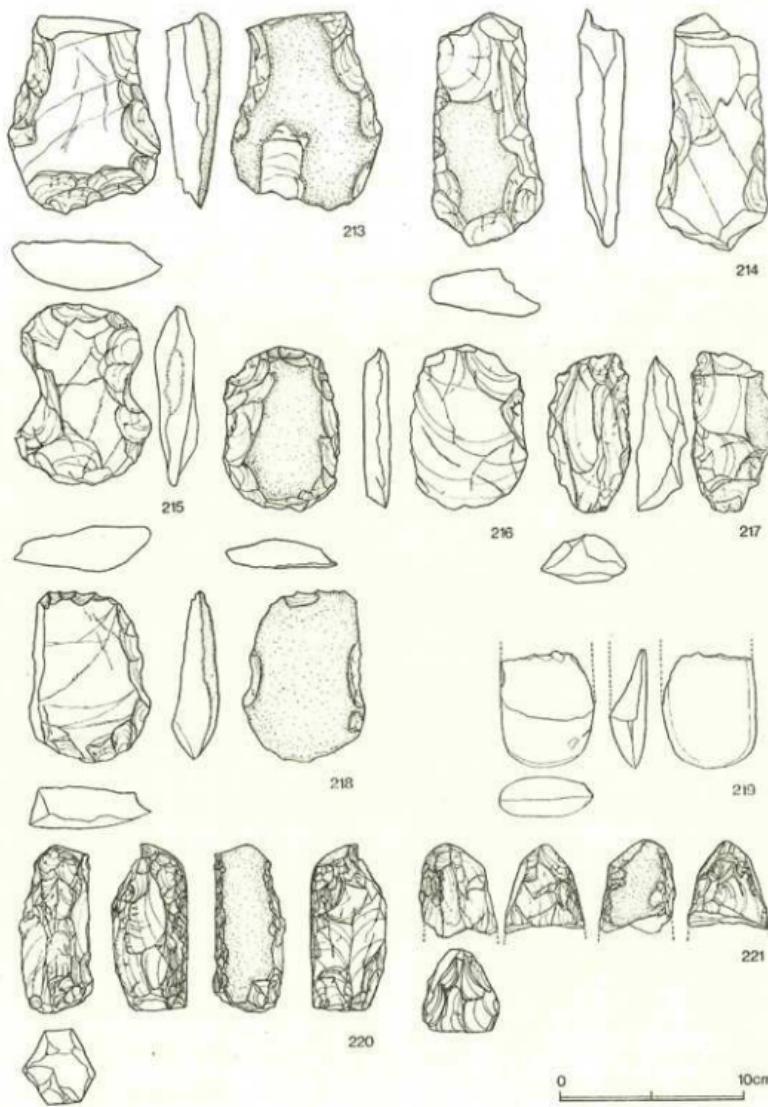
230は半円形を呈し、片面に4枚の剥離痕が残されている。打撃面中央に自然面が残るが、剥離作業面と接する縁辺部は粗い調整が施されている。231は各方向からの剥離痕がみられるが、特に自然面を打撃面としたものが目立つ。いずれも横長の小さな剥離痕である。232は石斧状を呈した石核で、やはり自然面を打撃面としている。

磨石（第109図223、226、228）

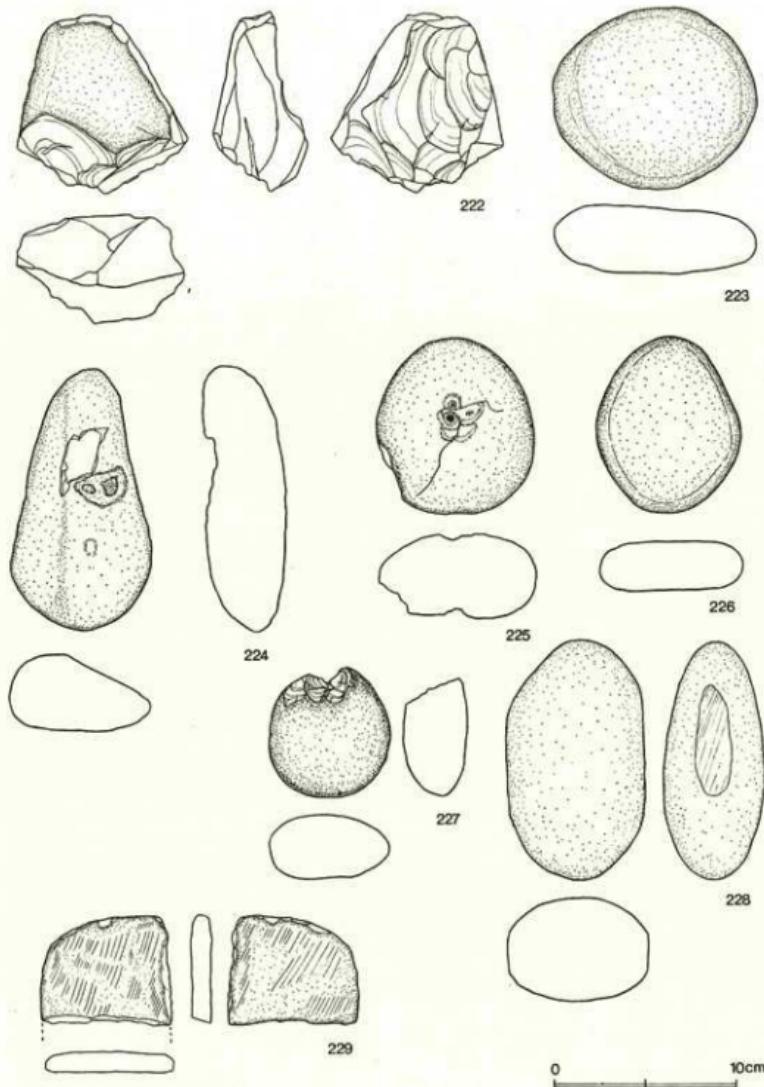
223と226は同形態のものである。横円形を呈した偏平な磨石である。一方、228はやや厚手のもので、両側刃中央部に使用面が認められるもの。同種の磨石は川崎市黒川東遺跡等でまとめて出土しているが、本遺跡は本資料1点のみである。

凹石（第109図224、225）

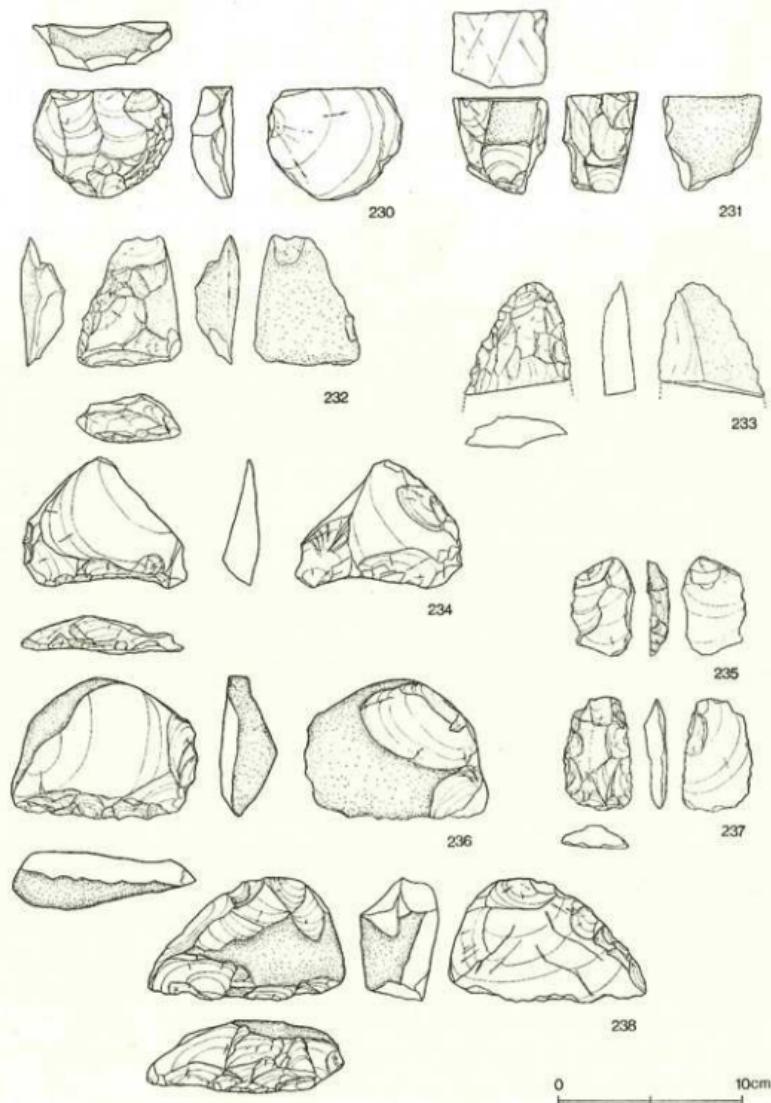
224は縦長の砾の片面に2カ所の凹みがみられる。凹みは浅く、皿状を呈する。225は円形を呈し



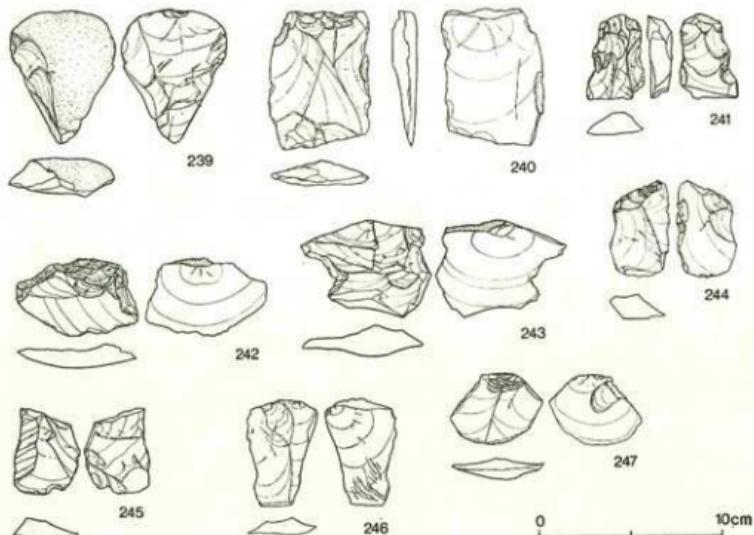
第108図 ブロック外石器(3)



第109図 プロック外石器(4)



第110図 ブロック外石器(5)



第1111図 ブロック外石器(6)

両面に數カ所の凹みを有するもの。凹みは接して中央にあり、224に比して凹みは深く、皿状あるいは擂鉢状を呈する。

ハンマーストーン（第109図227）

円錐の一端に使用痕跡がみられる。表面は風化がすんでおり、詳細は不明である。

砥石（第109図229）

板状を呈した偏平の砥石である。両面ともよく使われており、ザラザラした部分はほとんどない。周辺部には細かな剥離痕がみられるが、形を整えるための調整加工なのであろうか。

片面加工石器（第110図233）

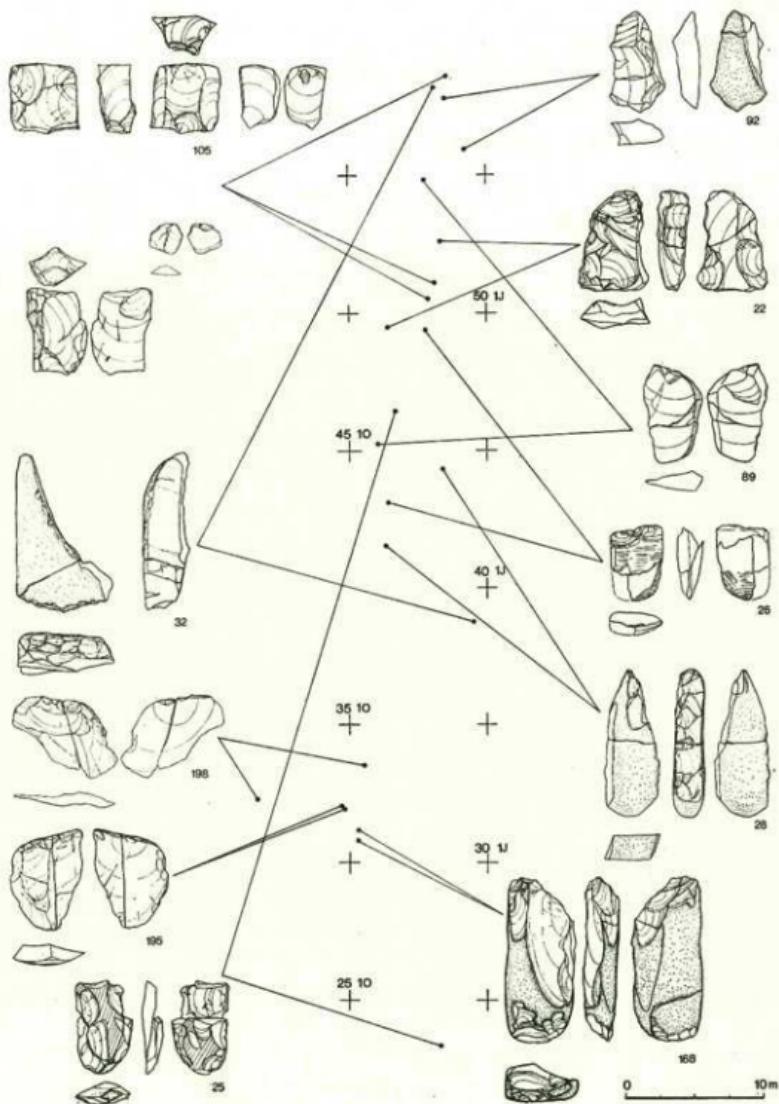
大半を欠損しており全体の形状は知りえないが、大形の尖頭器状を呈するものと思われる。成形剥離で厚さと形を整えた後、周辺部を鋸歯状に調整加工している。片面には自然面を大きく残し、剥離面が一枚みられる。広義の尖頭器に含まれようか。

削器（第110図234～236、238）

235は縦長剥片の片側辺に急斜な二次加工を施したもの。打面及び側辺の一部に自然面が残る。二次加工が施された反対側の辺に使用痕がみられる。234、236、238の3点は大形の剥片からつくられている。234は刃部がやや内湾するが、他の2点は直刃で鋸歯状を呈する。236と238は厚手の大形剥片の一辺に急斜な二次加工を施したもので、刃部は鈍い。

ヘラ状石器（第110図237）

横長剥片の周辺部を主剥離面側から調整したものである。側辺部はほぼ平行し、浅い剥離痕が並



第112図 接合資料出土位置図

んでいる。刃部はやや丁寧につくられ、使用痕もみられる。主剥離面を大きく残すが、バルブは除去されている。

剥片（第111図239～247）

形態は多様であり、使用痕が認められるものとそうでないものとがある。240や244は長方形を呈した剥片であるが、長辺に沿って使用痕がみられる。242や247は横長剥片の末端部に使用痕がみられる。やはり、打撃面周辺に自然面が残る剥片が目立つ。

A～E ブロック石器組成一覧

A ブロック	E ブロック	D ブロック			
石核	1	スタンプ形石器	2	スタンプ形石器	2
石斧	1	石核	4	磨石	1
硃器	4	硃器	2	硃器	2
スタンプ形石器	2	石皿	1	石皿	1
剥片	7	有孔砥石	1	石斧	1
	計15	局部磨製石器	2	削器	3
		局部磨製石斧	1	局部磨製石斧	1
B ブロック	剝器	8	剝片	4	
彫刻器	1	剥片	19		計15
スタンプ形石器	4	不明	1		
石斧	3		計41	グリッド	
石斧（状石器）	1			切出し形石器	1
磨製石斧	2	C ₁ ブロック		スタンプ形石器	9
硃器	5	スタンプ形石器	1	石斧	5
石核or調整剥片	1	剝器	5	石斧状石器	1
砥石	1	硃器	1	磨製石斧	1
磨石	1	搔器	1	硃器or石核	1
石核orスタンプ	2	石皿	1	磨石	3
石核or硃器	1	剥片	6	凹石	2
硃器（石斧）	1		計15	砥石	1
剝器	7			ハンマーストーン	1
ヘラ状石器	1	C ₂ ブロック		石核	3
磨製石器	1	スタンプ形石器	6	片面加工石器	1
削器or剥片	1	打製石	1	剝器	4
石核	9	磨製石器	1	ヘラ状石器	2
石核	1	搔器	1	剥片	8
剥片	48	剝器	4	不明	2
不明	1	剥片	7		計45
	計93		計20		

北坂遺跡出土石器

番号	種別	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	番号	種別	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質
A	プロック 1 石核	4.7	10.3	4.0	225	砂質頁岩	28	礫器	10.5	4.0	2.1	140	硬質砂質 頁岩
2 局部磨製 石斧	5.8	4.0	1.2	48	硬質砂質 頁岩	29	礫器(石斧)	4.6	5.5	2.8	107	硬質砂質 頁岩	
3 石核	6.2	5.8	3.8	161	頁岩	30	礫器	5.5	8.2	4.1	284	閃綠岩	
4 スタンプ形 石器	8.9	6.4	3.7	290	頁岩	31	礫器	8.1	10.6	5.5	524	砂岩	
5 磨器	10.0	9.8	4.0	424	砂岩	32	礫器	11.2	7.0	3.4	230	硬質砂質 頁岩	
6 スタンプ形 石器	10.8	7.4	5.2	529	閃綠岩	33	礫器	9.0	6.6	3.7	291	頁岩	
7 磨器	6.9	9.0	4.0	274	砂岩	34	石核・調整 剥片	7.2	5.5	2.4	140	硬質砂質 頁岩	
8 磨器	6.3	10.0	4.2	346	砂岩	35	砾石	6.0	8.3	1.2	90		
9 剥片	6.0	3.9	1.2	30	頁岩	36	磨石	8.6	6.6	3.7	324		
10 剥片	6.8	5.2	1.9	60	砂質頁岩	37	礫器	7.6	3.8	4.5	125	硬質砂質 頁岩	
11 剥片	5.8	5.6	2.1	64	硬質頁岩	38	礫器	6.1	3.8	3.2	70	硬質砂質 頁岩	
12 剥片	2.6	4.7	0.9	10	硬質砂質 頁岩	39	礫器	9.9	4.7	5.0	235	砂質頁岩	
13 剥片	2.3	4.4	0.7	10	チャート	40	削器	9.0	10.1	3.3	310	砂岩	
14 剥片	2.7	4.3	0.7	9	硬質頁岩	41	削器	6.5	11.8	2.6	206	硬質砂質 頁岩	
15 剥片	4.2	2.1	0.6	5	硬質砂質 頁岩	42	削器	6.9	9.4	1.9	145	頁岩	
						43	削器	5.9	6.6	1.4	65	頁岩	
B	プロック 16 形刻器	4.4	2.3	1.0	13	チャート	44	トランシエ 様石器	6.0	3.7	1.1	28	硬質砂質 頁岩
17 スタンプ形 石器	10.3	9.0	4.5	545	花崗岩	45	磨製剥片	5.2	3.6	1.0	29	硬質砂質 頁岩	
18 スタンプ形 石器	7.5	5.1	3.1	210	花崗岩	46	削器	3.3	5.7	1.6	20	硬質砂質 頁岩	
19 スタンプ形 石器	9.8	7.2	3.6	385	花崗岩	47	トランシエ 様石器	5.8	3.5	1.0	20	頁岩	
20 スタンプ形 石器	12.1	7.2	5.1	560	砂岩	48	剥片	8.8	14.6	2.8	341	硬質砂質 頁岩	
21 石斧	11.1	5.4	3.6	262	頁岩	49	剥片	8.8	4.6	1.7	71	頁岩	
22 石斧 (状石器)	7.3	5.1	2.0	84	硬質砂質 頁岩	50	剥片	5.3	3.9	1.4	25	硬質砂質 頁岩	
23 石斧	5.6	4.7	1.3	40	頁岩	51	剥片	3.6	3.3	1.2	11	硬質砂質 頁岩	
24 石斧	5.4	3.7	1.4	46	硬質砂質 頁岩	52	剥片	6.8	4.1	1.4	40	砂質頁岩	
25 磨製石斧	6.7	4.1	1.5	37	硬質砂質 頁岩	53	剥片	7.1	4.3	1.5	49	頁岩	
26 磨製石斧	5.4	3.8	1.7	30	頁岩	54	削器or剥片	5.7	4.8	1.2	40	硬質砂質 頁岩	
27 磨器	7.0	8.8	5.4	456	頁岩	55	剥片	5.1	7.6	1.3	50	頁岩	

番号	種別	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	番号	種別	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質
56	弱片	3.7	4.6	0.9	18	硬質砂質 頁岩	86	弱片	5.1	3.3	0.8	14	硬質砂質 頁岩
57	弱片	5.0	4.8	1.9	61	硬質砂質 頁岩	87	弱片	3.9	4.6	1.3	27	硬質頁岩
58	弱片	5.3	5.6	1.0	38	硬質砂質 頁岩	88	弱片	6.1	4.8	1.2	35	頁岩(砂)
59	弱片	4.7	5.7	1.5	40	硬質砂質 頁岩	89	弱片	7.0	4.3	1.4	40	頁岩
60	弱片	4.6	5.6	1.4	26	硬質砂質 頁岩	90	弱片	5.1	4.2	1.1	24	硬質砂質 頁岩
61	弱片	4.4	4.8	0.9	15	チャート	91	弱片	6.6	2.5	0.9	14	硬質砂質 頁岩
62	弱片	4.0	6.9	1.2	22	硬質砂質 頁岩	92	弱片	7.2	4.1	1.8	50	頁岩
63	弱片	4.6	5.5	1.8	45	チャート	93	弱片	6.7	2.5	1.2	20	硬質砂質 頁岩
64	弱片	3.4	4.9	1.1	15	硬質砂質 頁岩	94	弱片	5.1	3.5	1.3	25	硬質砂質 頁岩
65	弱片	4.1	6.3	1.2	38	砂質頁岩	95	弱片	3.4	4.2	1.2	17	硬質砂質 頁岩
67	弱片	2.7	4.7	0.6	6	硬質砂質 頁岩	96	石鑑	1.8	1.6	0.3	1	チャート
68	弱片	2.4	5.0	0.9	9	頁岩	97	石鑑	1.9	1.4	0.2	0.5	チャート
69	弱片	2.2	4.4	0.9	10	硬質砂質 頁岩	98	石鑑	2.4	1.6	0.4	1	チャート
70	弱片	7.2	7.6	1.9	102	硬質砂質 頁岩	99	石鑑	2.0	1.3	0.3	1	チャート
71	弱片	9.9	5.0	3.0	130	砂岩	100	石鑑	2.4	1.4	0.5	2	チャート
72	弱片	5.8	5.2	0.9	25	硬質砂質 頁岩	101	石鑑	2.0	1.2	0.3	1	チャート
73	弱片	3.7	5.4	1.8	54	硬質砂質 頁岩	102	石鑑	2.0	1.7	0.6	1	チャート
74	弱片	2.9	4.3	0.7	10	硬質砂質 頁岩	103	石鑑	1.5	1.4	0.3	0.5	チャート
75	弱片	5.2	4.3	1.7	52	頁岩	104	石鑑	2.9	1.8	0.7	4	チャート
76	削器	5.7	7.5	1.9	90	硬質頁岩	105	石核	4.8	4.5	2.6	100	頁岩
77	削器	2.5	4.5	1.3	14	頁岩	106	弱片	4.4	2.5	1.0	20	頁岩
78	弱片	3.0	4.5	1.0	16	頁岩	108	弱片	2.2	2.2	0.7	5	頁岩
79	弱片	5.3	5.4	1.8	40	硬質頁岩	109	弱片	5.9	4.0	2.4	60	頁岩
80	弱片	3.9	4.0	1.6	34	硬質砂質 頁岩	C ₁	ブロック					
81	弱片	3.7	5.5	0.9	18	硬質砂質 頁岩	111	スタンプ形 石器	10.6	4.3	4.2	500	結晶片岩
82	弱片	5.2	5.0	2.2	49	硬質砂質 頁岩	112	鑿器	13.0	9.2	4.8	879	砂岩
83	弱片	4.7	4.7	0.9	27	硬質砂質 頁岩	113	削器	4.1	3.5	1.9	45	硬質砂質 頁岩
84	弱片	6.2	6.3	1.6	59	頁岩	114	搔器	4.8	3.7	1.6	35	頁岩
85	弱片	5.4	5.5	1.2	34	硬質砂質 頁岩	115	弱片	3.8	1.4	0.5	2	チャート

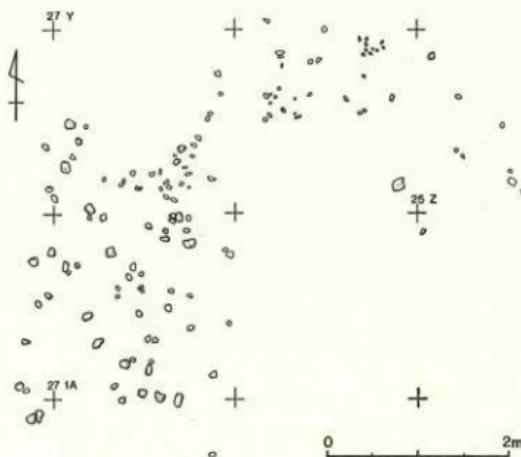
番号	種別	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	番号	種別	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質
116	削器	3.1	5.0	1.0	20	硬質砂質 頁岩	146	剥片	6.9	3.8	1.8	69	砂質頁岩
117	剥片	6.0	10.2	1.7	135	頁岩	145	剥片	4.0	6.2	1.0	20	砂質頁岩
118	削器	5.3	4.9	1.9	40	硬質砂質 頁岩	D	ブロック スタンプ形 石器	11.0	7.3	5.1	618	砂岩
119	剥片	7.1	5.8	1.8	84	硬質頁岩	146	スタンプ形 石器	9.8	5.9	3.2	296	砂岩
120	削器	6.1	4.5	0.9	24	硬質砂質 頁岩	147	スタンプ形 石器	11.1	7.9	3.6	361	砂岩
121	削器	3.7	7.4	1.9	45	砂岩	148	磨石	9.2	6.7	4.9	413	砂岩
122	剥片	5.7	5.2	2.8	78	硬質砂質 頁岩	149	礫器	10.6	14.1	4.7	104	閃綠岩
123	剥片	6.5	6.4	1.5	60	頁岩	150	石皿	7.1	7.0	2.4	149	砂岩
124	剥片	5.5	3.3	0.8	14	頁岩	151	礫器	7.8	4.7	1.7	86	硬質頁岩
125	石鎚	2.2	1.6	0.6	1	チャート	152	局部磨製 石斧	4.1	4.5	1.5	34	硬質砂質 頁岩
C5	ブロック スタンプ形 石器	11.5	8.8	4.1	556	閃綠岩	154	石斧	3.8	3.7	1.4	20	硬質砂質 頁岩
126	スタンプ形 石器	9.4	7.9	4.1	490	閃綠岩	155	削器	3.7	7.0	0.9	27	硬質砂質 頁岩
127	スタンプ形 石器	11.0	7.6	4.9	590	閃綠岩	156	削器	2.7	6.1	1.4	25	頁岩
128	スタンプ形 石器	8.9	7.0	3.1	360	閃綠岩	157	剥片	4.8	4.7	1.4	20	チャート
129	スタンプ形 石器	9.7	6.1	4.9	446	砂岩	158	剥片	3.6	6.7	1.3	22	赤色 チャート
130	スタンプ形 石器	8.5	6.9	4.5	410	閃綠岩	159	剥片	6.7	6.3	1.5	65	硬質砂質 頁岩
132	剥片	9.4	16.5	2.6	508	片岩	160	剥片	7.3	4.0	2.1	55	頁岩
133	打製石器	11.7	7.0	4.0	339	頁岩	E	ブロック スタンプ形 石器	8.7	7.1	4.6	445	砂岩
134	磨製石器	4.8	3.8	1.2	41	硬質砂質 頁岩	161	スタンプ形 石器	8.0	7.3	4.4	381	砂岩
135	搔器	5.0	3.7	1.9	39	頁岩	162	石核	3.4	5.9	3.5	89	硬質頁岩
136	削器	4.8	6.3	1.5	41	硬質砂質 頁岩	163	石核	1.5	2.9	0.4	2	頁岩
137	削器	2.9	5.1	0.9	16	硬質砂質 頁岩	164	剥片	5.4	6.0	2.2	80	頁岩
138	削器	6.2	3.8	1.4	45	頁岩	165	石核	4.7	3.9	3.7	82	硬質砂質 頁岩
139	削器	4.5	4.7	1.5	34	硬質砂質 頁岩	166	石核	6.5	11.6	3.9	410	砂質頁岩
140	削器	5.7	4.2	1.3	43	硬質砂質 頁岩	167	礫器	11.7	4.9	2.7	256	硬質砂質 頁岩
141	剥片	6.9	5.4	1.3	45	硬質頁岩	168	石核	9.1	4.9	2.3	144	硬質砂質 頁岩
142	剥片	4.4	5.7	1.6	45	砂岩	169	礫器	7.2	12.2	1.3	155	綠泥片岩
143	剥片	6.2	5.3	1.7	55	硬質頁岩	170	石皿					

番号	種別	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	番号	種別	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質
171	有孔砥石	5.4	4.7	1.4	32		200	剥片	4.0	5.8	1.6	45	頁岩
172	局部磨製石器	8.9	2.3	1.0	28	砂質頁岩	201	削器	7.7	4.8	1.1	53	頁岩
173	削器	2.4	6.0	1.2	25	硬質砂質頁岩	202	グリット形 切出し形石器	2.8	1.2	0.6	2	チャート
174	局部磨製石斧	4.3	5.1	1.6	49	硬質砂質頁岩	203	スタンプ形 石器	13.1	5.9	5.5	664	砂岩
175	局部磨製石器	6.0	1.8	0.8	15	硬質砂質頁岩	204	スタンプ形 石器	10.8	6.4	5.1	524	閃綠岩
176	削器	3.4	6.0	1.7	37	頁岩	205	スタンプ形 石器	7.4	6.1	4.4	285	閃綠岩
177	削器	4.6	6.0	1.1	30	硬質砂質頁岩	206	スタンプ形 石器	9.5	6.6	4.7	426	頁岩
178	削器	7.5	6.8	3.1	210	頁岩	207	スタンプ形 石器	8.3	6.4	4.6	450	砂岩
179	削器	4.6	7.8	1.2	45	硬質砂質頁岩	208	スタンプ形 石器	10.4	6.4	4.6	509	閃綠岩
180	削器	7.4	7.3	2.8	13	硬質砂質頁岩	209	スタンプ形 石器	11.3	7.2	5.2	653	閃綠岩
181	削器	4.0	4.6	1.1	25	硬質砂質頁岩	211	スタンプ形 石器	9.0	8.1	4.8	575	閃綠岩
182	剥片	3.5	6.1	0.7	22	硬質砂質頁岩	212	スタンプ形 石器	6.8	7.0	4.7	304	閃綠岩
183	剥片	5.7	3.0	0.9	15	硬質砂質頁岩	213	石斧	10.4	8.2	2.2	300	頁岩
184	剥片	5.2	2.6	0.9	10	硬質砂質頁岩	214	石斧	12.5	6.0	2.5	265	綠泥片岩
185	剥片	10.0	15.9	2.1	303	硬質砂質頁岩	215	石斧	9.8	7.4	2.5	180	頁岩
186	剥片	4.3	3.1	1.1	15	硬質砂質頁岩	216	石斧	8.3	6.0	1.5	116	頁岩
187	剥片	5.6	2.6	0.6	9	砂質頁岩	217	石斧狀石器	8.6	4.3	2.4	107	硬質砂質頁岩
188	剥片	3.3	4.5	1.1	14	硬質頁岩	218	石斧	9.0	6.2	2.2	160	頁岩
189	剥片	4.8	5.1	1.6	27	硬質砂質頁岩	219	磨製石斧	6.4	5.2	2.0	83	輝綠岩
190	剥片	8.1	3.2	1.3	44	硬質砂質頁岩	220	疊器	8.8	3.7	4.0	210	硬質砂質頁岩
191	剥片	6.3	8.8	1.7	109	硬質砂質頁岩	221	疊器	4.9	4.2	4.4	108	硬質砂質頁岩
192	剥片	5.5	6.1	2.7	86	硬質砂質頁岩	222	疊器	9.9	9.5	5.2	533	頁岩
193	剥片	5.7	8.5	2.7	168	硬質砂質頁岩	223	磨石	9.9	11.1	3.5	574	砂岩
194	剥片	6.3	4.8	1.5	52	硬質砂質頁岩	224	凹石	14.0	7.5	3.5	506	閃綠岩
195	剥片	6.9	4.2	4.6	173	硬質砂質頁岩	225	凹石	9.2	8.6	4.6	495	閃綠岩
196	疊器	7.2	4.7	1.0	38	頁岩	226	磨石	9.2	8.0	9.7	331	砂岩
197	剥片	5.8	7.5	0.7	25	硬質砂質頁岩	227	ヘンマーニー ストーン	6.8	6.7	3.4	221	砂岩
198	剥片	5.0	4.5	1.9	55	頁岩	228	磨石	13.0	7.6	5.6	750	砂岩

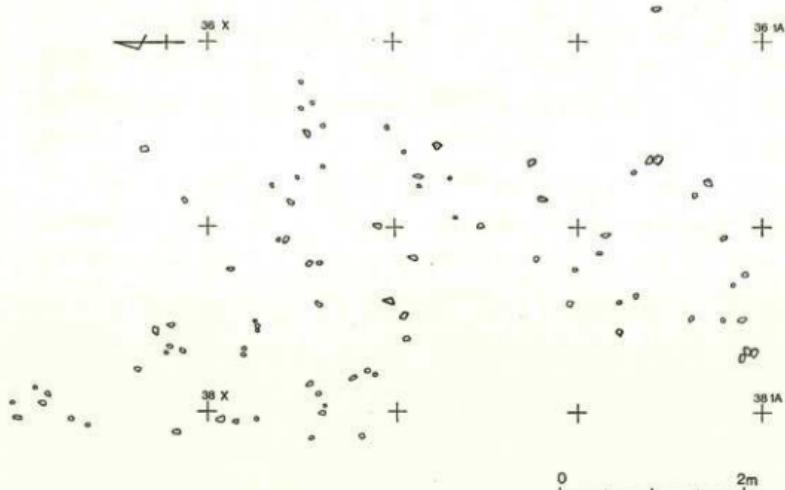
番号	種別	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	番号	種別	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質
229	砥石	5.9	7.0	1.2	74		230	剥片	7.2	5.7	1.8	78	硬質砂質 頁岩
230	石核	5.7	7.1	2.2	85	硬質砂質 頁岩	240	剥片	7.4	5.1	1.7	65	硬質砂質 頁岩
231	石核	5.1	5.2	4.0	165	硬質砂質 頁岩	241	剥片	4.4	3.1	1.2	20	硬質砂質 頁岩
232	石核	6.7	5.4	2.6	116	硬質砂質 頁岩	242	剥片	4.2	6.5	1.0	30	頁岩
233	片面加工 石器	6.1	5.5	1.7	55	頁岩	243	剥片	5.2	6.1	1.7	49	硬質頁岩
234	削器	6.4	8.6	1.7	95	硬質砂質 頁岩	244	剥片	5.2	3.1	1.5	18	硬質砂質 頁岩
235	削器	5.3	3.5	1.2	22	硬質砂質 頁岩	245	剥片	4.6	3.6	1.2	20	チャート
236	削器	7.5	10.4	2.9	246	砂質頁岩	246	剥片	5.6	3.5	0.9	20	硬質砂質 頁岩
237	トランシエ 様石器	5.6	3.2	1.1	26	頁岩	247	剥片	3.7	5.2	1.2	16	硬質砂質 頁岩
238	削器	6.6	10.7	3.9	355	硬質砂質 頁岩							

(2) 集石遺構、土壤

本遺跡で検出された縄文時代の遺構として前期諸磧a式期の土壙1基と時期不詳の集石遺構2カ所がある。土壙は調査区東南寄りの緩斜面に、集石は台地頂部の平坦面に占地している。両集石間



第113図 1号集石遺構

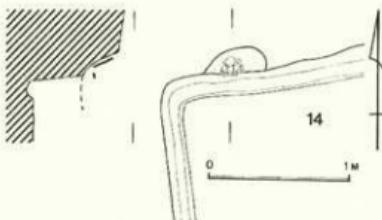


第114図 2号集石遺構

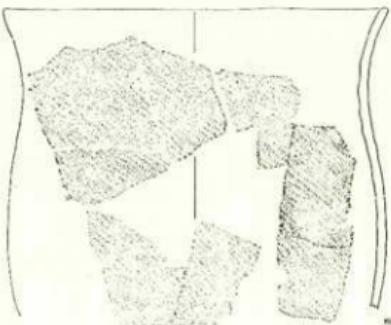
の距離は約20m強を計り、東側を1号、西側を2号とした。

1、2号集石 (第113・114図)

1号集石は C1 ブロックの北約7mのところにある。丘陵中央部はほぼ平坦といってよいが、ゆるやかな起伏がある。本集石は平坦面から突出するかたちで、僅かに北へ傾斜する部分に立地している。全体に L字形を呈するが、分布に粗密がある。南側に小児頭大の比較的大きな疎が密に分布し、北東部は拳大の疎が目立ち、分布も散漫である。全体的には $4\text{ m} \times 5\text{ m}$ 程の規模をもつが、南側の $2\text{ m} \times 3\text{ m}$ の範囲が特に濃い分布を示す。ほとんどの疎が熱を受け、表面が変色して割れています。石材は砂岩が多く、他に若干の閃緑岩



第115図 1号土壤



第116図 土壤出土土器

がある。

2号集石はDブロックの北西約10mに位置する。平坦ともいえるゆるい北斜面にあり、丘陵の中央部分に占地している。礫の分布に濃淡がなく、3m×7m程の規模をもち、南北に長く散布している。礫には大小あるが、分布に偏りはみられない。1号集石同様熱を受けており、表面が赤色に変化し割れているものが多い。石材は砂岩系のものが多数を占める。

両者とも遺構内からは石器、剝片等の出土ではなく、周辺部から若干の剝片が出土している。

また、石材は礫器類と共通しており興味深い。
(水村孝行)

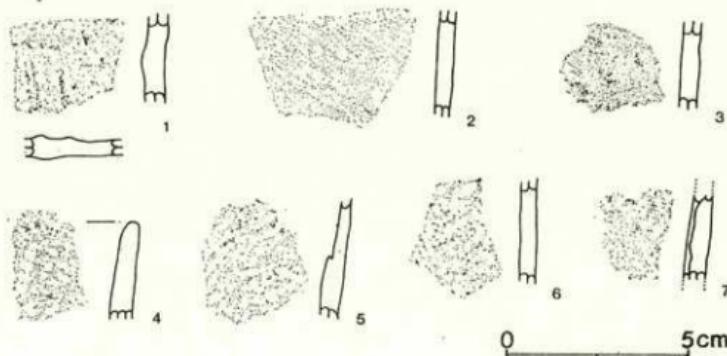
土壤(第115図)

14号住居跡の北西コーナー部に検出された。南半は住居跡に切られている。プランは橢円形を呈すると思われ45×18cmが残存していた。深さは10cm。底に接して土器大形破片がまわるように据えられていた。内容物を示唆する痕跡は認められない。覆土、土器内充土とも褐色土一層であった。

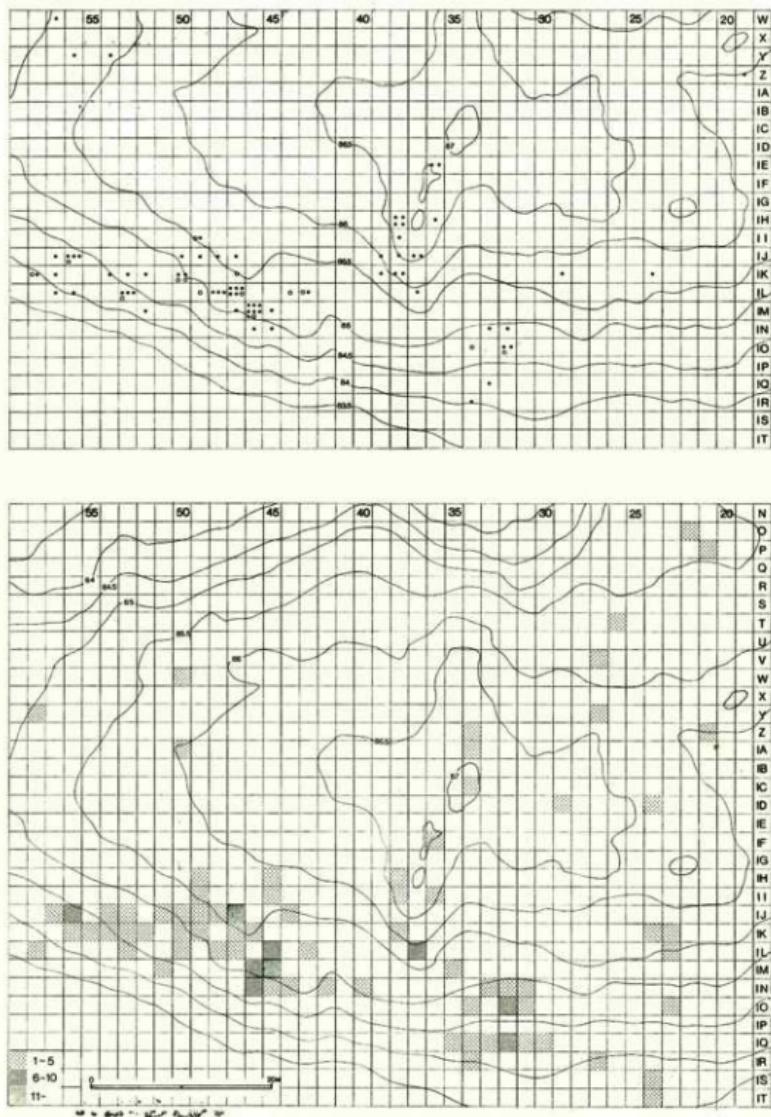
出土した土器(第116図)は口縁部がゆるやかに外反する深鉢で県内に特徴的な器形である。推定口径34.2cm前後で胴部最大径もほぼ等しい。全面に施された繩文(RL)は条節とも整っており諸環ア式に比定できる。表面は剥落した部分が目立つが内面は入念に磨かれ平滑となっている。胎土に多量の砂粒、赤色粒子を含む。焼成良、茶褐色。
(中島 宏)

(3) 繩文土器(第117・120~125図)

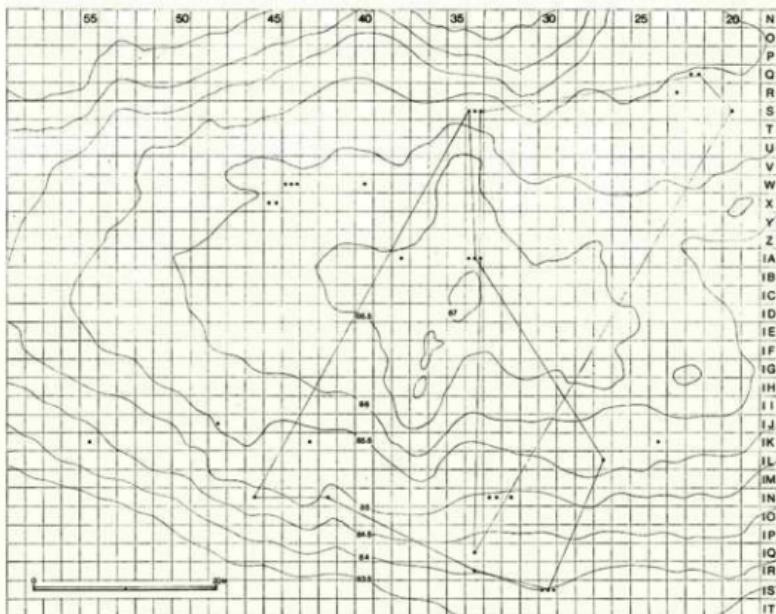
繩文土器は主に台地頂部から南側斜面にかけてのグリッドで、表土下部および褐色土中から出土した。時期は草創期縄起線文系土器の疑いのあるものから後期縄之内I式(I~V群)にわたるが主体は早期に属する土器群である。うち撚糸文(II-1, 2類)無文(II-3, 4類)押型文(II-5類)土器にやまとまりがある。遺物の平面分布(第118図、119図)を見ると、礫群のA、B、Eブロックと重なり、各類による偏在は認められず、とりわけAブロックに集中している。しかし沈線文系土器(6類)は資料数が少ないせいか集中する区域を欠き、台地頂部に散在している(第119図)。



第117図 繩文土器(1)



第118図 1群土器分布図(上1・2・5類、下3・4類)



第119図 Ⅰ群土器分布図（6類）

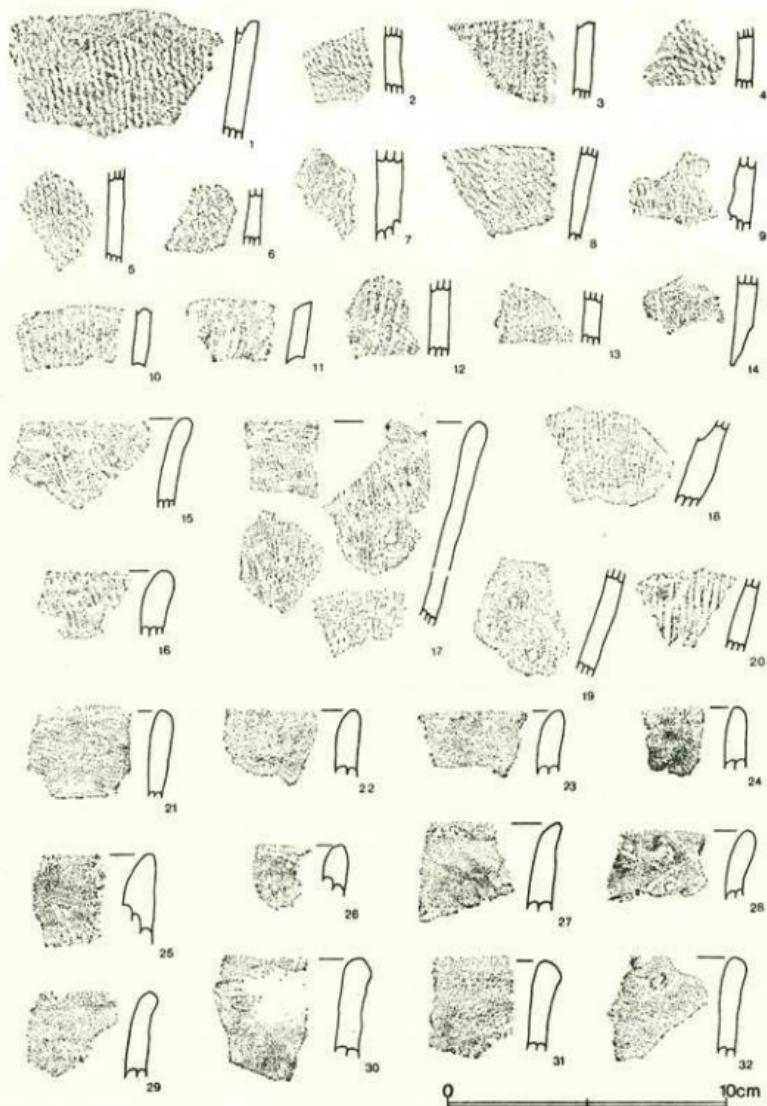
南側に分布する資料は貧弱ながら先のクラスターに属している。これらのうち数片については同個体の確認、接合資料の操作から南北、北東↔南西方向に約50~55mの移動を読みとることができる。地形からすると北から南への流れが推察され、A、B、Eプロックは生活跡を反映するものでなく、二次堆積の結果であると推測される。

以下、時期、型式を主な基準として報告する。

I群 草創期に位置づけられるもの

隆線文系土器（1）とその胸部（2, 3）、西谷、水久保タイプの多縦文系土器（4~7）とが出土している。両種とも明確な資料を欠くため決定的ではないが、図示した点のほかに後者についても、数点の細片がある。出土グリッドは1, 4が24—I K, 3は52—I K, 5は46—I M, 6は8—I Eで散発であった。

1は細隆起線にちかい。2条の縦走する隆線が観察される。幅25~4mm、貼付か否か不明。器面の凹凸が激しく、器厚は4~6mm。胎土に比較的多くの砂粒を含み器内外面に繊維らしき痕がみられる。焼きは良く、茶褐色、暗褐色を呈す。2は表面が丁寧にみがかれ平滑で、斜位の整形痕をのこす。器厚4.5mmで焼きはきわめて良い。微砂粒を含む。茶褐色を呈す。3も同様であるが別個体。胎土に5mm大の小石を含む。器厚5mm表面茶褐色、内面黒褐色。4~7は縦文が施されたものである。羽状施文は確認できない。6を除き縦文施文後、器面がナデられているようで条筋が不明



第120図 繩文土器(2)

瞭になっている。原体は4、6がLR、5はR&か。5にはハの字爪形文に類似する梢円の刺突痕が認められる。内面に段をもつ。器厚5~7mm。胎土に微砂粒を含み、焼きは良く4~6が茶褐色、7が赤褐色を呈す。

Ⅱ群 早期に属するものを一括する燃系文系土器（1~4類）押型文土器（5類）沈線文系土器（6類）条痕文系土器（7類）が出土している。

1類（第120図1~414）

燃系文が施されているものを一括する。口縁部1片を含み、総数60片が出土しているが2cm大小の小片が多く、図示した土器片は大形に入る。繩文は少く燃系文が9割以上を占める。

原体は3、10~12がL、他はR。1~6（a種）は原体の燃りがきつく、施文は深い。器表はザラつく。6~9（6種）は施文前に器面がナデられており平滑になっている。9の無文部には整形時の擦痕が観察される。施文は浅く原体の条間があき、稻荷原式土器の燃系にちかい。10は胴下半の破片で燃系は細い。13、14の原体は細く密接して巻かれている。胎土に多くの砂、小石が含まれる。1には7mmの大いな小石が含まれ器表に出て施文を妨げている。6~9、13、14は特徴的に片岩粒を含む。焼成良。

2類（15~20）

縦条体条痕が施文されたもの。口縁部4片を含み総数10片を抽出したが、ほかに本類の疑いがあるものが數片ある。口縁部はわずかに外反（15、16）肥厚（17）する。器面整形後15、16は口唇外部、17は口唇直下から底部にかけて原体をひきずっている。節を確認できるものはない。17は細い条線状の効果となっている。胎土に砂粒、小石のほか片岩粒を含む。15は茶褐色、他は赤褐色を呈す。1類とはほぼ同時期に位置づけられよう。

3類（21~32）

1、2、4類に共伴する無文土器口縁部を一括する。口唇部の形態に次の3種がある。

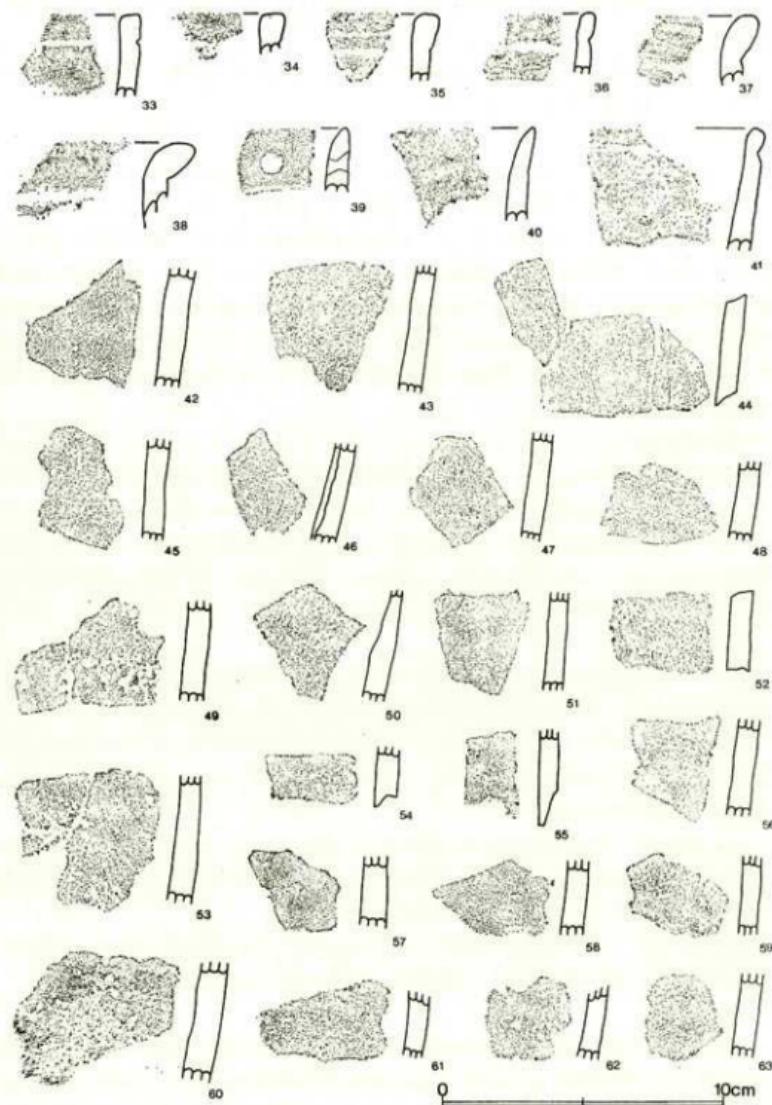
a種（21~26） 口唇部が丸棒状、内削ぎ状を呈すもの。21は口唇外部にかすかな稜をもち、口唇下3cmで器厚が4mmと半減する。内外面とも入念にナデられ平滑で焼きの良い土器である。暗赤褐色を呈する。22~26はほぼ直線的に開き、口唇内側が内削ぎ状となっている。22、24は赤褐色、23、25、26は茶褐色を呈す。

b種（27~29） 口唇部がわずかに外反するもの。27はa種にちかく内削ぎ状を呈す。28はわずかに肥厚しながら外反する。器形、胎土、色調とも2類16に酷似する。29は角頭状を呈し、凹部には横位のナデ痕がのこる。27は赤褐色、29は茶褐色を呈す。

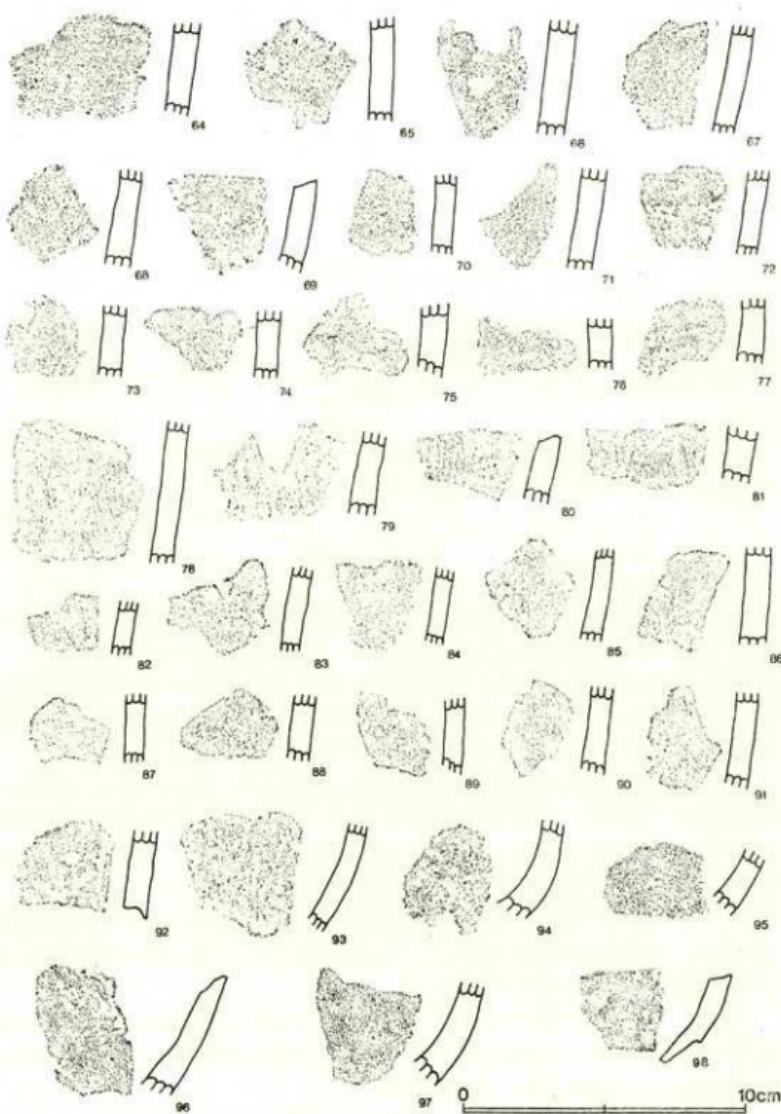
c種（30~32） 口唇部が外側に肥厚するもの。31を典型とする。肥厚部下側に沿って横位のナデ痕が残る。30、32は赤褐色を呈し、多量の砂、片岩粒が含まれている。31は茶褐色を呈す。

4類（32~98）

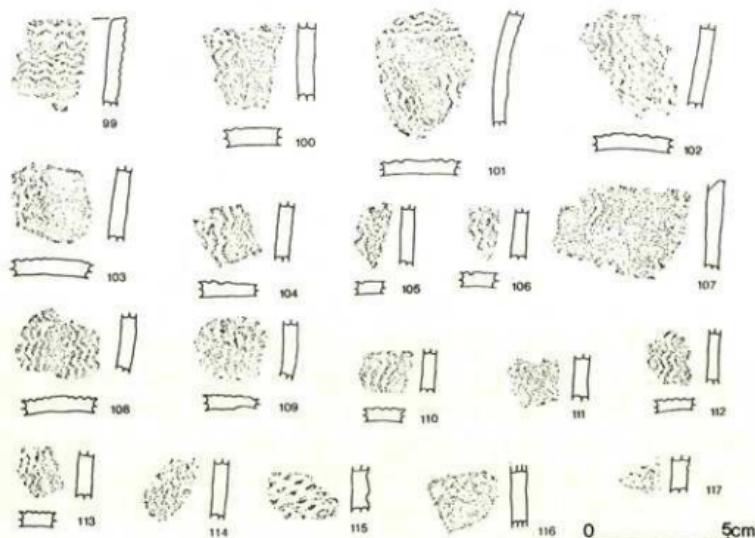
口縁下に一条の沈線が施された燃系文系土器群のうち終末期に位置づけられる類である。北坂遺跡に近接する甘粕山遺跡群（東山遺跡）で良好な資料が豊富に提示されている（宮崎 1980）。本遺跡では総数10片と少ないが形態は一様でなくバラエティーに富んでおり次の5種（a~e）に分類される。また多量の無文胴部破片がありf種に一括する。



第121図 調文土器(8)



第122圖 裝文土器(4)



第123図 繩文土器(5)

a種 (33) 口縁部がわずかに内彎し、口唇上は平坦、角頭状を呈し、直下に端整な沈線が巡る。器面はザラつくが胎土は精撰されており夾雜物は少く、微粒で焼成良、褐色を呈す。

b種 (34, 35) 口唇上は平坦で、外側に肥厚し、オーバーハング状を呈する。沈線は肥厚部からの「段」、ちかい。35は沈線に「重なり」が認められ次のc種に相通じる。肥厚部および以下に横位のナデ痕が残る。胎土に小石、片岩粒を多く含む。焼成は良く堅緻である。

c種 (36, 41) 口唇部は角頭状でわずかに外反し、断続的施文による沈線が巡る。36は器厚5mmと本類中もっとも薄く、くびれ部にやや幅広右下がりの沈線が施されている。沈線下横位の整形痕が顕著である。暗茶褐色を呈す。41はくびれ部に爪を連続的にあてたような施文によるもので沈線は途切れる。器表は入念にみがかれている。赤褐色を呈す。

d種 (37, 38) 口唇部が著しく外反し、肥厚するもの。沈線を施すことによりくびれ部を明瞭にしている。37は沈線施文後器面が磨かれているため凹線状となっている。胎土に多量の夾雜物を含み、茶褐色を呈し他種とは容易に識別される。

e種 (39, 40) 口唇部が内削ぎ状を呈し口唇と沈線が巡る部位との間が幅広のもの。39は補修孔が穿たれている。40はくびれ部からわずかに外反する。器内外の剥落が目立ち、整形が入念に施される本類にあっては特異である。茶褐色を呈す。

f種 (42~98) 胎土、器表調整からa~e種の洞、底部を一括する。ほとんど例外なく44に代表されるように表面は丁寧にみがかれている。内面はさほどでない。78~92には調査時の縦方向の

擦痕がのこる。器面調整は底部（93、96～98）にまで及ぶ。色調は褐色、赤褐色。

5類（99～117）

押型文土器を一括する。総数21片（口縁部2）で過半がAプロックから出土している。山形、楕円格子目文の三種があるが楕円、格子目は各1片で主体は山形文である。山形文には条間がやや幅広なa種と、狭く密接するb種がある。a種は胴部縦帯が空白部をおいて施されているのに対し、b種は密接して施文されることが多く、施文法においても違いをみせるようである。両種とも原体端ははすに削がれている。

A種（99～107、114、117） 99は唯一の口縁部大形破片。口唇部は平坦で外部が張り出す。口唇直下から施文され、5mmの無文部をおき2帶目が施文されている。原体の長さは2.3cm、6条刻み、単位（原体一周分）は把握できない。条の幅は上から1～3、6条が1.5～2mmで4.5条は1mmと狭くなっている。99、100、117には直交する縱、横2方向の施文が確認できる。縦帯は間隔をおいて施される。101は口縁部ちかくの破片。注目されることに縱、横帯の原体が異なる。横帯は条幅（刻み幅）1mm弱、縦帯は2mm強である。縦帯は横帯に接することなく0.5、1cm離れて施文されている。原体の長さ、径は確認できない。102～107は縦帯のみの破片。縦帯間の空白部は102が0.5cm、103が1.2cmを測る。102の施文は平行せず上部で接しそうである。条は103、107が3条以上、102は3条で原体の長さ1.4cmと確認できる。条の幅は1.5～2mm、条間は平均1.5mm前後。器厚は0.6cm前後で胎土に小石、片岩粒を含み、焼成良、褐色、茶褐色を呈す。

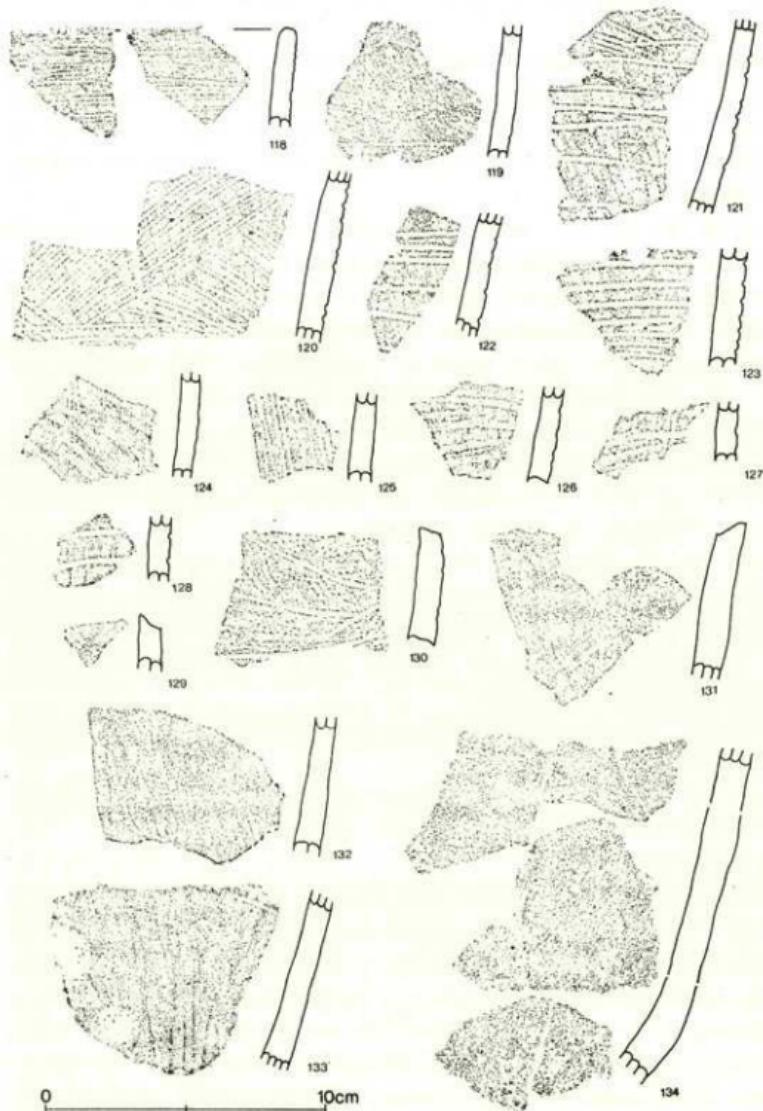
B種（108～114） 胴部密接施文のグループ。条間は1mm前後で、条数は113が4条以上、108が5条以上、110、111が6条以上と前種に比し多い。原体の長さを確認できる資料はないが108では1.5cm以上である。109は施文後軽くナデられた状態を呈し不明瞭となっている。内面に指先をあてたようなくぼみが残る。111は施文が浅い。器厚は0.4（112のみ）～0.6cm、胎土、焼成は前種と大差ない。色調は茶褐色、赤褐色を呈す。

C種（115） 楕円押型文。粒径は0.4～0.5cmでそろっており彫りは深い。施文方向を分明にできない。器厚0.6cm、赤褐色を呈す。

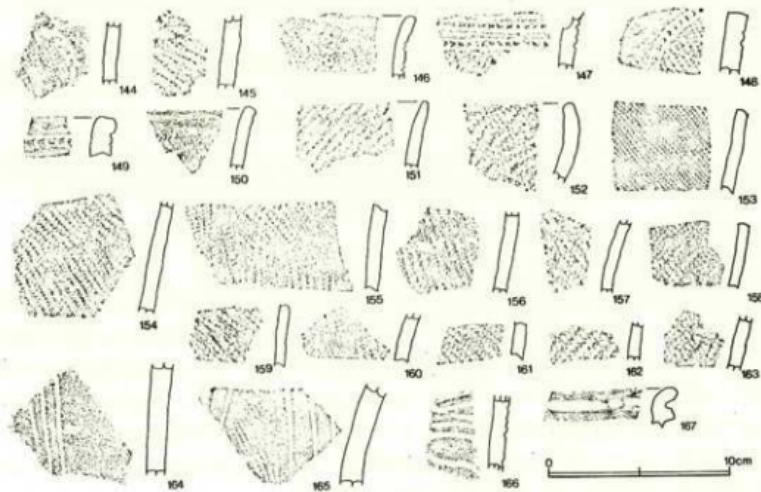
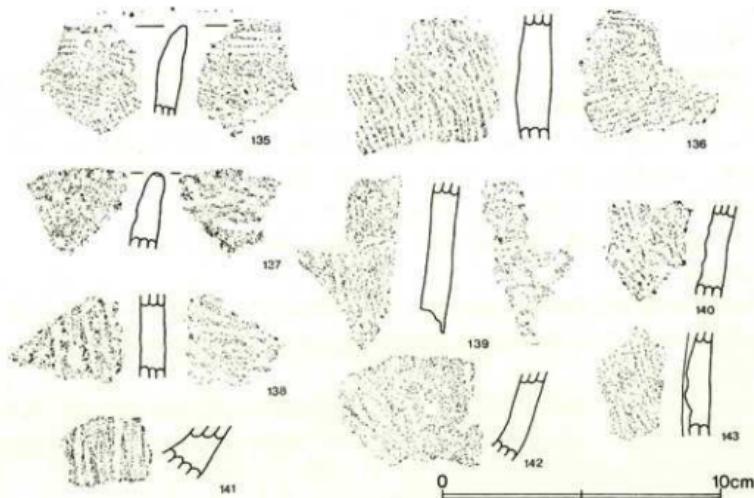
D種（116） 格子目押型文。横位施文と思われる。条は幅1.5mmで、a種の条に似ている。器厚0.6cm。胎土に多量の小石、片岩粒を含む。焼成良く、茶褐色を呈す。

6類（118～134）

田戸下層式土器を一括する。総数35片、一地区への集中はみられず広範囲から散出している。焼成は良く、焼きしまり器内外面とも丁寧にみがかれており（134を除く）褐色、赤褐色を呈す。118～120は同一個体ではかに3片ある（第124図下段）。口縁上部ではやや右下がりの細沈線が横走し（118）、胴上部では鋸歯状のモチーフが構成される。施文は横位区画線→左下がり沈線→右下がり沈線の順である。121、122（同一個体）も同様の構成をとる。123～128、131、132は横、縦位沈線が施されている。124の沈線は細く鋭い。126、127は該式に特徴的なささくれだった浅い沈線が横走する。胎土が118～120に酷似し同個体の底部ちかくの破片と思われる。129、130は沈線間に貝殻痕跡文が横斜位に充填されている。133は底部ちかくの破片でかすかに浅い沈線が観察される。縦帯のみがき痕が顕著である。134は本類に伴う無文土器。器厚1.2cmとふ厚で器面がザラつき凹凸が目



第124図 繩文土器(6)



第125図 繩文土器(7)

立つ。

7類 (135~143)

貝殻条痕文土器を一括する。総数19片。口縁部は135、137の2片のみ。137、138は胎土に繊維を含まず器面がザラつき本類にあってはやや異質である。前頬に含めるべきかもしれない。135は内削ぎ状口縁で条痕が横走する。136、139は表面縦位、内面横位に施文。139、142は施文が弱く無文部が多い。繊維は137、138を除きすべてに含まれているが140はとりわけ多く、内面に焼けぬけた痕の凹凸が激しい。胎土に小石、砂粒、片岩を含み、焼きしまっており脆くない。

Ⅱ群 前期黒浜式 (1類) 諸磯a式 (2類) b式 (3類) 土器を本群とする。

1類 (144、145)

144は0段多条の繩文RLが施文されている。器面に凹凸が著しく、繊維を多量に含んでいるため空洞部が目立ちもらい。茶褐色を呈す。145は繩文RL。赤褐色を呈し黒斑がある。

2類 (146、148、149)

146は朝顔花状に開く口縁部片繩文RLを施文し、竹管を押捺している。148は半截竹管による平行沈線間に同原体により爪形文を加え、一部の地文(RL)を磨消している。149は148と同一個体焼成は良好で堅緻。赤褐色を呈す。

3類 (147)

147は胴上半でくびれる深鉢片。粘土の雑目で破損している。半截竹管により平行沈線を引き、沈線間に爪形文を加えている。爪形は等間に施されているが上下にバラつきがある。148と同じ施文法であるが効果は異っている。150~163は3、4類に属する繩文のみの破片。原体は151がLR、152、163がRL、他はRL。153は1段3条で条が細く、節も小さく整った繩文となっている。

Ⅳ群 (164、165)

中期加曾利E式土器。地文の繩文を磨消し2~3本の沈線が垂下する。沈線は丁寧な施文で断面は丸い。165の地文は繩文LR。加曾利EⅢ式に比定される。

Ⅴ群 (166、167)

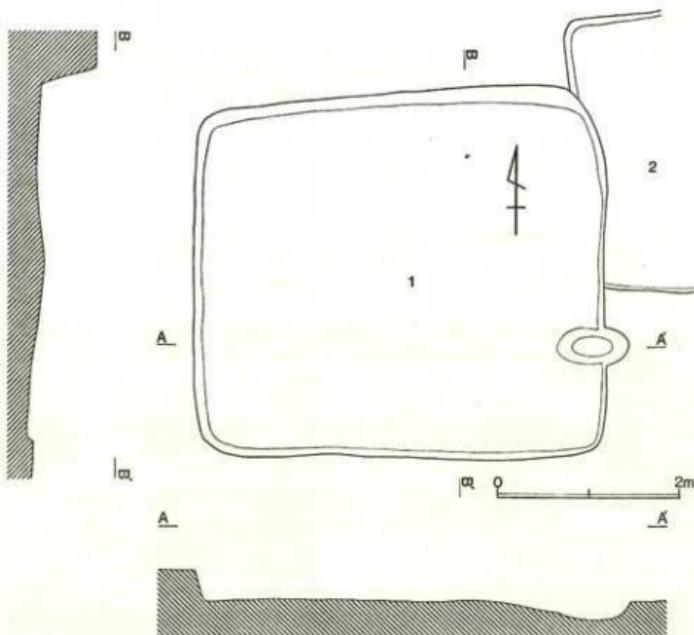
掘之内I式土器。166は幅広な蛇行する沈線が施されている。167は口縁小突起部。円形刺突をはさみ口唇直下に幅広な沈線が横走する。成形時の最終輪積み部できれいに剥されている。

(4) 平安時代の住居跡

1号住居跡 (第126図)

北坂遺跡で検出された住居跡群中、西端にあり21-1Qグリッドを中心に位置している。東辺で2号住居跡を切っている。453×406cmの隅丸長方形を呈し、主軸はほぼ東西にある。褐色土を掘り込んでおり壁高は斜面上部にあたる北辺で60cm、南辺で10cmを測る。カマドは東辺南寄りに構築されている。焚口部幅40cm、壁外に25cmを掘り込んだ小規模なものであった。焚口部は若干窪んでおり、周辺の床面にはうすい炭化物層が認められた。床面中央は2×3.5mの範囲が不規則に盛り上がりしている。最も高い所では北壁下よりも約15cm隆起しており、きわめて堅緻となっていた。2号住居跡と複合する部分では本跡床面が7cm低い。柱穴は欠く。

遺物は一ヵ所に集中することなく、ほぼ全域に床面から5cm以上浮いた状態で出土している。



第126図 1号住居跡

1号住居出土土器（第127図）

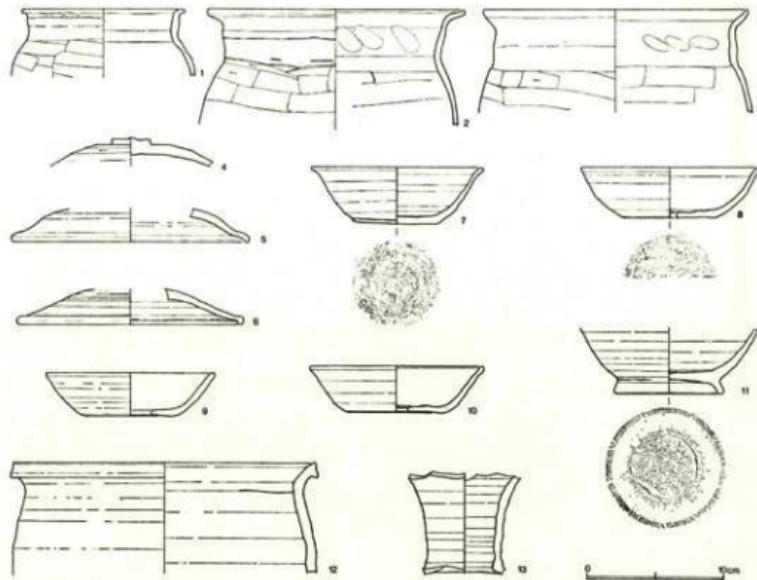
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
台付甕	1	口径 12.0	コの字状口縁。口唇部器厚うすく水平にちかく外反する。肩部に棱をもつ。	口縁部ヨコナデ、胴上部横ヘラ削り暗赤褐色。	口縁部彫
甕	2	口径 18.8	肩上部がくの字状を呈し、口縁上半が大きく外反するコの字状口縁胴が張り、口縁部との境に段をもつ。口縁直行部やや肥厚。	口縁部雄なヨコナデ。口縁直行部上半にある輪積み痕を消しきれていない。内面には指痕をこす。胴部横、斜のヘラ削り。赤褐色。	口縁部彫
甕	3	口径 19.4	コの字口縁。口縁上半は外反するが口唇部でわずかに内凹する。肩上部の段は明瞭。	口縁部ヨコナデ。胴上部横、斜のヘラ削り。淡赤褐色。	口縁部彫
蓋	4		つまみ部は扁平。胎土に多量の小石を含み器表に目立つ。	ミズビキ成形。天井部は回転ヘラ削り調整、黄灰色を呈し軟質。	天井部のみ残存。

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋	5 6	口径 17.4 口径 16.6	5、6ともに器高が低く、天井部ふ厚なつくり。6は据部をおり返し受部を作出。	ミズビキ成形。6天井部は回転ヘラ削り調整。5は青灰色、6は酸化炎焼成で茶褐色、淡赤褐色。	5、6天井部を欠く。
杯	7	口径 12.5 器高 4.2 底径 6.0	体部下半にふくらみをもち口唇部はわずかに外反する。底部ちかく段をもつ。	ミズビキ成形。底部周囲は磨滅が著しい。回転糸切り。小石多含。暗灰色。	
杯	8	口径 12.9 器高 3.7 底径 6.5	体部中程に稜をもち内屈するよう立ち上がる。口唇内部に深い稜をもつ。	ミズビキ成形。底部回転糸切り。外面にロクロ痕を明瞭にこす。やや軟質。灰色。	口縁部彫
杯	9	口径 12.4 器高 3.2 底径 6.5	体部上半はふ厚なつくり、直線的に開く。底部は上げ底で3mmとすい。	ミズビキ成形。磨滅が著しく、内外面ともあれている。軟質。黄灰色。	口縁部彫
杯	10	口径 12.6 器高 3.4	体部直線的開く。口唇部は丸味をもつ。底部はうすい。	ミズビキ成形。底部回転糸切り。小石多含。焼成良。暗灰色。	口縁部彫 底径 7.3cm
杯	11	高台径 8	体部下半はふくらみをもつ。高台は高く外側に大きく張る。端部は丸い。	底部回転糸切り。貼付高台。高台接合部の整形は糸切り面と一致しないが丁寧である。胎土に10mmの大の小石含む。軟質。灰褐色。	
甕	12	推定口径 22.0	口縁部がくの字状に外反し、口唇上下端は鋭い稜をつくる。口径と胴部最大径はほぼ等しい。	ロクロ整形。内面ロクロ痕顯著。内外面に気泡のぬけた小孔が目立つ。焼成良。灰色。	口縁部彫
長頸甕	13		頸部下側はしまり、口縁にむかひゆるやかに開く。内外面に灰釉がかかり暗緑色、黒色に発色している。発色には大きなむらがある。	ミズビキ成形。成形時の凹凸が著しい。肩部まで引き上げ、その上部頸部に頸部がのる。部分的に器壁に空隙が認められる。	頸部のみ 搬入品

2号住居跡（第128図）

1号住居跡の東側に位置しており西辺の一部は同跡に切られている。482×317cmの長方形を呈し主軸は東西をさす。壁高は斜面上部にあたる北辺で50cmを測るが、南辺中央では5cm、東南コーナー部では掘り込みを確認できない。カマドは北壁のやや東寄りに構築されている。焚口部幅57cmで壁外に70cm程掘り込んでおり、側壁は3~5cmにわたり焼土化している。奥壁部は急傾斜で立ち上がり底は床面とほぼ同レベルとなっている。床面は平且、堅緻で、掘り込みが確認できなかった。東南コーナー部でも床面の状況から容易にその範囲を把握することができた。柱穴を欠く。

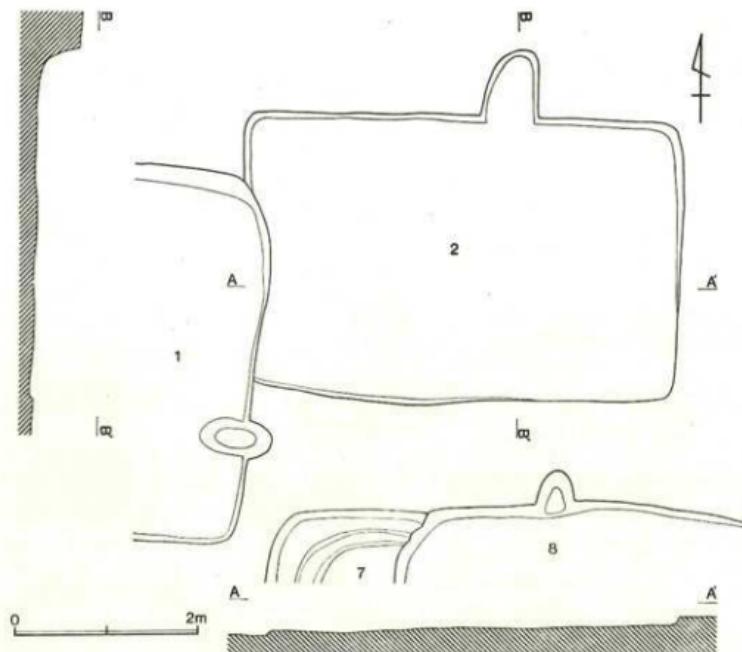
遺物は床面から10cm前後浮いて出土している。第129図8の内耳および9の天目茶碗はプラン確認時に出土したものである。



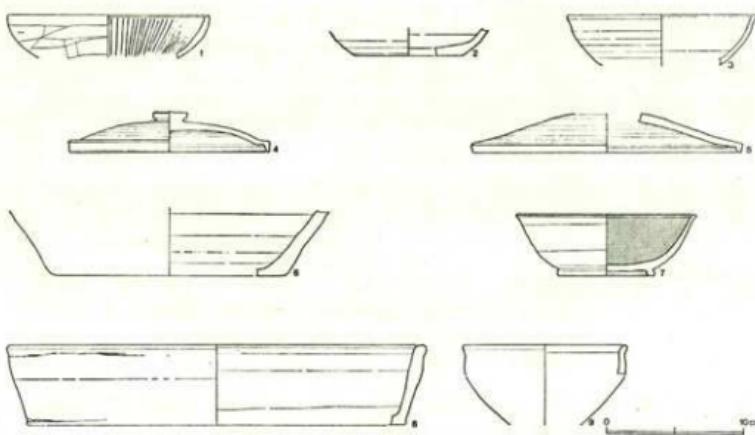
第127図 1号住居跡出土土器

2号住居跡出土土器 (第129図)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 壺	1	口径 14.8	体部上半が肥厚し内彎しながら立ち上がる。口唇上は平坦。内面に細い縞文が施されている。	口縁部ヨコナデ。以下ヨコヘラ削り。胎土緻密。焼成良。赤褐色。	口縁部%
須恵器 壺	2	底径 3.9	体部下半が彎曲して立ち上がる。底周辺は磨滅している。	ミズビキ成形。底部回転糸切り後周辺部、体部下端を回転ヘラ削り。暗茶褐色、暗黒褐色。焼成良。	底部%
壺	3	口径 13.8	体部は内彎して立ち上がり口唇部丸味をもつ。底部を欠くが残存部からすると器高が低く底径の大きい底部をもつようである。	ミズビキ成形。ロクロ痕が顯著にのこる。暗赤褐色、焼成極良。2と同一個体とも考えられる。	口縁部%
蓋	4	口径 14.6 器高 2.9	扁平、ボタン状のつまみをもつ。裾部端は直行する。天井部はヘラ削りされ平坦。	砂粒多含。灰黒色。全体的に丁寧なつくりで焼成良。	口縁部%



第128図 2号住居跡



第129図 2号住居跡出土土器

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋	5	口径 20弱 高さ 5cm	天井部を欠く。天井部はヘラ削りされるがつまみ部から器へはほぼ直線的に移行する。重ね焼きされており直接炎があたった据周辺では自然釉がかかる。	ロクロ痕顯著。大ぶりであるが丁寧なつくり。灰、黒色を呈し施成良。	2、8、9、11号住から同一個体出土。 口縁部少
甕	6	底径 17.0	胴部に比し底部がうすい。	軟質。外面黄褐色、内面黒色。器面上に凹凸が目立つ。内面には、気泡のぬけた小孔顯著。胎土に小石砂粒を多く含む。	
灰釉壺	7	口径 13.2 器高 4.5 底径 7.1	体部下半が張り、上半はほぼ直線的に開き口唇が外反する。高台は低く外側は丸味をもつ。灰釉は口唇上から内面にかけて流し掛けされている。見込み部は釉が剥がれザラついている。	ロクロ痕顯著。外面灰白色。釉は暗緑色に発色している。	K-14窯式 口縁部少
内耳	8	口径 30強 器高 5.9	9とともに2号住居跡に伴う遺物ではない。口唇上は平坦、残存部底は6mm。	外面スス付着、黒色を呈す。胎土は淡黄褐色、軟質。	
茶碗	9		美濃、鉄釉天目茶碗。	釉はあつく、暗いこげ茶に発色している。胎土は淡黄灰色。	口縁部小片

3号住居跡（第130図）

2号住居跡の東方約6mに位置しており、本遺跡唯一の単独で検出された住居跡である。432×359cmの規模で主軸はほぼ東西をさす。北辺が弧状に張り出す隅丸長方形プランを呈する。壁高は斜面上部にあたる北辺で40cm、南辺では8～15cmを測る。カマドは東辺中央に構築されている。焚口部幅45cm、壁外に約40cm掘り込んでおり、奥壁部に向かい緩やかに立ち上がる。焚口部は床面よりわずかに低く、台付甕（第131図1）が横転していた。柱穴は確認されなかった。床面は南西コーナー部が若干深くなっているほか全面に凹凸が目立つが堅固であった。カマド右側、東南コーナー部に73×68cm、深さ18cmの貯蔵穴が掘られている。

遺物はさきの台付甕と須恵器壺（第131図2）が床直で出土したほかは覆土出土である。

3号住居跡出土土器（第131図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
台付甕	1	口径 13.9 器高 16.2 高台径 9	口縁部がくの字状に折れ、上半はさらに若干外反する。肩上部に後をもつ。胴部はほぼ球状で中程に最大径がある。胴部下側および脚部はぶ厚なつくり。	口縁部ヨコナデ、胴部ヨコ、斜のヘラ削り。胎土に砂粒多含。赤褐色。	少